
怨霊少女ぶらり旅

葛城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怨霊少女ぶらり旅

【Nコード】

N2775F

【作者名】

葛城

【あらすじ】

姫子は幽霊である。 齢300歳を超える、れっきとした幽霊である。 しかも、ただの幽霊ではない。 300年前は、彼女も普通の人間であり、どこにでも居た普通の村娘の一人であった。 だがある日邪教集団の手によってさらわれ、生贄の儀式にて邪神の力と記憶を得た強力極まる幽霊である……が、彼女は邪神召喚のときに使われた結界によって閉じ込められてしまい、それからずっと暇な毎日を送っていた。

ブログ（前書き）

更新は不定期です。 霊に対して自分なりの解釈をしていますので、
そういうのが嫌な人は観覧しないほうがよいと思います。

プロローグ

薄暗い室内に、一人の少女がいた。
飽きたわ。

少女は湿気に溢れた暗い廃屋の中で、一つ、ため息を吐いた。その姿はとても美しく、場所が場所でなければ、大いに人の目を集めてしまうくらいの魅力があった。

つまらないわ。

少女は錆付いた金属器やら今にも倒れてきそうなくらいボロボロになった木箱を見据えて、ため息を吐いた。その姿は幼く、せいぜい10代前半にしか見えなかった。

誰か来ないかしら。

えいや、と木箱を重ねた台から飛び降りる。背中まである艶のある黒髪がさらりと流れ、白いワンピースが風にはためいた。軽く首を捻ってみるが、骨は鳴らなかった。

……することがないのって、本当に暇なのね。

白いワンピースの少女……名を、姫子といった。

『ああ、誰か来ないかしら。幽霊でいるのも結構苦痛なのよね』

姫子は、もう一度ため息をこぼした。

そう、姫子は幽霊である。年齢300歳を超える、れっきとした幽霊である。

しかも、ただの幽霊ではない。300年前は、彼女も普通の人間であり、どこにでも居た普通の村娘の一人であった。ある日邪教集団の手によってさらわれ、生贄の儀式にて邪神の力と記憶を得た強力な悪霊になってしまった前は……の話だが。

邪神召喚の儀式が失敗したのか、何か事故が起こって失敗してしまったのかは姫子には分からない。気づいたとき姫子の肉体は塵になっただけで、気づいたとき姫子は普通の人には見えない存在……いわゆる幽霊という存在になってしまっていたのだ。

もちろん、姫子は激怒した。それこそ世界中の生命に死を与えんばかりに暴れまわろうとした。だが出来なかった。

『いったい、いつになったら出ることが出来るのかしら……』

足音を立てずに部屋の隅に向かう。幽霊なので、足跡なんて残らないし、そもそも質量を持たない幽霊に足音を立てるなど無理な話まあ、方法はあるが、今は必要ない。

部屋の隅、暗くてよく見えないが、そこには古びたドアがあった。そのドアノブに手を伸ばし、あと数センチで指がドアノブに触れようとした瞬間、姫子の指から青い閃光がほとばしり、そこから凄まじい激痛が走った。

姫子は眉ひとつ動かさず、落ち着いて手を引いた。見ると、さっきまで染み一つなかった小さな手が焼け爛れていた。人差し指、中指、薬指の3本が特に酷く、爪は完全に剥がれ、中から白い骨がはみ出ていた。

『忌々しい結界め……長い時を経てまだまだその力は衰えないか』

姫子は、はき捨てるように悪態をついてドアを見つめた。焼け爛れた手はすぐに姫子の意思に反応し、新しい皮膚やら筋肉やらが盛り上がる。ほんの一瞬で、姫子の小さな手は元通りになった。

掌を握ったり指を一本ずつ立てたりして、感覚を確かめる。感覚も元通りになっているのを確認してから、一息ついた。

姫子がどうして暴れることが出来なかったのか？

それは姫子がいる部屋全体に強力な結界が張り巡らされているからだ。邪教集団が邪神の力を抑えるために作った結界なのだが、邪神の力と記憶を受け継いでしまったため、姫子もある意味では邪神と同じ存在になっているため、結界の力が作用して出ることが出来ないのである。

そのため姫子は300年間、人里離れた山奥にある潰れかけの廃屋の中にずっと一人で過ごしてきたのだ。そんな場所にいきなり連れて来られて殺されて閉じ込められてしまえば、全てを憎んでもおかしい話ではない。

だが、何かを憎み続けるのもそれなりに疲れる。100年程、想像の他人に罵詈雑言を浴びせる日々を送れば、次第に自分のしていることがむなしくなってくる。さらに150年も経てば怨んでいたこともどうでもよくなってきた、さらに50年も経てば何故怨んでいたのだろうと首を傾げてしまいうらいになってしまっていた。

しかも、姫子がいる廃屋の近くにある建物。そこは終戦末期に建設された医療施設なのだが、そこでは毎日数え切れないくらいの死体と死に掛けている人間が運び込まれてくる地獄絵図のような世界が広がっていたのだ。邪神の力を使って透視し続けて、担ぎ込まれていく死体を見て、毎日飽きずに殺しあっているな、と姫子は常々考えていたせいもあってか、恨みなど微塵もなくなってしまうていた。

それどころか、むしろこんな場所に閉じ込められてある意味良かったとすら思っていたのだ。なぜならば。

『ここを出ることが出来た暁には“くるま”と呼ばれるものに乗ってみたものだ。あと、“ちょこれーと”とかいうのも食べてみないな。甘いとはこういった味なのだろうか』

姫子が生きていた時代には夢にも思わなかったものが外の世界にはあるからだ。死を目前にした人達が運び込まれていくとき、何度かその人達に食べさせていた“ちょこれーと”という食べ物。彼らはそれを食べるたび、本当に嬉しそうにしてから死んでいったことを、今でも覚えていいる。

姫子は両手足を伸ばし、うーんと、気を引き締めた。

『はあー誰がこの結界を解いてくれないかなー』

生贄の台の代わりに設置した木箱の台に、腰掛ける。一時的な備品置き場にされていたこの場所には、何も入っていない木箱とよく分らない金属品しかない。元々あった生贄の台は100年程度で風化してしまった。といっても、木箱の方も湿気で腐ってしまったていて、後10年もすれば跡形もなく消えてしまいそうなのだが。

『誰でもいいからここから出してよー』

姫子の哀願が暗い室内に反響した。

この日から2ヶ月後、長年の願いが叶う日がやってくることになるとは、このときの姫子には夢にも思わなかった。

プロローグ（後書き）

感想の返事を書くのが凄く苦手だ……自分ってこんなに口下手なんだと嫌になってしまう。感想自体は凄く嬉しいのに、どうして書けないのだろうか。

怨霊少女、テレビ局へ行く（前書き）

自分なりの幽霊に対する解釈が記述されています。

そういったことが苦手な方や、許せない方は観覧をお控えください。

怨霊少女、テレビ局へ行く

暗闇の中で、五月蠅い何かの頭の中を反響していた。

最初、姫子は特に気にすることもなく睡眠を貪っていた。だが、五月蠅い何かはさらに音量を上げていき、遂には無視できないほどになっていた。

妙に五月蠅いわね……誰か人が来たのかしら？

積み重なった木箱から身体を起こし、目を開ける。途端、強い光が飛び込んできた。慌てて木箱から飛び降りて光から逃れた。

見ると、狭い廃屋の中には姫子を除き3人の男性が佇んでいた。

一人は肩に何か鉄の塊を担いでいて、一人は光を放つ大きな何かを担いでいた。

姫子は大きな欠伸をしてから、3人を見据えた。

『むう、あれは確か“かいちゅうでんとう”とかいうやつか。前に見たときよりもずっと大きいな。それに、あの肩に担いでいるのはいったいなんだ？』

見たこともない機械に、姫子は首を傾げた。

実際は姫子の言う懐中電灯ではなく、照明用のライトで、もう一つは撮影用のテレビカメラなのだが、機械文明にほとんど触れたことが無い姫子には分からなかった。

『騒がしいのは嫌いだ。さっさとどっかに行ってくれ』

ここ数年、姫子の居る廃屋にも人が来ることも珍しくなくなった。近くに戦争の名残である医療施設が残っているせいか、はたまた他の理由があるせいか、一週間に一度は人が姫子の居る廃屋を訪ねてくるのだ。

当初は姫子も久しぶりの他人であるからして、人が来るのを心待ちにしていた。だが、それも半年もすればどうでもよくなった。

なんせ、彼らには姫子の姿が見えないのだ。よしんば邪神の力を使って見えるようにしても、彼らは怖がって逃げてしまうので会話

することもできない。ならば彼らと同じように触れる実態にしても結果は同じだった。見て触れるようになるために、それなりに疲れることをしているのに、だ。

他人から見えて触れるようになるためには、物質世界の住人ではなくなつた姫子が、同じく物質世界の住人になるしかない。質量を持たない姫子は、邪神の力を使って一時的に肉体を作り出してからでないと、彼らに触れることが出来ないのだ。

ただ、姿を見えるようにするだけなら簡単なので、騒ぐ彼らを時々脅かして暇をつぶしたりしていることを、彼らは知らない。

閑話休題。

とりあえず、暇つぶしも兼ねて姫子は3人の会話に耳を済ませた。

「なあ、田中君、本当にこんなところに幽霊がいるの？」

男の一人、髭を生やした小太りの男、重田は、カメラを担いでいる男に尋ねた。

服の上からでも分かる筋肉質な男、田中は、肩のカメラに何度か手を当てながら答えた。

「らしいですよ。浅田さんの話だと、この廃屋には女の霊が出るとか。ねえ、浅田さん？」

ライトの光量を上げていた男、浅田は、そうだよと視線をライトに向けたまま返事した。ライトの光を反射している滑らかな頭は、禿げているというより剃っているという方が正しいようだ。

『あの“かいちゅうでんとう”を持っているやつが、“あさだ”というのか』

姫子はあんまり眩しくしないでほしいと思いつつも、彼の名前を頭に入れた。

「インターネットと聞き込みから情報を集めました。けっこう、信憑性がありそうなんですよ、ここ」

「信憑性があるってねえ、浅田君」

「まあまあまあ、重田さんも落ち着いて。元々100回やって1回当たれば儲けものの企画なんですから。それにどうせ編集してしまえますし、これくらいそれっぽいのが丁度いいんですよ」

浅田は深く頷いた。

「田中さんの言うとおり。それに、最低限の人数でやるっていうのもこの企画の目的ですし、今は学校七不思議の企画とかツタンカーメンの呪いとか、メジャーな企画の方に人数裂いていますしね」

「この人数の少なさっていうのもネタってことなんですよ。テレビ局も、予算をあっちに使っていますから……ねえ」

「うーん、それもそうだけど……まあ、やるしかないか……」

はあ、と重田はため息を零した。

『太った髭男が重田。変な物持っているやつが田中。』かいちゅうでんとう』を持っているやつが浅田……『てれびきよく』か……テレビ、のことか？』

聞きなれない言葉に、姫子は頭を悩ませた。今まで何度も人が尋ねてきたことはあったが、目の前の彼らのような人達は居なかったのだ。透視の力を使ってある程度は外の情報を知ってはいるが、それも微々たるものでしかない。

姫子が彼らの話していることを理解するためには、あまりに情報が足りなかった。

姫子がそうやって頭を悩ませているうちに、彼らはとっとと仕事を終わらせようと、配置についていた。カメラを担いだ田中が、手の平を広げて合図する。

重田は丸い腹を揺すって気を引き締めた。浅田の持っているライトが廃屋の中をさらに明るく照らす。

その眩しさに我に返った姫子は眉をしかめた。

田中の立てられた指が4本になる。

3本。

2本。

1本。

0本。

「……今、私はインターネットで噂されている、とある山中の廃屋に来ています。私の後ろをご覧ください」

重田が大げさに後ろを指し示す。その先にいた姫子は、慌ててそこから離れた。

「一見すると日本中にいくつもある寂れた廃屋にしか見えません。中もご覧の通り、何も無い。ですが、ここ、この廃屋の近くに、実は大戦末期に建設された医療施設があるんです」

重田は身振り手振りでいかにもこの場所が、いわくつきの場所であるように見せようとしていた。

「そこでは大勢の人が死んだという話が残っていて、今でもふもとの方には……」

それから数十分程、重田の口上が続いた。途中、幽霊を呼び出す方法やら何やら何度か行つたが、結局何も起こらなかった。

その方法は邪神の記憶から見ても、嘘っぱちの方法ではなく本当に幽霊を呼び出す方法ではあった。だが、素人の物まね程度で行う召霊術で呼び出せる霊など高が知れているし、そもそも霊としては最高位の邪神である姫子がある場所に居るのだ。

自分よりも数百倍強力な存在が居る場所など、いくら悪霊でも召喚されようとは思わない。はつきり言つて、悪霊だつて怖いのだ。

召喚されようとしている霊が自身の存在に気づいて逃げていくのを尻目に、姫子は欠伸をかみ殺しながら、その様子を眺めていた。

「……殺人鬼を生み出し、この廃屋では、何百年も前から何十人も少女が、その殺人鬼達に監禁されて殺されていったそうです。今も時々、その殺人鬼を恨んでこの世に現れるというワンプーアの少女は、本当に実在するのでしょうか……」

重田の口上が終わり、廃屋に沈黙が流れた。

「……はい、撮り終わりました！」

田中の言葉に、ふわりと、張り詰めていた空気が和らいだ。男達の顔に笑顔と苦笑が混ざり合った微妙なものが浮かんでいた。

浅田はライトを手早く折りたたむと、車のエンジンを入れてきます、と言つて部屋を出て行つた。

重田は浅田からタオルを受け取ると、汗を拭きつつ口を開いた。

「本当にこんなんでいいの？ 自分で言うのもなんだけど、この設定無理があり過ぎない？ 医療施設何の関係もないじゃん」

田中は、はつきりと苦笑した。

「それも企画の内ですよ」

「でもね、なんでここのの？ 普通隣の医療施設の方を取材しない？」

「それも企画の内ですよ。どうして隣の医療施設を取材しないって、そういうツツコミが入るようにしているんですよ」

「ああ、なるほど」

和やかに雑談する田中と重田を尻目に、姫子は首を傾げた。

『ここに居てから数百年間経っているが、殺人鬼がここを尋ねてきたことなど一度もない……しかも、ワンピースの少女というのは私なのか？』

この廃屋自体、姫子が生きていた当時から在ったものではない。

生贄の儀式に使われた掘つ立て小屋は60年前、日本軍に取り壊されたのだ。その後、備品の貯蔵場として簡易の小屋が建てられ、それが今のこの廃屋なのだ。

それに、この服も……。

姫子は自身の身体を見下ろした。自分が着ることで、この世あらゆるものにした白いワンピース。あの時から少しも汚れていない綺麗な白色が目映った。

いや、しかし、これは昔ここに置かれた木箱の中に入っていたものを頂戴したものなのだが……。

それを伝えるべきか、それとも伝えない方がいいのか。

そもそも怖がらせないでどうやって伝えようかと頭を悩ませてい

る姫子の耳に、聞き逃せない言葉が飛び込んできた。

「うーん、なんだかトイレに行きたくなってきた。田中君、この近くに公衆トイレはあったかな？」

「ありませんよ、そんな便利なもの。近くのコンビニまで一時間はかかりますから、どこか適当な場所ですてくださいよ」

「やっぱり、と重田が唇を、への字にした。とても嫌そうに見えた。でもな……外は虫とかが多いし……」

「ここでやればいいじゃないですか」

「お、それがあつたか？」

『なにを！？』

重田の表情に笑顔が生まれた。反対に、姫子の頬は引きつった。

「それじゃ、私はここで済ませてから行くから、先に車に戻っていい」

「分かりました」

『バ、バカ、そこで止めるのが大人というものだろう！』

廃屋から出ようとする田中を引きとめようと右手を伸ばす。だが、その手が結界に触れた途端、青い閃光がほとばしり、それ以上進めなかった。

激痛に歯を食いしばって手を引くと、右手の指全部が焼け爛れて消失し、手が丸くなっていった。

力を右手に込めて傷を修復。一瞬で完治すると、今度は重田の方に向き直った。

『おい、私の寢床に粗相をする』

「ふい~~~~」

『もう手遅れなのか！』

姫子の視線の先には、気持ちよさそうに廃屋の壁に排尿する重田の姿があつた。壁から流れ落ちた尿が、湿った床に流れていく。室内にはアンモニア臭が立ち込めた。

姫子は頭痛を覚え、あどすさつた。

まさか廃屋に排尿される日が来るとは思いもしなかった姫子は、

泣きたい気持ちで頭を抱えた。

思えば、自分の人生はどこから道を踏み外してしまったのだろうか。

平凡な村娘として生まれ、他の人達と同じように結婚し、子供を生み、死んでいくはずの人生だったはずなのに……それが今やこれだ。

よく分からない邪教集団にさらわれたかと思えば生贄にされ、よく分からないうちに邪神の力と記憶を受け継ぎ、よく分からないうちに幽霊となつて早300年。生贄に必要なだったらしいが、杭が皮膚を突き破つていくのはとても痛かった。

そうして300年、生きてきた……じゃない、死んできた仕打ちがこれか？

『なあ、頼むからもう止めて』

「ふん、ふふん、ふふーん」

顔を上げると、重田は気持ちよさそうに口笛まで吹いていた。

その締めりのない顔を見て、姫子の心の奥にある何かが切れた。

姫子の胸に殺意が沸々と芽生えてくる。このまま目の前の男の魂を食つてしまえとすら考えてしまう。その様は悪霊と呼ぶに相応しい凄みがあつた。

悪霊とは、他者の魂を取り込み、または害を与える幽霊を指す。

悪霊に近い存在ではある姫子も、他の悪霊と同じように他の命を食らうことでその存在を保ち続けている。一昔前は死に掛けていた軍人の魂も食べていたりしたこともあつたが、ここ数十年は食べていない。封印されているので、姫子の存在が消耗されることがないため、魂を取り込む必要がないのだ。

だが、食わなくても平気だが、食べていけないわけではない。300年も幽霊として過ごしてきたのだ。もはや姫子にとって人間とは、自分を楽しませてくれるモノ、自分の腹を満たしてくれるモノでしかないのだ。

『ふ……ふふふ、ふふふふふふふ……』

どこか正気を失った瞳が、重田を見つめる。姫子の口から漏れた不気味な笑い声に、廃屋の外を浮遊する魑魅魍魎が我先にと逃げ出していく。

姫子の身体から黒い霧が、滲み出る。瘴気と呼ばれるソレは、あらゆる生命を蝕む毒の霧だ。本来なら肌寒い程度の影響しか与えない弱い毒だが、姫子の出す瘴気は威力が違う。

霊に対抗する力『霊能力』を持っていない人間なら一息吸うだけで寿命を縮めてしまう程の濃度なのである。姫子を見ることができないまでも、存在を感知することもできない重田が吸えば、ひとたまりもないだろう。

『そういえば久しく人の魂を食べていなかったわね……たまには新鮮な魂も食べてみようかしら』

音もなく、姫子の身体が揺れる。一步、また一步、重田へ足を進める。

姫子から漏れ出した瘴気が結界に触れ、青い閃光となって消える。だが、それで終わることはなく、次から次へと溢れ出していく瘴気が結界と衝突する。

ふわりと、姫子の右手が動いた。瞬く間に右腕全体が黒い瘴気に包まれていく。数秒後には、まるで液体に浸したみたいに真っ黒になっっていた。

その手がゆっくり重田の背中に伸ばされる。

『さあ……いただきます』

そうして重田の魂が姫子に食われ……ようとした瞬間、手が止まった。

『……え？』

姫子の腕を止めたのは、長年姫子を閉じ込めてきた結界だった。

『結界が……』

重田の足元あたりの結界が消えていた。正確には、無骨な石床に書かれていた、姫子を封じ込めるための、古代文字の円陣の一節が、だ。姫子にしか見えないものだが、大量の砂埃が入っているこの廃

屋の中では、たとえ見えていたとしても気づかなかっただろう。

その円陣の、幾何学的な模様と古代文字によって描かれた結界の一節が消えていたのだ。今まで何度も破ろうとしても破れず、何度も文字を消そうとしても触れることもできなかった結界の文字が、一部ではあるが消えていたのだ。

どうして？

姫子は結界が消えた部分……つまり、重田の足元辺りに顔を寄せた。鼻につくアンモニアの臭いも無視して、原因を探る。

300年という長い年月を掛けてもどうしようもできなかった結界が、なぜ？

『……あは』

その疑問を解く原因は意外と早く見つかり。

『あはは、はは……こんなことって……』

意外な理由を姫子の頭は導き出した。

姫子は、アンモニア水に溶け込むように消えた古代文字……つまり、重田の出した小水によって消えた文字のあたりを見つめた。

「ふいい~~~~~ぶえつくしゅん！」

廃屋中に響き渡る重田のクシャミが、狭い室内に反響した。その下で流れ続ける小水の放流は止まろうとしていたが、床を流れる小水はさらに範囲を広げていた。

その小水は結界の役目を果たす古代文字を、少しずつ消していった。

結界を突破する鍵、それは意外なものであった。いや、ある意味ではそれは自然なことなのかもしれない。

『ははは……そうか、生きているやつじゃないと駄目なんだ』

姫子は、零れ出る笑いを止められなかった。不思議な気分だった。楽しみにしていたお菓子が思っていたより不味かったような、ある種の失望感が胸を貫いていた。

ずっと、ずっと姫子は考えていた。いくら力を持った邪教集団とて、はるか高位の存在である邪神を封じ込めることが本当に可能な

のか、ということ。

姫子は、いつもすぐに答えを出した。邪神の力と記憶を受け継いだ姫子だからこそ、すぐに答えが出た。

絶対に不可能だ、と。

ポテンシャルが違いすぎるのだ。それこそ、鼠が像の歩みを止めようとするくらい無謀なことなのだ。

力では絶対に敵わない邪神を封じ込める方法。それは、生きている者と死している者を区別することで可能にしていた。生命の出す液体ならどんなものでも効力を消してしまう脆弱性を持たせる代わりに、命無き者の、どんな力でも突破できない最高の結界にしていたのだ。

姫子の脳裏に駆け巡る過去の記憶。走馬灯のように走り去っていくそれらは、姫子自身、とても味気なく代わり映えのないつまらないものであった。

『減少の技法……よもや、こんな方法で使っていたとは』

姫子は深いため息を吐いた。今までの鬱屈した感情の全てが、外へ流れ出ていくような感覚を覚えた。同時に、心地よい活力が沸いてくるのを実感した。

そうだ、そうだ……結界が破れたんだ……もう、私は自由なんだ！
姫子は今にも踊りだしてしまいそうな心と身体を意思で抑え込んだ。素直に喜びを出せるほど姫子は若くないし、なんだかんだいって、精神年齢は300歳のお婆ちゃんなのだ。

だから、姫子はニヤニヤと気持ち悪い笑みを浮かべる程度にした。もつとも、その笑顔も他人から見れば、見た目相応の可愛らしい笑みなのだが……。

そんな姫子の気も知らない重田は、2、3度身震いした後、おもむろに大きく欠伸をすると、足早に廃屋を出て行った。

『……さて、私も出て行くとするか』

姫子は中指と親指を合わせた。乾いた音と共に指が鳴ると、姫子にしか見えない円陣が一瞬で吹き飛び、消滅した。300年間姫子

を閉じ込め続けた結界の、最後であつた。

『さて……』

姫子は悠々とドアへと近づき、ドアノブへ手を伸ば……そうとした。

一瞬、結界に身体を焼かれる苦痛が蘇ってきた。けれども、すぐに頭を振ってその考えを追い出し、一息合間を入れる。わざわざドアから出なくてもすり抜ければいいという考えが浮かんだが、それもすぐ却下した。

このドアから出ることに意義がある。大丈夫、私は大丈夫だ。ゆつくりとドアノブへ手が伸びる。

後5センチ。

後3センチ。

後1センチ。

そして、姫子の手がドアノブを掴んだ。

『……思えば、長かった』

ドアノブを捻り、ドアが開く。開いた隙間から入ってくる日の光がとても眩しい。

『……あ……』

気づいたら、姫子はドアを開け放っていた。

姫子の眼前には、寂れた緑が広がっていた。ボロボロになった医療施設、伸び放題に繁茂している木々や雑草、どこから聞こえてくる虫の声。お世辞にも、見栄えの良い景色ではなかった。

だが、姫子にはとても……今まで透視して見てきた景色など比べ物にもならないくらい……それらが愛おしく、美しく見えた。

怨霊少女、テレビ局へ行く（後書き）

今後、グロテスクな描写が入るかと思われますので、その都度注意書きしておこうかと思っています。

怨霊少女ぶらり旅…さらばテレビ局（前書き）

この話は霊に関する自分なりの解釈を行っています。ですので、そういったことが受け入れられない方は読まないことをお勧めします。

怨霊少女ぶらり旅：さらばテレビ局

重田たち3人と姫子に乗せた車がテレビ局に着いたとき、既に夜空は暗く、街灯が輝く眩しい夜になっていた。姫子にとってそれらの街灯も興味をそそるもののだが、気にする余裕はなかった。

今、姫子は感動の大河を漂っていた。あまりの感動に足腰が頼りなくなり、今にもへたり込んでしまいそうになるのを、意地で耐えていた。

重田たち3人が集まって話し合っているのを尻目に、ただただ今しがた見てきた想像外の世界を回想していた。

「今日の予定は全て無事に終わりました。ありがとうございます！」

「「ありがとうございます！」」

重田の掛け声と共に、田中、浅田の3人は、解散した。重田はこの後別の収録があるため他県へ。田中、浅田の2人は別番組の収録のため、テレビ局へと戻っていった。

姫子はそれらを、黙って見届けた。というより、そうすることしか出来なかった。

なぜならば。

「……『くるま』とは……本当に速いものだな」

車のスピードに酔いしれていたからだ。

姫子の想像していた『くるま』と、実際に乗って体験した『車』

とは、スピードが違った。次々に変わっていく視界、絶え間なく通り過ぎて幾多の車、鮮やかに照らすネオン、全てが全て、姫子の心を強く捉えた。300年間、全く刺激のない毎日を送ってきた姫子にとって、それらはあまりに刺激が強かった。

ああ、こんな世界があったのか！

姫子は身震いして、感動をもう一度かみ締めた。姫子の生きていた300年前を思えば、こんな世界が訪れる日が来るなど、夢にも

思わなかった。

姫子は口に手を当てて、クスクスと軽やかに笑った。その表情は見た目どおり、いや、見た目以上に幼かった。

『ふふふ……あ、そういえば』

ふと、姫子は思った。

『『てれびきょく』とはどんなものなのかしら？』

それと、他にもっと面白いものはないのだろうか？

姫子の視線が、テレビ局に入っていった二人の後姿へと向かうのに、それほど時間は掛からなかった。

初めてのエレベーター、初めての階段、初めてづくしの中、姫子は心の底から楽しんでいた。エレベーターにおっかなびつくりして乗り、地上7階から見下ろした景色の感動は、今も記憶に新しい。

だが、それらの感動もすぐに薄れ、姫子は途方に暮れた。

『……………迷った』

ふう、と人気のない通路の途中でため息を零した。白いワンピースが姫子の気持ちを表すかのよう、に、ふわりと揺れた。

姫子は知らなかった。テレビ局と呼ばれる建物と、姫子の知っている建物では、大きな違いがあることを。もっとも、長年人里離れた場所に居たうえに、幽霊である姫子にそれを尋ねるのは酷な話なのだが。

姫子は近くにあった大きな扉に体重を預けた。姫子の頭、数十センチ上には、リハーサル室と書かれたカードが貼られていた。

『それにしても、ここは広い……同じような部屋ばかりで辟易してきた』

うーんと、気分転換変わりに背筋を伸ばして身体を解す。幽霊である以上、筋肉疲労とかそういう疲れには無縁だが、精神的な面では疲労を感じていた。

姫子が迷うのも無理はなかった。テレビ局は普通、テロ行為によ

る電波ジャック等の乗っ取りを防ぐため、わざと複雑に造られているのだ。

例えば、エレベーターなどは途中までしか行けないようになっていて、最上階に行くためには幾つものエレベーターを乗り継がなくてはならなかったりする。階段も同じような造りになっていて、両端に設置されている階もあり、端から端まで移動しないといけない所もある。

局によって様々だが、部屋の数も多い。ニュースセンターに始まり、ニューススタジオ、ラジオスタジオ、テレビスタジオ、副調整室、高音質スタジオ、編集室、道具室、本読み室、リハーサル室、オフィスなど、用途に合わせた様々な部屋がある。大体の一見さんが迷ってしまうくらい複雑な造りになっているのだ。しかも、見た目には分からないよう、内装も同じように作られているため、当てずっぽうに探しても分からないようにしているあたり、徹底さを感じる。

『もっと楽しいところはない』

姫子の口上が終わる前に、隣の扉が開いた。リハーサル室から数人の男女が出てきた。

見上げると、彼ら、彼女らは、一様に疲れた顔をしていた。

「それにしても、収録が押しちゃって大変だったよ」

「ああ、それうちも」

「いくらなんでも急ピッチ過ぎるよな、最近」

姫子には分からない会話をしながら、彼らはどこかへ向かおうとしていた。

……ここにいっても仕方ないし、憑いていくか。

姫子は男女の内の一人、輝くネックレスを付けた綺麗な女性に憑いた。いわゆる、とり憑きというやつだ。霊能力を持つ人なら悪寒などの症状を覚えて姫子の存在に気づいてしまうが、幸いにも、この女性は霊能力を持っていなかった。

こうすることで、たとえ女性を見失っても所在が分かるようにな

るのだ。

姫子は一つ、大きな欠伸をしてから、彼ら、彼女達の後を追った。

男女達の行き先は、テレビスタジオだった。スタジオ内には既に十数名のスタッフと数十名程度の観客が指定された席に座っていた。テレビスタジオの中に入った姫子はすぐに女性にとり憑くのを辞めた。

初め、番組収録というものに強い興味を覚えたが、すぐに飽きた。『かいちゅうでんとう』の光を浴びている場所には、心くすぐるものがあつたが、若い男や女が何かを口走っては笑う男女の集団に嫌気がさしたため、スタジオの中を探検、搜索することになった。姫子と彼らでは根本的に笑いのセンスが違うのだ。

「いよいよ噂のトイレの花子さん……」

『それにしてもあの『かいちゅうでんとう』は大きいな』

「怪奇、口裂け女の恐怖……」

『おお、よく見たら『かいちゅうでんとう』の辺りに通路があるぞ！』

ふわりと、姫子の体が浮くと、あっという間に天井まで飛んで通路に着地した。空を飛ぶくらいいけない。しばらく天井の照明辺りにある狭い通路を探ったりして遊んでいると、ふと、下にいる人達の雰囲気が変わった。

ピリピリと、姫子の背筋に何かが走った。

『……ん？』

姫子は首を傾げた。背筋に走る何かはそれっきり何も感じなくなつてしまつたが、震えにも似た何かを感じたのは確かだ。

……気にしていても仕方ないか。

そう疑問を締めくくつた姫子は、とりあえず眼下の収録を覗いた。

「……大葉さん！ 出番はまだ……」

「中止じゃ」

「で、ですが、生放送ですよ…」

「中止するのじゃ」

そこには、ディレクターに止められているのを振り払って、セツトに上がろうとしている変わった白装束を着た白髪の老婆の姿があった。どうやらその年老いた白髪の老婆が登場したことで空気が変わったみたいだ。額、頬、顎、目元、それらには深い皺が刻まれていて、かなりの高齢であることが伺えた。そして、姫子は直感すると同時に理解した。

老婆が、強力な霊能力者であるということに。

『さっきの感覚はこいつか』

ふふふ、姫子は笑みを浮かべた。姫子の中にある邪神の記憶から見ても、眼下の老婆が持っている力はかなりのもので、並みの悪霊では太刀打ちできないくらい強いであろうと推測できた。

ふむ、少し様子をみるか。

えいや、と姫子は通路から飛び降り、出来る限り老婆から離れた場所に着地した。

老婆は静々とセツトに上がると、スタッフ達へ振り向いて言った。
「止めよ」

老婆……稀代の霊能力者『大葉綾子』の言葉に、スタジオの空気が凍った。

綾子の言葉に動きを止めた出演者とスタッフ達は、一瞬呆気に取りられた表情で綾子を見つめたが、すぐに我に返った。

その中で最後まで止めようとしていたディレクターは、すぐに背後のスタッフへ声を張り上げた。

「ーっ！ このまま続けて！」

ディレクターの号令と共に、凍りついたスタジオの空気が氷解する。止まった時間が動き出し、ポツポツとどこからか私語も聞こえ始める。観客席にいた一般人からも雑談が出始め、アシスタントデ

イレクターがディレクターの下へ駆け出した辺りで、スタジオのざわめきは、はつきり分かるくらい大きくなっていった。

「え、ちよつとなに？」

「生放送でしょ、これって」

「やばいんじゃないの？」

一般人からの雑談も次第に数が増えていく。

その喧騒の中で、姫子は一人、スタジオの端で事の成り行きを見つめ続けていた。思っていたより少し遠くに着地してしまったので、もう少し近寄ろうかと足を進める。靴は履いていないため音はしない。そもそも、実体化していないので音は鳴らないのだが、とりあえず姫子は忍び足で進むことにした。

……スタジオカメラへと。

なぜなら、目の前で起きている騒動よりも、すぐ近くにある機械に興味を抱いたから。姫子にとって目の前の霊能力者よりも、目の前の鉄の塊の方が珍しかったのだ。

『ほほう……これは知っているぞ。確か『かめら』とかいうやつだろう？』ただ、私の知っているものよりもずっと大きいかな』

姫子はカメラを回している男の肩に飛び掛って背中につかまると、そのまま男が覗き込んでいる中を覗き込んだ。

……反対に、姫子のすぐ近くでスタジオカメラを回していた男……田中は、困惑した面影で中を……ビューファインダーを覗き込んでいた。

「これ、生放送だろ……大丈夫なのか？ このまま映し続けていても」

『『なまほうそう』が何かは知らんが、いいんじゃないか？ それよりも、これ、中に前の景色が出ているが、なんで色がないのだ？』でも、ディレクターからはOKが出ているし……』

『不思議なものだ……おお、よく見たらお前は田中じゃないか。数時間ぶりだな』

「後で大事になっても知らないぞ、こっちは」

『ということは、重田や浅田も居るのか？』

姫子と田中の会話は繋がっていなかった。片方は生ある者で片方は死している者である以上、姫子が実体化しない限り、二人の会話が成立することは決してない。姫子もそれが分かっているの、特に何も思わなかった。

スタッフ達が行動し始めたのを見届けたディレクターは、振り返って綾子に向き直った。ディレクターの額には汗が滲んでいて、暑さとは別の何かが影響しているのは明白であった。

「大葉さん、困りますよ！ いきなり収録を止められては、後々差支えが……」

ディレクターの言葉に、出演者の一人、明智真奈美も賛同した。明智真奈美、つい半年前にブラビアアイドルとしてデビューした新人アイドルである。

「そうですよ。生放送なんですよ」

真奈美の言葉に、他の出演者達も少なからず同意した。どうして止めたのかと説明を求める、と瞳が物語っていた。

大葉はそれら全員の顔を見つめた後、ふう、とため息をつく、ディレクターへと向き直った。大葉の白装束がふわりと揺れ、ある種の迫力を見せていた。

「理解できませんか？ わしが止めた訳を……」

稀代の霊能力者、大葉綾子の言葉には年相応の、下手すればそれ以上の重みがあった。

大葉は白装束の裾から黒い数珠と複雑な模様が書かれた御札を取り出すと、それらを胸の前まで上げて、両手で挟むように手を合わせた。数珠同士がぶつかる音が静かに響いた。

途端、スタジオの雑音が消えた。雑談していた一般人も、文句を言っていた出演者たちも、困惑気に顔を見合わせていたスタッフも全員、大葉がただ手を合わせただけでピタリと口を閉じた。

ゴクリと、誰とは分からない、あるいは全員かの、喉が鳴った。

『おや？』

ただ一人、姫子だけは、突然の沈黙に疑問を抱き、カメラから顔を上げた。

同時に、老婆は姫子のいるカメラへと視線を向けた。

瞬間、姫子と大葉の視線が確かに交錯した。

『——っ！？』

姫子の背筋に稲妻が走った。それは、白色の壁紙の中に、一部分だけ違う色になっているような、奇妙な存在感に近いものを、姫子は感じた。

あいつ、私の姿が見えているのか！？

ありえない話ではない。霊能力の差にもよるが、ある程度霊能力さえあればこの世あらゆる者を見ることができる。だが、それでも浮遊霊や自縛霊や動物霊程度の話。悪霊となってしまうものも同じように見ることが、それらはあくまで普通の霊でしかない。

邪神の力を受け継いだ姫子を見るなど、普通の霊能力者では不可能。虫眼鏡で星を観察しようとしているようなもので、あまりに相手が強大すぎて霊能力者の本能が見ることを拒否してしまうからだ。なので、もし、仮に、姫子の姿を見ることが出来る霊能力者は、すなわち……。

『この私に対抗できる霊能力者……』

姫子の力の片鱗を見ても怯むことのない強力な霊能力者である証拠なのだ。

ここにいては面倒なことになる。そう思った姫子はすぐさまビューファインダーを覗いている田中から飛び降りると、急いで踵をひるがえ……ようとした。

だが、大葉綾子には、あまりに遅すぎた。

大葉はすぐさま数珠を鳴らし、札に霊力を込めると、スタジオ中に響き渡るくらいの音量で声を張り上げた。

「死霊となってこの世さまよう者、亡霊となってこの地さまよう者、

汝が帰る場所をこの地に成して、汝をその場所にて止めよ！」

札に青白い光が点り、複雑に書かれた模様が輝きだす。大葉は振りかぶると、手に持った札を姫子へ投げた。札は一度空中をふわりと漂うと、爆発的な速度で姫子へと加速した。

『なに！？』

あまりの速度に、姫子とはつさに左腕を盾にした。札が盾にした腕に当たる。

途端、姫子の白い細腕は、瞬く間に焼け爛れた。皮膚が焼け、筋肉が焼け、骨が焼け、また肉が焼ける。想像していた以上の威力と激痛に、姫子の顔は苦悶に歪んだ。

『ぐううう！！』

ギリギリと食いしばった姫子の歯が悲鳴を上げる。そこへさらに追撃をかけようと、大葉の手が懐に伸びる。

「逃がすと思うのか！」

姫子の顔色を見た大葉の口元が、勝利の笑みを浮かべる。

その笑顔が、姫子の理性を砕いた。

『しゃら！』

瞬きするよりも速く左腕が元に戻る。手のひらを握り締めて軽く開くと、姫子の身長よりも長い黒槍が握られていた。その槍を見た大葉が目の色を変えるのを尻目に、思いっきり振りかぶる。

『くさい！』

姫子と大葉にだけ聞こえる轟音と共に、黒槍が放たれた。

その速度は大葉の放った札よりも数段速く、大葉は何か行動することもできず、ともに黒槍が胸に刺さった。

黒槍は大葉の中から白いもやを巻き込むようにしながら、煙のようになされた。

途端、大葉は糸の切れた人形のように、その場に崩れ落ちた。

「お、大葉さん！？」

「きゃー！！！！」

「だ、だれか、救急車！」

大葉が倒れたことでパニックになり始めたスタジオから飛び出し、少女らしかぬ、少年のように手足をばたつかせながら、姫子は壁をすり抜けてテレビ局から脱出した。

普段の姫子ならそんなはしたないことはしないのだが、今はそれを気にする余裕は無かった。空を当てもなく飛びつつ、姫子は先ほどの出来事を思い返した。

『……び、びつくりした……』

訂正、あまり思い返していなかった。その後、ふと目に留まったビルに着地するまで、姫子はただただ混乱し続けた。

怨霊少女ぶらり旅：さらばテレビ局（後書き）

現時点ではあまりグロテスクな描写は入れてませんが、入れるときは注意書きで分かるようにしておきます。

インターバル（前書き）

カニバリズム（人食）描写、残虐描写があります。
苦手な人、そういうのを受け付けない人は、ブラウザのバックを押
してください。

インターバル

それにしても、あの婆さんはいったい何者なのだろうか。

ネオンが輝くビルの上、フェンスすらない屋上の縁から足をぶらぶらと投げ出しながら、ようやく腰を落ち着ける場所を見つけた姫子は、テレビ局の出来事を反芻していた。

そうすると、自然と姫子の思考は二つの事柄に収束した。

一つは、大葉綾子の予想外の霊能力。姫子の身体を傷つけるなど、並みの霊能力者では不可能で、数人がかりでも難しい。それを御札一枚で行い、無視できないレベルのダメージを姫子に与えたのだ。そして、もう一つは、それは姫子の持っている邪神の力の一つ、邪神の黒槍。実体化すれば武器として扱え、さっきのように死している者の状態ならば、相手の魂に直接ダメージを与えることができる。

邪神が魑魅魍魎を捕食するときに使っていた黒槍で、その威力はそれなりに高い。少なくとも、霊能力を持たない並みの人間なら即死する威力だ。

だが、おそらくあいつは生きている。

姫子は唇を舐めた。少女らしい小さな唇に真っ赤な舌が這う様は、おぞましい妖しさに満ちていた。

『予想していたより斜め上に行くか……なかなか面白い』

大葉綾子、それが、あの老婆の名前だ。

邪神である自分を傷つけた、人間の名前だ。

『次に会ったときは、どこからかってやろうか』

ニヤリ、姫子の唇がまがまがしく歪んだ。その笑みは、見た目相応の可愛らしいものではない。見るものを不安にさせる、恐ろしい笑みだった。

『ふふ、ふ』

クスリと、姫子の口から息が吐き出される。それは次第に回数を

増やし、いつしか意味あるものへ変わっていた。

『ふふふ……はははは、はははははは！！！』

姫子は心の底から笑った。

300年ぶりに、ひよつとしたら、300年前に生を受け、怨霊として生まれ変わって始めてかもしれない。

いや、姫子は初めてだった。初めて、心の底から笑ってしまっくらしいの楽しみが出来たのだ。だから、姫子は少女のように、生きていた頃のように、軽やかに笑った。

そして数分後、腹の底から響いてくる音に気づいたのは、笑い疲れて休憩しているときだった。

姫子は最初、その音がなんなのか分からなかった。辺りをキョロキョロと見回して、音源の出所を捜すが、それらしい物は見当たらない。なのに、今も音は姫子の耳に届く。

『む……なんだ？』

縁から立ち上がって、屋上の中央へ飛ぶ。油断無く辺りを警戒しつつ、目を細めた。

気配は……感じない。つまり、姫子に気づかせないほどということだ。

『どこの誰かは知らんが……命知らずにも、この私にちよっかいを売るか……腹立たしいのを通り越して、愉快にすら思えるぞ』

再び、姫子の手には邪神の黒槍が表れる。それを両手で構え、いつでも迎撃できるように態勢を整える。ザワザワと姫子の体から瘴気が漏れ出し、辺りを汚染していく。

屋上に誰も居なかったのは、幸いだっただろう。もし仮に、この場に居合わせてしまった哀れな一般人がいたならば、その人間は一瞬で失禁と同時に失神し、あるいは発狂して二度と社会生活を送ることが出来なかっただろう。

姿が見えなくても、そこに何かがあることを、本能的に理解して

しまうのだ。自分よりもはるかに高位な存在で、はるかに凶悪な存在がそこに居ることを。

見る者の魂を凍りつかせてしまいそうな視線が、右に、左に、向けられる。

『……ふん、出てこないのならば』

黒槍を構え、自身の力を解放する。凄まじい力が辺りに広がっていく。

『こちらからあぶり出してやる！』

振り上げた黒槍が、コンクリートの床に突き刺さろうとした瞬間だった。

姫子の体から切なくなるような音が鳴り響いたのは。

ピタリと、姫子は動きを止めた。一瞬、何が起きたのか、姫子には分からなかった。

もう一度、体から……正確には、お腹から、切なくなるような音が鳴ったとき、姫子はやっと、さっき聞き取った音と、今聞き取った音が、自分の腹が鳴らした音であることに気づいた。

そして同時に、姫子は自分の体が強い空腹感を訴えていることに気づいた。

『お、おお？』

姫子にとって、それは300年前、まだ自身が人間であったとき以来の懐かしい感覚だった。邪神となつてから300年間、姫子はずっと結界の中で過ごしてきた。

内からも外からも、あらゆる霊的な力を遮断する結界のおかげで、姫子は力さえ使わなければ、自身のエネルギーをほとんど消費することなく、今まで存在することが出来たのだ。そして、今までは実体化することに力を使っただけで、空腹を覚えるほど力を使ったことは一度も無かった。

だが、その結界から放れた今、姫子は本質的な意味では、その他の悪霊と同じになった。ただ存在するだけで、自身のエネルギーを消耗するようになってしまったのだ。

ということは、姫子は結界を出てから半日の間、何も食事をせず、常に消耗していたことになる。しかも、途中で邪神の黒槍を使い、自身の怪我を二度治癒し、空中を飛行したのだ。

人間で例えるなら、飲まず食わずでフルマラソンを走ったようなものだ。強い空腹を覚えるのは、当然の帰結だった。

姫子は慌てて力を解除して、黒槍を消す。今度ははっきり、強い空腹感と共に、お腹が鳴った。

……むう……これは辛い。

『腹が空いた……空腹か……久しい感覚だ。この感覚だけは、人間だった頃と全く変わらん』

姫子の愛らしい唇に、真っ赤な舌が這う。その動作の意味は、生きている者も、死んでいる者も、もしかしたら同じなのかもしれない。

姫子は屋上の縁にそつと歩み寄ると、一気に空へ躍り出した。ふわりと姫子の体が浮き、音も無く夜空を飛揚する。

『さて……今の人間の味とは、どういったものかな』

姫子の小さな胸が、期待にときめいた。

今日も、就職できなかったか……。

上下藍色のスーツに身を包んだ男は、今日も採用されなかったことに落ち込んでいた。

男は、今年で28歳になる。現在の職業は、いわゆるフリーターというやつだ。就職するために田舎から上京して来たが就職できなかった、地方組と呼ばれる人達の1人だ。

就職口を探してこの街に来てから、早8年が過ぎた。その日を生き抜くためにバイトを二つ掛け持ちしつつ、今日も某社の中途採用枠を受けて、結果は不合格。

セミナーも受けた。自己分析もやった。履歴書はもう何百枚も書いたし、エントリーシートにいたっては、数えるのも馬鹿らしい数

をこなしてきた。

それなのに、男は就職できなかった。

周りの友人、知人、両親からは、色々言われている。
どうして就職しない。

周りは皆、結婚している。

早く安心させてくれ。

いつまでそんな生活をしているつもりだ。

彼らの言葉で傷つくことなど、もう慣れた。慣れるしかなかった。
男はそう、いつだって努力していた。空いた時間に勉強して、いつだって自分なりに努力を重ねてきた。なのに、報われることがなく、ここまで来てしまった。

なのに、周りの人達は言う。

就職出来なかったお前が悪い。

お前が努力していないからだ。

いつだって、男はそう馬鹿にされ、蔑まれた。

男は深いため息を吐いた。その吐息は、青色どころか、溜まり積もった疲労と将来に対する不安によってヘド口色になっていた。

男は顔を上げて、夜空を見上げた。人通りの無い住宅街だからか、それとも別の要因だからなのか、今日は小さいながらも星が見えた。
「俺だって就職したいよ……でも、どこも雇ってくれないんだぜ。

俺にいったいどうしろっていうのだよ……就職出来なかったやつは死ねってことなのか？ 正社員じゃないやつは、野たれ死ねってことか？」

自己責任という言葉ほど、都合の良い言葉は無く、反論を封じる言葉は無い。その言葉さえあれば、どんな災難も悪夢も現実も、本人の責任にできるのだから。

1か0。男の現実、その二つの選択肢で満ちていた。まるでコンピュータのようだと、男は思った。一昔前、人工知能によって人間よりも頭の良くなったロボットが、人類に反乱を起こすアニメがあったことを、男は疲れた頭で思い出した。

「……もし、人間よりも頭の良いロボットが生まれたら、もう少し生きやすい世の中にしてくれるのかな……してくれないだろうなあ……」

はあ、男はもう一度深いため息を吐くと、背筋を伸ばした。気にしていても仕方がない。自分の力で変えられることなど、高が知れている。そこに幸運という要素が入らない限り、まず変わることはないのだ。

そんなネガティブな思考に蝕まれつつも、男は今日も自宅へ足を進めた。

週一回の楽しみである缶ビールを飲んで、ストレスを発散しよう。そして朝になったら、また頑張ろう。

男は、もう一度顔をあげた。小さな星が、目に映る。いつもの日常が、終わろうとしていた。終わるはずだった。

……ん？

「あれ、あの子……」

男は数メートル先に居る、白いワンピースを着た黒髪の少女に目を細めた。

こんな時間に、あんな小さな子が外をうろついて何をしているのだ？

足を止めて、携帯電話の時刻を確認する。時刻は夜遅くを表示していた。同時に、充電のアイコンも、携帯電話の内臓電気の量が最低ラインであることを表示していた。

帰って充電しないと……にしても、酷い親御さんだな。

自分勝手な考えかもしれないが、前に居る少女が外をうろついていい時間ではない。それどころか、就寝しているのが当たり前の間帯だ。

もう一度、少女を見つめる。

……んん？

そこにきて、男は少女の姿に違和感を覚えた。

少女の姿は一見すると、野暮ったく、田舎臭い印象を覚えた。数十年前の、昭和時代を思わせる白色のワンピースを身に着けていているが、顔は俯いているせいか、よく見えない。背も小さく、そして、透き通るように肌が白い。カモシカのようにしなやかで細い両足には……靴が履かれていなかった。つまり、少女は裸足だった。

男は舌打ちしたい衝動に駆られたが、寸でのところで堪えた。どう見ても、普通の少女ではない。なにか、厄介事を抱えていそうな少女に思えた。

こういうときは、無視して通り過ぎるのが鉄則だ。

本当は回り道をしたいが、ここ以外の道を通るとかなり時間が掛かる。今は一刻も早く家に帰って疲れを癒した男にとって、ちよつとの辛抱くらいどうってことなかった。

男は少女と視線を合わせないように、かつこちらに近寄って来たら走って逃げれるように身構えながら道の端に寄った。

そうして、少女の横を通り過ぎ、数メートルほど先に行ったとき、男は張り詰めていた緊張を解いた。

はあ……疲れた。変な女の子に会っし、今日は厄日だ。さっさと帰って風呂に入ろう。

左腕の腕時計で時刻を確認する。だが、暗くて全く見えなかった。今度は舌打ちをした。

あ、ちくしょう。携帯の充電が切れそうだから、もう使いたくないのに……あ！？

男の足が止まった。

「……なんで」

女の子だと分かったんだ、俺？

男が歩いている住宅路には、街灯と呼べるものがほとんどない。そのため、ほとんど顔を付き合わせるくらい近づかないと、相手が男であるか、女であるか、分らない。いや、それどころか、そこ

にいる人が少女かどうかすら、分からないかもしれない。

男の心臓が、嫌な音を立てて鼓動を跳ね上げた。冷や汗が、クリーニングしたばかりのカッターシャツにしみ込んでいく。

静かに湧き上がってくる恐怖と共に、男は恐る恐る背後へ振り返った。

……そこには、やはり少女がいた。辺りは真っ暗で、数メートル先に何かあるかも分からない。なのに、少女の姿だけが、ライトアップされているかのようにはっきり視認することが出来た。

ふと、少女の肩がゆらりと揺れ、俯いていた顔をあげた。

「……………あ……」

声が出なかった。少女は、男の人生の中で、一度もお目にかかったことの無いほどに、美しかった。

艶のある黒髪。将来を予感させる美しい顔立ちに、瑞々しくも柔らかかそうな頬。弾力と水分をたっぷり含んでいそうな唇に、すらりと伸びた手足。形良く開かれた目、なにより、少女の放つ妖しい妖艶さが果てしなく魅力的だった。

男がもし、その道の性癖を持っていたなら、男は一瞬で理性を捨て去って少女の柔肌を貪ろうと飛び掛っていただろう。いや、もしも男が性的欲求を溜めていて体力も十分だったなら、確実に襲っていただろう。それほどにまで、妖しかった。

だが、幸いにも、男は疲れきっていたし、なによりその道の性癖は持ち合わせていなかった。なので、男はすぐに我に返ることが出来た。

男が我に返るのと同時に、少女の唇が動き……そこに、笑みが浮かんだ。

その瞬間、男は回り道しなかったことを、心の底から後悔した。

『お前は……美味そうだ』

少女の口から赤い舌が這い出て、唇を淫らに舐めた。

気づいたとき、男は走って逃げ出していた。

少女を……姫子の笑顔を見た男は、はっきり自分の死を予感した。
逃げる……逃げる……！

男の頭には、その言葉だけしかなかった。その言葉に従うがまま、男は両脚を回した。より速く、より遠くへ、より離れるために、男は走った。

だが、現実是非常だった。

死は、すぐ後ろまで迫っていた。

『あはは、逃がすと思うか？』

姫子は一気に加速すると、男の片足に蹴りを放った。それは口笛にも似た一瞬の風の音と共に、男の足首に寸分の狂いもなく直撃した。衝撃がスーツを破り、皮膚を貫き、アキレス腱を千切り、骨を砕き、指先の向きを180度変えた。

「ぐああああ……！」

熱い！ 最初に感じた感覚はそれだった。

次に、突然、足首の感覚が消えた。そしてその直後に訪れた凄まじい激痛に、男は硬いアスファルトに前のめりに転がった。まともな受身が取れるわけもなく、顔面から滑った。

「ぐえ……」

大の大人が、全力疾走の状態で顔面から地面にぶつかれば、ただではすまない。

鼻骨が砕けて顔の皮膚を突き破り、前歯は全て折れた。慣性によってアスファルトに顔面を擦り付けたせいで、アスファルトに真っ赤なアートを塗りこまれた。男の顔面にはいくつもの摩擦傷と裂傷ができ、まともに直視できない有様だった。

「ひい、ひいひい……！」

こ、殺される……！

地面をミミズのようにのた打ち回って、少しでも逃げようと手足

を動かす。だが、激痛を訴えてくる片足が邪魔して、上手くいかない。

「た、助けふえ……」

必死に前へ手を伸ばす。

その手を、姫子は掴んだ。

男の目が、驚愕に見開かれる。

姫子の笑みが、凄絶に歪んだ

「ひゃあああああ！！！」

人間が出したとは思えない悲鳴をあげて、男はつかまれた手を振り払った。その手で立ち上がるうと地面に置いて……地面のぬめりで滑った。

ちくしょう、誰だ！ こんなところに水を零したやつは！

もう一度立ち上がるうと手を……そこで、男は気づいた。

男が地面に置いた手には……一本の指も残されていなかったことに。

何が起きているのか分からない。男は涙と泥と血で汚れた顔をあげると、何か硬い物を咀嚼している姫子と目が合った。

瑞々しい唇が複雑に蠢き、何かを口腔内で転がしている。

『ふむ……なかなか美味ではないか……実体化してする食事も、なかなか乙というものだ』

姫子の口が開かれ、そこに……男の指だったものが放り込まれた。そして口が閉じると、また咀嚼する音が男の耳に届いた。

「うあ……………ああ……………」

あ、あああ、あああああああああ！！！！？？？ 俺の指が！

俺の指が！ 俺の、俺の指がああー！！！！

もう、男は悲鳴をあげることも出来ず、掠れた悲鳴を喉から漏らすことしか出来なかった。ただ、姫子を、捕食者を見つめることしか出来なかった。

いい、いい顔だ、その表情だ！

絶望に染まった男の顔を見て、姫子は笑いをかみ殺した。必死に

逃げようとする餌を痛めつけ、食われるしかないという絶望を理解した者特有の表情を浮かべた男を見て、姫子は性的快感にも似た爽快感を覚えていた。

片手の指を全て失い、片足を砕かれ、顔面がズタズタになった男に対して、愛情すら感じるような気がした。

『さて……それじゃあ、今度は心臓の踊り食いといくかしら』

抵抗する気力もなくなった男の胸に、手を伸ばす。瞬間、男のスーツが弾けと飛ぶように細切れになり、男の上半身が外気に晒された。

『魂を直接食うのもいいが……それは300年間で食べ飽きた。たまには実体化して肉の味というものを楽しむのも一興だろう』

そっと伸ばされた手が、男の胸に触れる。その手の暖かさを、男は信じる事が出来なかった。そして、自分の生涯がここで終わるということ、男は悟った。

カチカチと勝手に鳴る歯だけが、男にとって唯一生きている実感だった。

「死に……い……死にたく……死に……くない」

『ん、死にたくないのか？』

男は首を縦に振った。

『駄目だ、お前はここで死ぬ。私に食われて、ここで死ぬんだ』

「……嫌だ……死に……ない」

『死ぬんだよ、お前は。こんな誰もいないところで、お前は一人寂しく私に食われて死ぬんだ』

「……殺さ……いで」

『殺さないさ。ただ、心臓を抜き取るだけだ。人間その気になれば、心臓が無くたって生きていけるさ。なんだったら、幽霊になって第二の人生を送ればいいさ』

ずぶりと、姫子の指が男の胸に突き刺さった。一センチ、また一センチ、姫子の指が男の中に埋もれていくたび、男の胸から血が噴出して、辺りに流れていく。

痛みは無かった。ただただ体内に感じる強烈な異物感に、男は息を呑んだ。

『まあ、もつとも』

完全に男の胸に埋まった姫子の手が、男の心臓に触れる。

『幽霊になったら、私の『でざーと』とかいうやつになるだけだな』

一気に姫子の手が引かれる。人通りの無い静かな住宅街に、血飛沫が舞った。

辺りにはまるで人氣が無い深夜の公園。そこにあつたベンチに寝転んだ姫子は、げふつ、と下品なゲップを漏らした。

『あゝ、お腹いっぱい。やっぱりいいなあ……肉は。魂と違って、満腹感が強いし、当たりはずれが無いからな……』

もし、姫子の姿を見た人がいるなら、少女とは思えないだらしなさと親父臭さに、眉をしかめただろう。だが、実体化をといいた今の姫子は、靈視能力を持っていない限り見ることが出来ない。なので、姫子はワンピースがはだけて履いているパンツが露になっても、気にせずくつろいでいた。

お腹を、ポン、ポン、と叩くと、程よい弾力が返ってくる。30年ぶりに感じる満腹感に、姫子は眠気にも似た恍惚感を覚えていた。

『……せっかくだし、このまま寝るか。今の人間も、朝に活動するみたいだし、また明日ぶらつくか……ふああゝ』

大きな欠伸が姫子の口からこぼれる。恍惚感が少しずつ眠気に変わっていくのを実感しつつ、姫子は目を閉じた。

姫子のぶらり旅は、始まったばかりだ。

インターバル（後書き）

誤字、脱字がありましたら遠慮なく報告してください。

……もうすぐクリスマスか……家でチキン食いながら執筆するか……。

少女風景

可愛い鼻歌が、キッチンから聞こえてくる。ガスコンロの前で少女が、愛らしいキャラクターがプリントされたエプロンを着て朝食の用意を進めていた。

身長は140センチ前半で、年は12歳。左右にまとめられたツインテールの亜麻色の髪が、窓から差し込む光にきらめいている。熱されたフライパンの上に、8枚のベーコンが乗せられる。一瞬の静寂のあと、すぐに心地よい音を立ててベーコンが焼かれていく。両面が軽く狐色になったら、あらかじめおいだ卵を、ベーコンの上に流し込む。

瞬時に卵の中に含まれていた水分が蒸発、熱され、卵が凝固していく。それを上手く箸で真ん中に寄せ、半熟程度になったらコシヨウを入れる。

すぐさま香ばしい香りが辺りに漂い、食欲を誘った。単純ながら、たなか・まみ田中真美は、改めて毎朝の朝食はベーコンエッグが一番だと思った。

「よし、完成つと」

テコを使って、ベーコンエッグを1:2になるように分断する。テーブルの上に用意した二枚の皿に、今しがた焼いた作ったベーコンエッグを分けて乗せる。

「箸よし、コップよし、お椀よし、サラダよし……うん、用意完了」綺麗に出来たことを確認してから、フライパンを流し台に置いて、水道の蛇口を捻った。流れた水がフライパンに触れた瞬間、フライパンの熱によって一気に水が蒸発し、蒸気となって真美の視界を覆った。

「うひゃあ」

飛び退くように下がる。蒸気といっても、その温度は人間が余裕で火傷出来るレベルだ。毎度のことながら、真美は今も慣れていなかった。

「危ないなあ……」

フライパンの取手を持って、水を満遍なくフライパンに振り掛ける。そのたびに大量の水蒸気が真美の視界を塞ぐが、構わず水を掛け続けた。

十数秒、フライパンの熱が十分に冷めたのを確かめてから、手早くスポンジに洗剤をしみ込ませて、フライパンを擦った。もちろん、使うのはスポンジの柔らかい部分。硬くザラザラした部分は、焦げ落としや汚れの酷いときに使うべきもので、それ以外では使わない方が良い。なぜならば、ザラザラした部分で洗うと、フライパンの表面を傷つけてしまうからだ。

特に、ガラスコップなどには使わない方が良い。ガラスは表面を傷つけて光沢を失くしてしまうから。

黒い焦げ跡が一つも残っていないのを確認してから、真美はフライパンを指定の場所に戻した。

そして、着ているエプロンを外しつつ、父親の田中総一を起こそうと振り返った……真美の目が、驚きに見開かれた。

真美の視線の先、そこには、たった今起こそうと思っていた父が大きな欠伸をこぼしながらリビングに入ってきたからだ。

「ふああゝ、真美ゝ、おはようゝ」

寝相でぐちゃぐちゃになった頭を掻きながら、総一は娘に挨拶した。水色のパジャマは見事に着崩れ、顎には無精髭が生えていた。

しょぼくれた目元を擦りつつ、総一は椅子にもたれ掛かるように腰を下ろすと、そのまま眼前に置かれた箸を手に取り、大きいベークンエッグが乗せられた皿に箸を伸ばした。

「あ、こら、お父さん！」

「いて！」

真美は小さな子を叱るように、総一の手を叩いた。総一は叩かれた手を摩りつつ、真美を恨めしそうに睨んだ。

「何するんだよ」

「先に顔を洗って来なきゃ駄目。そんなだらしない格好でご飯を食べることは、私が許しません！」

「えゝ、食ってからでいいよ」

「だゝめ！」

真美は腰に手を当てて、総一を注意した。

「眠気も覚めるし、一石二鳥。その間にお味噌汁とか用意しておくから、先に行つて！」

「ちゝゝ、はいはい、分かりました、顔を洗いに行つてきまゝす」

「よろしい」

席を立ち、頭を掻きつつノロノロと洗面所に向かう総一の後姿を見届けた真美は、総一の分のお味噌汁と飲み物の用意をするため、コンロの上に置かれた味噌汁へ足を進めた。

「へえ……そんなことがあつたんだ」

使い終わった食器を、水を張った桶に入れつつ、真美は総一の話に耳を傾けていた。

おうよ、と答えた総一は、食後のコーヒーを一口飲んでから、再び口を開いた。

「もう大変だつたんだぞ……大葉さんは倒れるわ、番組の収録が無期延期になるわ、散々な一日だったよ」

総一の脳裏に、昨日の出来事が蘇ってくる。結局、総一は後始末やら何やらで、帰ってきたのは朝方だったのだ。2時間程度の仮眠のあと、こうして娘の真美と食事を取っているのであった。

「ご苦労様、お父さん」

「おう」

と、元気よく返事を返したはいいが、総一は既に結構体力の限界を感じていた。現に、今にも目蓋が重力に負けそうなうえに、体はずっと睡眠を取れと警告している。

だが、それでも眠るわけにはいかなかった。普段、仕事の忙しさ

でろくに娘とコミュニケーションを取ることができない総一にとって、朝のこの一時だけが唯一、娘とゆっくり会話できる時間だった。それが分かっている真美は、決して総一に寝るよう言うことは無かった。

なにより、真美にとっても、大好きな父とする会話が好きだからだ。

だから、真美は気づいていない振りをして総一に話を振った。

「それで、結局その……大葉綾子って人はどうなったの？」

「ん、ああ、大葉さんか……あのあと、すぐに自分から起き上がったよ。もつとも、酷く気持ち悪そうだったし、顔色も真っ青だったけど」

「ふーん、その人って、何かの病気持ちなの？」

総一は首を横に振った。

「いや、特にそういう話は聞いていないな……ただ、大葉さんが言うには、あの収録のとき、凄く凶悪な悪霊がいたらしいんだと」

「凶悪な悪霊？」

真美は頭の想像虫を働かせた。

鋭い牙に、凶悪な眼光、そして厳つい顔面。何本も腕が生え、その腕は真美の体よりも太く、強靱な両脚は空気が詰まったタイヤのように張り詰めている。ついでにトラやらイノシシやら竜やら、いろんな尻尾がちらほらと。極めつけは、吐く息が蒸気のように白かったりして……。

真美は体を震わせた。自分で想像したものだが、実際に想像通りの悪霊だったら怖すぎる。まるでエイリアンだと真美は思った。

そんな真美の様子に気づいてない総一は、首を傾げて欠伸をした。「そ、凶悪な悪霊……ふああ、悪霊といっても、大葉さん曰く、外見は小さな女の子だったらしいけどな……」

小さな女の子。総一の言葉に、真美は想像上の悪霊を修正する。首から上は可愛い女の子。でもその下は……筋肉隆々。

気持ち悪い！ 真美は頭を左右に振って、急いで想像を振り払う

と、時計を見た。

瞬間、真美は凍りついた。

「ああ、時間！」

「うお、ビックリした」

真美の悲鳴にも似た突然の叫び声に、総一は肩を竦ませた。だが真美は気にする様子もなく、慌ただしくエプロンを椅子に掛けると、自室へ走っていった。

そしてすぐにランドセルを背負った真美が、リビングに戻ってきた。

「お父さん、ご飯はまだ炊飯ジャーに残っているから、食べたかったら食べて。私、学校行ってくる！」

総一の返事を聞くよりも早く、真美は玄関を飛び出していった。あとには、眠そうに欠伸する総一だけが残された。

涙で潤んだ目元を拭いつつ、総一は静かになつたリビングを見回す。素人の自分から見ても、埃一つ見つけれられない。掃除が行き届いている証拠だ。

本当は俺がもっとしっかりしないと駄目なんだけどな。

たった今出て行った娘の後姿を思い出す。

総一が、妻の玲子と別れてから二年が経った。当時、真美は10歳。甘えたい盛りの真美が、自分を選んでくれて本当に嬉しかったと、今でも思う。幼い娘がいたから自分は辛いことがあっても頑張れるんだと、総一は改めて思った。

まだ遊びたい盛りなのに、文句の一つも言わず毎日家事炊事をこなしている。その事実には、総一はいつも感謝していた。

「……もう一眠りする前に、俺もちょっと手伝っておくか」

感謝の気持ちとして、総一は久しぶりに洗い物をしようと、席を立った。

学校へ小走りで向かってから10分。そろそろ大丈夫かなとスピ

ードを緩めた真美の視界に、見慣れた少女の後姿が映った。

肩口で綺麗に整えられた黒髪、すらっと伸びた手足にピンと伸びた背筋、静々と歩く姿。女性の兆候を見せ始めたその後姿に、真美は手をあげて声を掛けた。

「おはよう、明日香！」

真美の言葉に、少女……さいおんじ・あすか西園寺明日香は、ゆっくり振り返った。その瞬間、周りにいた数人の男子生徒が、頬を染めた。

「おはよう、真美ちゃん」

明日香は真美へ微笑んだ。その桜の花びらよりも華やかな笑顔を浮かべた友人の姿に、真美は照れくさい思いが湧き上がった。一旦緩めた足をもう一度動かして、明日香の横に並んだ。

ふう、と一息入れてから、真美は横にいる友人を見上げた。

「おはよう、朝からモテモテだね……明日香は」

「な、なんのこと？　そ、そんなこと無いよ……からかわないで」
真つ赤に染まった頬を隠しながら、手を振って否定する彼女を見て、真美は心底もったいないと思った。

チラリと視線を辺りに向ける。真美と目が合った男子は例外なく視線を逸らし、中には走って逃げてしまう男子もいた。

どうして気づかないのかな？

真美は苦笑した。

そう、明日香は非常に男子から好かれている少女だ。

無理もない。真美は思った。

西園寺明日香、年は真美と同じ12歳で、同じクラスの友達だ。成績は優秀、運動が苦手なことを除けば、優等生というべき人物だ。同時に、非常に美しい外見から、密かに校内の男子生徒の人気を集めている人物でもある。

ざっと明日香の情報を思い出してみても、非のありそうなところがあるで無い。唯一、運動が苦手なところがあるが、それも男子から見ればプラスの要因にしかないのだろう。

さすが、でいせい出井英小学校二大美少女が一頭、西園寺明日香だ。

「せめて、私にもその可愛らしさを、10分の1だけでも欲しい……」

「え、何を言っているの……真美ちゃんは凄く可愛いよ」

ニツコリ、真美へ綺麗な笑顔で微笑まれた。こういった所作や言動に、嫌味が無いあたりが、彼女の人気の秘密なのかもしれない。

しかも、明日香の魅力はそれだけではない。真美はまるで親の敵を見るような目つきで、明日香の胸元……正確には、二つの膨らみを見つめた。

「……明日香……なんか前より大きくなっているよね？」

「あ、真美ちゃんも分かる？」

華の笑顔だったのが途端に悲しみに染まった。明日香は疲れたため息を吐くと、自身の胸に手を当てた。その膨らみは、彼女の手に対して少し、大きかった。

「最近また大きくなっちゃって……このブラも、もう小さくて……」

「……そうなの？」

真美は自分の胸に手を当てた。だが、明日香のように手が弧を作ることではなく、しっかり肋骨の感触を伝えてきた。けれども、若干、膨らみらしきものの感触もあつた。

「もう、Bカップじゃ小さくて……今度の休みに、お母さんにCカップのやつ買って貰うんだ」

「……C」

「あんまり大きくなると、胸が張って痛いの……何とかならないかな……」

「……胸が……張る……だと……」

保健体育の授業で、発育には個人差があるといやというほど聞いてはいたが、実際に差を見せ付けられるのは堪える。

「真美ちゃんも行く？ この前、Bサイズのやつ買ったし、この際Cも買つといた方がいいんじゃない？」

「……行かない。まだBで間に合っているから」

そう、分かった。明日香は寂しそうに微笑んだ。チクリと、真美

の胸が痛んだ。

その寂しそうな顔を見て、真美は少し罪悪感を覚えたが、実際間に合っているので前言を撤回するつもりはない。決して、自分より発育の良い明日香を羨ましいいわけではない……ないのだが、羨ましい気持ちが無いわけではない。

決して、真美が小さいわけではない。真美のバストカップだって、Bだ。ただし、真美は限りなくAに近いB。明日香が限りなくCに近いBであることの前には、無駄な言い訳かもしれないが。

「オイッス！」

突然、真美は後ろから強い衝撃を受けて、前にたたらを踏んだ。

転ばないよう慌てて体勢を整えてから、真美は背後へ振り返った。そこには、人形のように整った容姿を持つ美しい少女が、軽やかに笑っていた。

「ちよつとリドリー、いきなり押さないでよ！」

「あはは、ゴメンなさい」

真美に怒られたリドリーは、全く悪気がないのか、気のない返事を返した。

リドリー・アナスタシア。真美、明日香の二人と同じクラスに所属している。ショートカットの金髪に青い瞳、雑誌でもお目にかかれなくらい、文句なしの美少女だ。彼女は、出井英小学校二大美少女の残りの一頭である。

「トコロで、二人、ナニヲ話してイマシタ？」

リドリーは日本語を話すとき、たびたび抑揚や音調や発音、表現がおかしくなる。それは1年前までリドリーはロシアに在住していたのが要因になっている。

真美と明日香の二人は、そんな彼女とは5年生のときからの付き合いなので、自分達の脳内で勝手に翻訳することが出来る。

むしろ、二人は1年で日本語をここまで話せるようになったリド

リーに、尊敬の念すら感じていた。

本来ならリドリーにも会話の内容を話すのだが、今回ばかりはあまり口にしたくない。自然と、真美は唇を尖らせながら、そっばを向いた。

「これはリドリーが知らなくていいことだから、言わない」

この言葉に、リドリーは強い衝撃を受けた。その衝撃は悲しみと
なつて自身の涙腺を刺激する。リドリーはツンと鼻先に痛みを覚え、
鼻をすすった。

「a h h ……ワ、ワタシ、ヒミツなの？」

「違うわ、リドリーちゃん」

明日香は苦笑しながら、リドリーの頭を撫でた。リドリーは涙で
潤む目元を拭いつつ、頭を撫でる明日香を見上げた。

「さつき、ブラジャーの話をしていたの……多分、真美ちゃんはリ
ドリーちゃんのが羨ましいんだと思うの」

「o h h ……ウラマヤしい？ ワタシの胸が？」

リドリーは首を傾げつつ、着ているＴシャツを押し上げる自身の
胸を掴んだ。揉むわけでもなく、触るわけでもなく、はつきり掴ん
だ。それでもなお収まらない胸は、歪に形を変えた。

瞬間、周りで様子をうかがっていた男子生徒が激しく咳き込んだ。
実は、さつきの明日香の行動でかなり我慢の限界を迎えていたのだ。
あっけらかんとしたリドリーに、さらに明日香は苦笑を深めた。

「うらまやしい、じゃなくて、うらやましい。真美ちゃんは、胸を
大きくしたいみたいなの」

「胸を？ ナンデ？ 大きいと、イロイロめんどウだよ。ワタシも、
出来ればアスカぐらいがヨカッタ」

リドリーは心底、真美の気持ちが分からなかった。大きいと肩は
凝るし、走ると揺れるし、汗を掻くと蒸れる。リドリーにとって、
自分の大きな胸は邪魔でしかなかった。

「リドリーちゃん大きいよね……今のサイズ、いくつ？」

「サイズ？」

リドリーは胸から手を外した。

「胸のサイズだよ……うーんと、何カップか知っている？」

「ohh！ カップ！ それならワタシ、Dむぐぐ！」

「ちよつと、声が大きい！」

リドリーの大声に、落ち込んでいた真美は慌ててリドリーの口を塞いだ。天下の往来に、女性のプライベートを話して言いわけがない。

真美の危惧したとおり、周りを歩いていた男子生徒、女子生徒、あるいは通行人が、口々に囁き始めた。

おい、あの年でDかよ。うわ、でけー。まだ小学生なのに、さすが外人だ。横の女の子大人びているな……中学生に見えるぜ。あの年であれなんだから、大人になる頃には三桁いつているんじゃないか……だってよ……あの………。

あゝあ、また始まったよ。

真美は舌打ちしたいのを堪えながら、ため息を吐いた。見上げると、明日香が困ったように微笑んでいた。

真美は一つ、気合を入れると、リドリーの口を押さえていた手を放した。リドリーは目を白黒させながら、眼前の真美を見つめた。

「マミ、ナニするの？」

「いいから、ほら走るよ」

何か言うよりも先に、真美はリドリーの手を取った。明日香を見上げると、明日香は、ランドセルを背負いなおして、はつきり頷いた。

「エ、エ、どうしたの、2人トモ？」

「学校まで走るから、ダッシュして！」

言うがいなや、真美はリドリーを引っ張って走り出した。そのすぐ後ろを追いかけるように明日香も走り出した。

リドリーは転ばないように気をつけながら、歩調を合わせた。

「OHUU！ マミ、STOP！ STOP！ 走ると、胸がユレテ痛いヨー！」

「その胸が原因で走っているの！ つべこべ言わず、さっさと走れ！」

「NO——！！」

朝の通学路を爆走する2人を見て、明日香は人知れず笑みをこぼした。

うふふ、真美ちゃんとリドリーちゃんは本当に仲がいいな……あら？

次々に通り過ぎていく景色の中で一瞬、ほんの一瞬だけ、明日香の視界に見慣れない何かが過ぎった。瞬間、明日香はそれに見惚れた。

気になって振り返ってみるが、見た場所は位置的に見ることが出来なかった。

……気のせいかしら……見かけない子だったけど、転校生かしら？
釈然としない何かを覚えつつも、明日香は先に行く2人に追いつくため、足の回転を速めた。

怨霊少女、学校へ行く（前書き）

霊に関する独自解釈が入っています。

そっというのが嫌な人はブラウザの戻るボタンを押してください。

怨霊少女、学校へ行く

……なんだ、あの騒がしい餓鬼どもは。

日も高くなってきたので、さっそく朝の散歩といこうじゃないかと思っていた姫子の目の前を、3人の小学生が喧しい笑い声をあげて走っていった。

姫子の目論んだとおり、辺りには大勢の子供たち、スーツを着た社会人、老人などが活動を始めていた。ただ、少し子供が多いことを除けば、予定通りだ。

『昨今の女子はずいぶんと喧しい……もう少しお淑やかに出来ないのかしら……まあ、餓鬼だし、仕方ない』

それに、姫子には一つ気がかりがあった。

雑談しながらゆつくりと、中には慌ただしく、どこかへ向かっている児童の群れを見て、姫子は首を傾げた。

『それにしても、この餓鬼どもはどうして一様に同じ物を担いでいるのかしら？』

姫子の注意は、自然と児童たちが背負うランドセルに向かった。形だけは同じものの、黒色、赤色、水色、桃色、様々な色があり、それは男女関係無かった。

胸の奥で、好奇心が疼いた。

人間だったときの姫子の記憶にも、これだけの子供を見た覚えは一度もない。それだけの子供たちが、おそらく同じ場所へ向かっていることは推測できる。だが、このまま付いて行っても楽しいものがあるのだろうか？

所詮、餓鬼が行く場所だという考えが、姫子にはあった。姫子の興味や好奇心を誘う場所には必ず大人がいて、子供はいなかった。それだけのことだが、児童たちの後を追って面白いものがあるのかどうか、判断しかねていた。

はてさて……どうしようか。

姫子の脳裏に二つの選択肢が出た。

一つは、この児童たちの後を追って、何をしようとしているのかを確かめ、場合によっては遊ぶこと。ただ、楽しいものがあるかどうかは分らない。

一つは、姫子の傍を通り過ぎたスーツを着た社会人の後を追うこと。大人である彼らに付いて行けば、おおよそ楽しめるであろうことは分かった。

姫子は頭を抱えた。

『迷う……実に迷う……』

タイムリミットは、あまりない。このまま時間が過ぎれば、いずれ児童たちは全員学校へ向かい、社会人たちは会社へ向かう。それまでに、答えを出す必要があるのだ。

……どうすれば!?

そう迷う姫子の傍を、男子たちの集団が通った。もちろん、男子たちには姫子が見えていない。だから、姫子はその男子たちの密談を盗み聞けた。

「……おい、アレ、ちゃんと隠しておいたか?」

「ばっちり」

……アレ? 何だ、それは?

姫子の耳が、ピクリと動いた。顔を上げると、何やら肩を寄せ合う男子達の姿が姫子の視界に映った。

男子たちはなおも肩を寄せ合い、囁くように会話していた。

「お前は、持ってきた?」

「当然」

「ってことは、全員大丈夫なのか?」

「大丈夫」

「俺も」

「僕も」

「俺も」

ヒソヒソと怪しく密談する男子たち。その瞬間、姫子の好奇心が

彼女の足を動かした。

ゆらりと姫子の体が揺れ、静かに手が伸びる。そして、ゆっくり、白く小さな手が男子の一人の肩に触れた。

途端、その男子の体がビクリと震えた。男子は慌てて背後へ振り返った。だが、男子の目には姫子の姿は映らず、空間だけを捉えていた。

「……………」

「おい、どうしたんだ？」

しきりに振り返る男子を見かねた他の男子が、尋ねた。

「…………いや、気のせいだった」

「はあ、何だ、それ？」

「ごめん、ごめん」

それっきり、男子は振り返ることはなかった。その後姿を、姫子は爛々と輝く瞳で見つめていた。

『とり憑き完了…………さて、案内してもらおうぞ』

姫子の唇が、期待に弧を描いた。

ませ餓鬼どもが！

青い空、心地よいそよ風が通っていく、清々しい屋上。姫子はその屋上で、地団駄を踏んで憤慨していた。憤慨というには些か勝手だが、姫子にとっては憤慨に値することだった。

『餓鬼のくせに、こんなもん読むには10年早いわ！』

姫子は握り締めてボロボロになった雑誌を床に叩きつけた。衝撃で本の背表紙が折れて歪に曲がった本が、砂埃を立てて風に揺れた。ふわりと、本の表紙が表になる。そこには、『樂園淫行』と書かれたテロップと共に、女性の裸身が印刷されていた。それも、淫らなポーズだった。

男子たちの後を追って3時間強。姫子にとって意味不明な言語を放って行つた授業という退屈な時間を我慢した結果が、これだった。

『国語、算数、社会などという退屈な時間を我慢してやったというのに……やったというのにいい!!』

何度も言うが、姫子が勝手に行ったことで、誰も頼んではない。だが、怒り狂った姫子にはそんなこと関係なかった。

腸が煮えくり返るくらいの怒りが、姫子の頭を熱くさせる。姫子は笑顔を浮かべる『楽園淫行』を、力いっぱい踏み締めた。

『何を笑っているのだ！ 元と言えば、お前が破廉恥な姿で誘惑するからこうなるんだ!』

何度も何度も踏み締める！

『くそっ、お前さえいなければ、私はあの『すーっ』とか着ていたやつらを追えたものの……ああ！ よく考えたら、『でんしゃ』とかいうやつにも乗れていたではないか!』

さらに怒りのボルテージが上がる。噛み締めた歯がギリリと音を立てて軋み、姫子は足で踏みつけたまま、本を床に擦った。

『この！ この！ この！ でか胸が！ でか胸が！ 揺れるのが楽しいか！ 楽しいか！ 楽しいか!』

しばらく、姫子の怒号が治まることはなかった。

その後、姫子が屋上を後にしたときには、粉みじんに変わり果てた本の残骸だけが残され、それも風に飛ばされて四散していった。

放課後のチャイムが鳴る。

「起立、礼」

教師と生徒、全員が頭を下げた。途端、静かだった教室に活気さが生まれ、すぐに喧騒に包まれた。

3年前、出井英学校に就任した教師、『若葉ちずる』は、教壇を出席簿で叩いた。温和な顔立ちに、小さな眼鏡を付けている姿はあまり迫力が無かったが、出席簿の音は大きかった。

その音に生徒全員が静まり返った。全員の視線が自分に集まるのを確認した若葉は、口を開いた。

「今日の授業はこれまで。特に話しておくこともないから、このまま終わります」

若葉の言葉に、生徒達の瞳が輝く。ただ、次の若葉の言葉に、全員の口から不満の声があがった。

「それと、最近学校で『こつくりさん』っていうのが流行っているみたいだけど、あれはしちや駄目よ」

「『えええ——！！！！』」

どうしてー、なんでー、あれくらい、持ってきたのにー。次々に反対と疑問の声があがる中、若葉は一人落ち着いた様子で眼鏡の位置を直した。

今、出井英小学校では『こつくりさん』と呼ばれる遊びが流行っている。それこそ低学年から最高学年まで、男女問わずやっているくらいに、だ。

遊び方は簡単だ。はい、いいえ、分からない、数字、五十音表が書かれた紙を用意し、その紙の上に硬貨を置いて、参加者全員の人差し指を置く。硬貨の面積から考えて、2〜4人が限界だろう。このとき、10円玉を使うのが一般的だ。

そして、全員が力を抜いてコツクリさん、コツクリさん、おいでください。と呼びかけると、『こつくりさん』が硬貨に宿って、参加者の知りたいことを答えてくれるというのが、『こつくりさん』という遊びだ。

「ここ最近、学校で怪我する子供が増えているって、昨日配った保険新聞書いてあるの、読んだかな？」

保険新聞？　ぶつくさ呟いていた生徒達は、首を傾げた。

保険新聞とは、出井英小学校で学内だけで発行されている新聞で、保険委員と任意の教師とで制作されているものだ。毎月発行されていて、大抵はその月に流行りやすい病気だったり、ビタミンの説明だったりして、あまり小学生が興味を誘うものではない。そのため、読まれていないことが多かったりする。

生徒達の様子から、読んでいないことを悟った若葉は、いい、と

右手の人差し指を立てて説明を始めた。

「あんまり怪我する子が多いから、先生達の間でも問題になってね。もしかしたら……ってことで、先週御被いしてもらったのよ。お塩まいたり、盛り塩したり、お経を聞いたりね。そしたら、どうもね、御被いした人曰く『こつくりさん』はしちやいけないんだって」

ここまでいい？

若葉の質問に、生徒達は首を縦に振った。

「『こつくりさん』って、実は結構危険な遊びらしいのよ。どうやらあれて、交霊術の一種みたいなの」

「先生、交霊術ってなに？」

生徒の一人が手をあげた。

「交霊術っていうのは簡単に言うと、幽霊を呼び出す方法のことよ。どうもね、『こつくりさん』は誰でも出来る簡単な交霊術らしいんだけど、簡単な分、よくない霊も呼び寄せてしまうらしいから」

「……先生、幽霊って信じているん……です……か？」

男子の一人が、からかうように先生に尋ねた。

その質問に、若葉は黙って見つめることで伝えた。その怒っているとも笑っているかもしれない視線に、男子は言葉を失くした。いや、それどころか、若葉の異様な雰囲気当てられて、他の生徒達も二の句が告げられなかった。

「……そういうことは、言っちゃ駄目。君は、幽霊が見える？」

「え……その……見えないけど」

「だったら、信じている人を馬鹿にするようなことは言っては駄目よ。君が見えないだけで、実際にいるかもしれないでしょ？」

「そりゃ、そうだけど……」

「見えないなら、見えないでいいの。だけど、見えているという人を馬鹿にすることは、先生が許さないわ」

ニコリと、若葉は笑みを浮かべた。その瞬間、生徒達の背筋に悪寒が走った。

生徒達全員の脳裏に、6年生になったときの最初の授業が思い出

された。

私、空手4段、柔道4段、剣道4段、合気道3段、計15段だから、悪したら拳骨だよ。っと、持参したスプーンを片手で折り曲げながら笑う、若葉ちずるの姿を。

実際、拳骨を食らった生徒は言う。

若葉先生の拳は鋼鉄で出来ている、と。そのときから、若葉がこういう笑顔を浮かべたときは、とにかく怒らせないように努力するのが、クラスの暗黙の了解であつた。

「……あれ？ 皆どうしたの？」

ただ一人、自分のせいであることを知らない若葉ちずるは、静かになった生徒達を見て、首を傾げていた。

「若葉先生、凄く怖かったね」

箒で床の埃を掃きつつ、真美は机を運んでいる明日香に話を振つた。今日の掃除当番は、真美、明日香、リドリーの3人だ。本当は男子が2人いたが、どこかへ姿を消したので、実質3人ということになった。大方、家に帰つたのだろう。

明日香は多少おぼつかない足取りではあるものの、机を教室の後ろに運び終えると、ふう、とため息を吐いた。真美の方へ振り向くと、サラリと後ろ髪が揺れた。

「そうだよね……どうしたんだろう……いつもの若葉先生じゃなかったと思うんだけど、リドリーちゃんは、どう思う？」

「ん？ ワタシ？」

窓から両腕を出して、手に持った黒板消しを叩いていたリドリーが、うーんと頭を捻った。その際、舞ったチョークの粉が鼻腔に入ってしまった、リドリーは可愛いクシヤミをした。

その様子を見ていた真美は呆れた。

「リドリー、もう黒板消しはそれぐらいでいいから、明日香の机運びを手伝って」

「YES！ OK、マミ。手伝うよ、アスカ」

「うん、お願い」

黒板消しを適当な場所において、明日香の隣の机を運ぶ。明日香のように、休んでは動かして、を繰り返すことはせず、持ち上げて一気に運ぶ様に、真美は感嘆の眼差しを向けた。

「リドリーって、相変わらず力強いよね……私と同じくらいの背丈なのに、何が違うんだろ？」

「hum……そういえば、ナンデかな？ ワタシ、毎日トレーニングしているだけだよ」

「……それよ」

「what？」

クスクスと、明日香は笑うと、リドリーが開けっ放しにした窓を閉めた。

「ふふふ……ところで、リドリーちゃん。さっきの話の続きだけど、今日の若葉先生、少し怖くなかった？」

「ソウかな、怖くなかったヨ」

リドリーの脳裏に、担任の若葉ちずるの笑顔が蘇ってくる。リドリーにとって、若葉ちずるという女性は、尊敬すべき教師である。日本人とはかけ離れた外見であるリドリーを、他の生徒と同じように扱い、かといって文化の違いから来る考え方の違いにも寛容な彼女は、リドリーにとっては優しい先生であった。

それは真美と明日香にとっても同じで、2人も若葉ちずるという教師を尊敬していた。

床を掃いていた真美は、掃除用具が入っているロッカーを開けて塵取りを取り出すと、集めた埃を塵取りに入れた。明日香もゴミ箱を持ってきて手伝い、リドリーは素早く机を元の位置に戻し始めた。「そっか……リドリーは怖く感じなかったか……ところでさ、先生が言ったこと、2人とも覚えている？」

真美の言葉に、明日香は頷き、リドリーは首を傾げた。

「『こっくりさん』の話だったよね……明日香、あれって本当にや

ばいもんなの？」

「うん……微妙かな」

「……『こつくりさん』って、ナニ？ ワタシ、一人ぼっち」

ジワツと、リドリーの目尻に涙が浮く。明日香はリドリーの頭を撫でて慰めた。その様子を、真美は苦笑して見つめた。

「別に一人ぼっちじゃないって……知らなかったら教えるし、なんだから2人を見ていると、仲の良い姉妹みたいね」

「ワタシ、イモウトじゃないヨ」

「知っているわよ……ああ、もう、話が脱線しているじゃない。明日香、さっきの続き」

「えっと、交霊術って先生が言っていたの、覚えている？」

「うん」

「それは覚えてイルヨ」

「あれね、ちよつと説明が違うの……つまりね……」

明日香の説明はこうだった。

『こつくりさん』は、確かに若葉の言うとおり、交霊術の一つとして実際に使われていたものではあるが、実際に幽霊を呼び出せることなど、殆どないということなのだ。

『こつくりさん』自体、霊具を使わず行うため、霊を召喚する力はなく、どちらかというと、呼び寄せるという方が正しいのだ。それでも、霊能力を持った人が参加しないと、その呼び寄せる力すらないのだけだ。

『こつくりさん』で幽霊を呼び出すには、いくつか条件がある。

一つは近くに知性を有した幽霊がいること。

一つは参加者の一人に、霊的能力を持った人がいること。

一つは場所が神社など、浄化された場所ではないこと。

一つは回りに盛り塩や鍛えた鉄やお守りなど、退魔の力があるものがないこと。

そして、最後の一つは……。

「呼び出す参加者全員が、同じ年齢であることが条件なの」

「年齢？ それって、何か意味あるの？」

真美は首を傾げた。最後以外の条件は、なんとなく理解が出来る。一つ目は呼び寄せるのだから、幽霊が近くにいないと駄目だ。二つ目は霊能力者がいないと駄目なのも納得出来る。三つ目は幽霊を呼び寄せるのだから、神社などで呼び寄せたら成仏してしまう。四つ目も、呼び寄せるのに御祓いしてしまったら意味が無い。

だが、最後の一つだけは理解できなかった。

それが分かっている明日香は、それはね、と話を続けた。リドリは、途中から面倒に感じたらしく、机を戻し終わった後は、ひたすら黒板に落書きしていた。

「お父さんの話だと、年齢が同じだと互いの霊能力が増幅するんだって。波長とか、そういうやつが似るらしいから……それと、同性だと、もっと良いんだって」

へえ、真美は感心した。

「流石はお寺の娘……よく知っていないさる」

「全部、お父さんの受け売りだけだね」

明日香は恥ずかしそうに頬を染めた。その姿を見て真美は、もし今の明日香を男子が見ていたら、えらいことになっていただろうと、場違いなことを思った。

「ママ、アスカ、ワタシ、『こっくりさん』したい」

説明が終わって、さあ帰ろうという空気になったそのとき、リドリーはポツリと呟いた。それを聞いた真美は、半眼でリドリーを睨んだ。

「ちよつとリドリー……今の話聞いてた？」

「ウン、ゼンゼン聞いていないヨ」

につこり笑顔を浮かべるリドリーを見て、真美は一瞬、無性に目の前の能天気な少女の頭を叩きたくなった。きつと、いい音がするに違いない。

はあ、しょうがないなあ。真美は頭痛を感じ始めたことに辟易しながらも、リドリーに説明した。

「あのね、『こつくりさん』が幽霊を呼び寄せるものだっていうことは分かった？」

「……ウン、分かった！」

一瞬、視線を逸らしたのを見て、真美はリドリーが理解していないことを悟った。けれども、とりあえず最後まで話は続けることにした。

「幽霊を呼び寄せるってことは、悪い幽霊も呼び寄せる可能性があるってことなの。悪い幽霊が来るってことは、危ないってこと。分かった？」

「……ohm……、そういうことか。分かりマシタ、マミ。『こつくりさん』をやるうとしたワタシが、アカサカでした」

「別に、そこまで悪く言ってないわよ……ていうか、アカサカじゃなくて、浅はか、でしょう」

「そうともイウね！」

「そうとしか言わないわよ！」

また、クスリと明日香は笑った。そして、ランドセルの中から図工に時間に使った画用紙の余りを取り出すと、机の上に広げた。さらに筆箱を取り出すと、画用紙に文字を書き始めた。

その行動に真っ先に気づいた真美は、鼻歌を歌いながら画用紙に何かを書いている明日香に声を掛けた。

「……明日香、なにやっているの？」

「ん〜っと、『こつくりさん』に使う紙を作っているの」

「え、それって大丈夫？」

真美の不安そうな表情に、明日香は安心させるように微笑んだ。

「大丈夫だよ。お父さんも言っていたけど、恐山とか、そういう曰く的な場所じゃない限り、悪霊が寄ってくることで殆ど無いって」
「でも……」

真美は不安を感じていた。それは目に見えない存在に触れること

から来る恐怖からではない。もっと別の……もっと大きな不安が、真美の心を蝕んでいた。

「YES！ 始めましょう！」

ニコニコと笑顔を浮かべて、椅子と机を用意し始めた。今日は掃除が終わったら勝手に帰っていいと若葉が3人に言っただため、クラスに残っている生徒は一人もいない。

それどころか、普通は5人でやるのを3人でやったため、普段より時間が掛かった。そのせいで、周りのクラスにも生徒がいなかったことから、誰も割って入る人はいなかった。

……どうしよう。

まずまず、真美の中で説明できない不安が大きくなる。この気持ちはどういったものなのか、まだ幼い真美には言葉に出すことが出来なかった。だが、確かに、真美の中で、何かが強く警告を発していた。

「いざとなったら、私が御被いするから……せっかくリドリーちゃんに興味を持ったんだし、一回だけしようよ。私も一度、やってみたかったし」

明日香の言葉に、多少不安が薄れる。

お寺の娘である明日香は、彼女曰く、普通の人より強い霊能力を持っているらしい。なんでも血筋が関係しているとかで、まだ小学生の明日香でも並みの悪霊くらいなら退治できるとの話を、前に話していたことを思い出した。

いつもなら、きつと安心して、椅子に座って待っているリドリーと同じように、真美も椅子に座っていたらう。けれども、どうしても出来ない。

でも……それでも、どうして私はこんなに不安を感じているんだろう？

真美には分からなかった。リドリーに手を引かれて椅子に座らされたときも、答えは出なかった。

「出来た」

「YES！ それじゃあ、10円玉だよ」

「ほら、真美ちゃんも10円玉に人差し指を置いて」

「マミ、センセイが来る前に、早く」

不安を感じながらも、真美は2人に倣って10円玉に指を置いた。

その瞬間、真美はもう、戻れないことを悟った。何が戻れないのか分からないが、何かが動き出したことを、真美は感じた。

「それじゃあ、いくよ……こっくりさん、こっくりさん」

『……ん？ 誰だ？』

今、運命が動き出した。

怨霊少女、学校へ行く（後書き）

クリスマスだってよ……へへへ、俺は寂しく鍋でも突く。ああ、白菜が美味しいな……。

運命

出井英小学校には、残照のようにいくつか時代に取り残された遺物がある。その一つとして、体育館脇の男女共用トイレがある。

今から40年前に新しく校舎が改築されて以来、使われることなく放置されたトイレだ。本当なら、撤去してしまいたいのだが、国から予算が下りないのと、工事にも時間と手間が掛かることから、入り口を封鎖しただけで済ませていた。

そして時が流れて現在。生徒達も気味悪がり、先生の間ですら滅多に近寄ることの無い、一種の開かずのトイレとなっていた。

その誰も近寄らない薄気味悪いトイレに、姫子はいた。

テープで封鎖された入り口から、そつと中を覗く。既に電気は通っておらず、少し奥からは何も見えないほどの暗闇だったが、姫子の瞳には昼間のように明るく見えた。

男性用の小用便器と、大用のトイレがある。大用のトイレのドアは一番奥以外全て外されていて、中の便器が掠めるように姿を見せていた。

姫子は眉をしかめて舌打ちをした。次いで、そつと眼前を手で扇いだ。

『なんともまあ、酷い臭いだ。感覚を実体化するのも、考えようだ』
ふわりと姫子の体が浮き、テープをすり抜けてトイレの中に入る。まだ実体化してはいないので、裸足で踏んでも汚れることは決していないのだが、気分の問題だ。

中の便器を覗くと、今どき懐かしい汲み取り式のトイレだった。

トイレには汲み取り式と水洗式があり、水洗式は一般家庭にあるやつで、現在ではほとんど水洗式になっている。汲み取り式は、大きな穴を作って、そこに用を足していくやり方で、定期的に溜まった便を汲み取らなくてはならない。

そのため、放っておくと腐乱臭にも似た、アンモニア臭にも似た

激臭が発生してしまうことがあり、このトイレはまさにそれになっていた。

姫子は強くなる臭いに辟易しつつ、一番奥の大用トイレの前に立った。ドアは隙間なく閉じられていて、指を差し込む隙間すらない。『ふふふ……いつまで隠れているつもりかしら？』

姫子の白い手がドアに伸び、コン、と優しくドアを叩いた。

……当然だが、返事は返ってこない。それが分かっていた姫子は、再度ドアを叩いた。

『こんな糞の掃き溜めみたいな場所に閉じこもって……先輩に挨拶しに来た後輩に対して、扱いが酷いんじゃないかしら』

また、ドアを叩く。だが、一向に何の反応も返ってこなかった。

……まあ、いいか。挨拶しに来ただけだし。

姫子は体を翻して、入り口へ向かう。フワリとワンピースの端が揺れた。

『あ、そうそう』

そのまま入り口まで来たとき、姫子は背後へ……正確には、一番奥の個室を見つめた。

『私はあんたに危害を加えるつもりはないわ。ただ、あんたが私に危害を加えたなら、話は別だけどね』

それじゃあ。姫子はそれっきり、振り返ることは無かった。

姫子が去ったすぐあと、一番奥の個室のドアが、カチリと音を立てた。

学校内に戻った姫子は、さて、と首を傾げた。

『……うーん、次はどこに行こう』

既に学校中を散策したので、もう行くところが無かった。

理科室でアルコールランプのアルコールを全て蒸発してやつたり、理科準備室の人体模型にポーズをつけたり、黒板に落書きしたり、色々やった。

音楽室で整頓された楽譜をバラバラに並べ替えたり、ピアノを弾いたりして、音楽室に入ってきた生徒を怖がらせたりした。ただ、姫子はピアノに触れたことも無かったため、聞くに堪えないものだったのが、一因しているかもしれない。

他にも家庭科室に行ってみたり、職員室に行ってみたり、体育館のボールの空気を抜いてみたり、色々遊んだ。

なので、もうそろそろ姫子は学校に飽き始めていた。

……また違うところにも行くか。

そう思った姫子は、踵を翻して……女性と視線があった。

「……………」

その女性は、若葉ちずる。若葉は、小さな眼鏡を指で押して位置を整えると、無表情に姫子を……姫子のいる周辺をぼんやりと見つめていた。

姫子と若葉がいる場所は、渡り廊下だ。なのに、若葉は姫子の横を通り過ぎるわけでもなく、姫子から離れるわけでもなく、ただ廊下の真ん中で佇んでいた。

……なんだ、こいつ？

目の前の若葉に、不愉快な感情を覚えながらも、姫子はそつと横に動く。なんとなく、道を譲ったのだ。本来なら、それで終わるはずだったのだが……。

チラリと、若葉の瞳が、姫子へ向けられた。動いた先の、姫子へと。

瞬間、姫子は邪神の黒槍を召喚し、若葉へ切っ先を向けた。人体など紙のように切り裂きそうな鋭い刃が、若葉の喉前で止まった。

……この女！

『見えているのか、お前……』

姫子は油断無く、若葉を注視した。だから、すぐに姫子は彼女の不自然さに気づいた。

……おかしい。この女、どう探っても霊能力の欠片も感じない。それは奇妙な者であった。少なくとも、姫子にとっての常識に当

てはまらない存在である。霊的能力を持たないのに、霊的存在を見ることが出来る。それは、ありえない事実であった。

『もう一度聞く。お前は私が』

「見えているわ」

リップを塗られた若葉の唇が、姫子の質問に応じた。

ゆっくり、若葉の手が黒槍に伸び、細い人差し指が黒槍を指差した。

「これ……危ないから外してくれないかしら？」

『……その前に聞こう。お前はなんだ？』

その瞬間、若葉の表情に苦しげな色が浮かんた。まるで何かに耐えているようで、自身の拳をギュツと握り締めた。

「……それを話すから、これ、外してくれない？ 話し難いから……」

まだ警戒心を感じながらも、姫子は彼女に興味を感じた。

若葉の喉を傷つけないよう気をつけながら、慎重に黒槍を離す。途端、若葉は、ほう、と大きくため息を吐くと、壁にもたれ掛かるように腰を下ろした。

「ビックリした……いきなりだったから」

『それは謝らないわ……で、どうしてお前は私を見ることが出来るか、教えなさい』

空気に溶け込むように黒槍が消える。姫子は若葉の隣に座った。膝を立てて。

「それはいいけど……パンツ見ているわよ」

『どうせ誰も見えん。いいから話せ……それと、名前を教える』

若葉は疲れたように再びため息をこぼした。そして、遠い目で天井を仰ぎ見た。

「……私の名前は、若葉ちずる。若い葉っぱと書くの。私ね、昔からあなたのようなものが見えるんだ」

『それは分かっている。問題は、お前には霊能力の欠片も感じないということだ。霊能力も無いくせに、どうして私を見ることが出来る

る」

「あなた、そういうことも分かるの？」

若葉は感嘆の眼差しを姫子へ向けた。姫子はそっぽを向いて、視線から逃れた。

「これでも長く存在しているからな……で？」

「あ、うん、私は見て聞くだけ。見ることと聞くことだけが出来るの……小さなときから、見ることと聞くことだけ。除霊とか、そういうのは全然出来ないんだ」

「……だろうな。力が無いのに除霊まで出来たら、それこそ異常だ」
また、若葉の手に力がこもった。ゆっくり顔を下ろして膝を立てると、その間に埋めるように顔を伏せた。姫子はそんな彼女を不思議そうに見つめた。

「おい、うさぎパンツが見えているぞ」

「……今は誰も来ないから、大丈夫」

「……そうか」

「……ねえ、私って、変かな？」

「同じ人間なんてものは、この世に存在しない。お前の言う、変とはなんだ？」

「……他の人が見えないものが見えること……かな」

「それは、私が決めることじゃない。周りが勝手に決めることだ」

「……ところで、さっきからちよくちよく話し方が変わるのとはなんで？」

若葉の質問に、姫子は返答を返せなかった。というより、何を言われたのか、それすら分からなかった。気づいたら、姫子は口を開いていた。

「……さあな。人間だったときの名残かもしれんな」

「え？ それって……」

話すのはこれでお仕舞いだと言わんばかりに、姫子は若葉を無視して立ち上がった。

とりあえず、分かったことが二つある。

一つは、若葉ちずるの目について。彼女は霊能力を有していないにも限らず、姫子を見ることが出来た。並みの霊能力者では見ることすら出来ない、姫子を、だ。おそらく、何か別の、霊能力とは違う力が働いているのではないか、姫子はそう考えた。

もう一つは、姫子自身のことだった。

「待って！」

歩き出そうとした姫子を、若葉は止めた。振り返った姫子と、座り込んだ若葉と、2人の視線が交錯する。

「……なんだ？」

「……いえ、なんでもないの。引き止めてご免なさい」

若葉は軽く頭を下げた。どうして姫子を止めたのか、若葉自身、分からなかった。

「……そうか」

もう、ここには用はないな。そう思った姫子は、別の面白い場所へ……。

ピタリと、姫子は足を止めた。次いで顔をあげて、虚空へ視線を彷徨わせた。

「……ん、誰だ？」

……これは……呼んでいるのか。

声が聞こえる。女の、少女の声だ。

物凄く近いようでいて、物凄く離れていて。

物凄く大きいようでいて、物凄くか細い。

物凄くはつきりしているようでいて、消え入りそうな、静かな呼び声。

その声は、姫子の強い好奇心を刺激するには十分だった。

けれども、姫子の心は、その声の主を探すことを躊躇した。舌打ちしたい気持ちだった。

「……上か」

迷いは一瞬だった。すぐに、姫子は声の主を探すため、声が聞こえてくる方向へ飛んだ。

声の主は、すぐに見つかった。姫子は一つの机を囲んでいる真美、明日香、リドリーの3人を見つめた。

『……………？』

首を傾げつつ、教室に足を踏み入れる……と、机上を見つめていた明日香が、姫子に視線を向けた。

瞬間、明日香の顔色が青ざめた。並みの霊能力者では姫子を見ることは出来ないが、ある一定より上の霊能力者なら、見ることが出来る。つまり、上の霊能力者は、姫子の力を、存在の邪悪さを知ってしまうのだ。

姫子の方は、瞬時に明日香の霊能力の強さを推し量り、並みの霊能力者よりも数段上であることを知った。同時に、興味は失せた。

確かに先天的な素養はあるものの、まだあまりに幼い。鍛えれば姫子とて無視できなくなるくらいだが、今の明日香では姫子の足元にすら及ばなかった。

チラリと、視線を残りの2人に向ける。

あの髪を二つにまとめたやつは……霊能力は無し、か。もう一人のは……ずいぶんと派手な髪だな……こいつも無し……か？

姫子は首を傾げた。真美の方は霊能力を持っていないことが分かった。だが、もう一人、リドリーには、霊能力とは違う力が宿っているような感じを受けた。それも、若葉とは違う、別の力だ。

『……ここはずいぶんと不思議な人間が集まる場所だな』

「……………あ、ああ！」

姫子のポツリとこぼした言葉は、彼女にとっては不注意で、明日香にとって幸いだった。姫子の恐ろしさに放心していた明日香が、声を切欠に我に返ることが出来たのだから。

行動は早かった。明日香は素早く自分のランドセルに手をつ込み、中から水の入った小瓶を取り出した。それを片手で封を開けて、真美とリドリー、そして自分に振りかけた。

「うわ、ちょっと明日香」

「ohm！ 冷たい」

「2人とも、少し黙っていて！」

普段、滅多なことでも声を荒げることがない明日香の焦りに満ちた怒声に、真美とリドリーは息を呑んで背筋を伸ばした。

明日香は空になった空き瓶を放り投げ、指を二本立てた。カラン、と音を立てて、空き瓶が床を転がった。

「汝の身の災厄よ！ 聖水の力を持って、我らを守りたまえ！」

3人の体に掛かった水が、薄く光を放ち始める。それはすぐさま3人全員の体を覆った。それを見ていた姫子は、ふむ、と顎に手を当てた。

あの一瞬でこれだけの防護壁を張ることが出来るのか……将来有望というやつだな。

事の成り行きについて行けない真美とリドリーは、あたふたと明日香を見つめる。

それが分かっている明日香は、幾分強張った笑みを2人に向けた。「落ち着いて、真美ちゃん、リドリーちゃん。絶対に10円玉から手を離しちゃ駄目だよ」

明日香の余裕のない様子から、何か想定外の事態が起きたことを、真美は悟った。霊に対する知識も力もない真美は、おとなしく明日香の言うことに従った。

だが、リドリーには少し難しい注文だった。

「ふえ……ふええ……」

リドリーの目尻にジワリと涙が浮く。ツンと来る痛みと共に視界が涙でぼやける。しゃくり上げるのを、リドリーは必死に我慢していた。

それを見た真美は、出来る限り落ち着かせるように、10円玉を押さえていない手を精一杯伸ばして、優しくリドリーの頭を撫でた。サラリとした金髪の感触に、真美は場違いな印象を受けた。

「大丈夫、大丈夫だから……あんたは泣き虫だけど、力は強いでし

よ。大丈夫、私も明日香もいるから、泣いちゃ駄目」

「うう、で、デモ、デモお」

リドリーの目から大粒の涙が一つ、また一つ流れていく。空いている手で自身の涙を拭ってはいるが、次から次へとこみ上げてくる涙の前には、無意味だった。

リドリー・アナスタシア。彼女は、筋金入りの泣き虫である。テレビで怖い話をやれば、夜に眠れなくなって泣く。ちょっと怪我をすれば、痛みと驚きに泣く。嬉しいことがあれば泣き、苦しいことがあれば泣く。とても感情豊かな少女であり、その天真爛漫の行動から、いつも場を和ませる少女であった。

だが、この状況では逆効果になってしまったのは、皮肉としか言いようがない。

律儀に10円玉から手は離してはいないものの、彼女が偶然に手を離してしまうのは時間の問題だった。

「うつくう、ぐず……うつくう、ぐず……」

泣き声やら涙やらを堪えているリドリーが痛々しい。明日香も、真美に倣った。

「大丈夫だよ、リドリーちゃん。ちょっと間違えただけだから、すぐに」

『はたして、そうなるのかな』

「——っ——!」

いつの間にか机の傍まで近寄っていた姫子が、白い指を立てて、そつと10円玉を指し示す。

10円玉がピクリと動くと、リドリーの体が一際強く震えた。

「No……No……」

涙目で嫌々と首を横に振るリドリー。冷や汗を流している真美。強張った表情の明日香。3人を順々に見つめた姫子は、歪んだ笑みを向けた。

『さて、これは交霊術の一種なのだろう？ だったらほれ、私が召喚されてやった。ここに契約は完了した。聞きたいこと、知りたい

ことがあるなら、私に願え。対価はしっかり貰うがな』

姫子の言葉に、明日香は震えて上手く動かない喉に無理やり唾を流し込んだ。

「……そ、それ……じゃあ……」

けれども、そこまでだった。明日香はそれ以上口を続けることが出来ず、黙ることしかできなかった。やはり、幼すぎたのだ。なまじ力があつたのがいけなかったのだ。

姫子の脳裏に、暗い欲望が湧き上がってくる。

くくく、面白い。もう少しからかってやろう。

舌なめずりしそうになるのを、姫子は我慢した。

『どうした、願いは無いのか？ だったら、呼び出した対価をい』

「帰って」

横から割り込んだ声に、姫子は二の句を告げられなかった。

『……なに？』

振り返ると、真美と目が合った。視線が交錯し、姫子は真美も自分が見えていることを悟った。もう、驚く気持ちすら起きなかった。ただ疲れたように頭を振ると、ため息を吐いた。

『全く……お前もか。この学校にはどうしてこうして……法則から外れたやつに遭遇するのやら』

「帰って！」

真美は叫んだ。同時に、強い怒りを感じていた。怯える明日香に、泣いているリドリー。この二つを作ったのは、他ならぬ目の前の少女。

チラリと視線を明日香に向ける。いつもの穏やかな微笑はなく、ただ事の成り行きを見守るしかない、か弱い少女がそこにいた。

リドリーへ視線を向ける。いつもの能天気な笑いは消え、目の前の現実には怯えて、涙を必死に堪えている少女がそこにいた。

その光景だけで、真美のあまり大きくない堪忍袋はたやすく破裂した。

「帰って！ 明日香とリドリーが怖がっているじゃない！ 帰って

！

強い眼差しが姫子へ向けられる。

けれども、姫子は気づいていた。彼女の肩が、かすかに震えていたことに。

その敵意すら含んだ思いを前にして、姫子は、クスリと笑った。

『ふふふ……帰って、か』

姫子は感嘆の思いで真美を見つめた。

無理やり会話を遮られた形になった姫子だったが、不思議と怒りは感じていなかった。それどころか、晴れ渡る大空のような爽快感が胸の内を駆け巡っていた。

自分の常識に当てはまらない存在、自分よりも強大な相手に立ち向かう。文字にすれば簡単だが、実際に行う人間は数えるくらいしかない。現に、姫子は今まで数え切れないくらい実体化して姿を見せたことはあったが、誰一人として逃げ出さない者はいなかった。もしかしたら、そのとき逃げ出さないものを、人は勇者と呼ぶのだろう。

その勇者が今、姫子の目の前にいたのだ。戦う力もなく、逃げる力もなく、生き延びる力すら無い少女が、意思の力だけで姫子に抗っているのだ。

それも、自分のためではなく、別の人間のため、親友のためだ。自分の恐怖を必死に隠し、怯える友のために戦う勇者。自分の10分の1すら生きていない幼い少女の気高き精神と意思に、姫子は今しがた感じていた悪戯心を、心から恥じた。

同時に、目の前の年端もいかなない少女達をいたぶった自分に対して、度し難い怒りすら覚えた。

真美の頬を、一筋の涙が伝った。

『……すまない。驚かせすぎてしまったな……』

そっと、真美の頬を伝う涙を拭おうと、実体化した手を伸ばす。驚きに見開かれた真美の瞳が、姫子を映し出す。

小さな姫子の指が、真美の頬に触れる……瞬間、悲劇が起こった。

それは、姫子の完全な不注意から起きたことだった。

姫子は失念していたのだ。見えるのは、明日香と真美だけであつて、リドリーには見えていなかったことと、明日香の存在だ。姫子が実体化したのは、手、だけ。つまり、リドリーには、手首から先だけが真美へ迫っているように見え、明日香には真美を殺そうとしているように見えたのだ。

「逃げて、真美ちゃん！」

「No！」

姫子にも、リドリーと明日香が真美を突き飛ばすのを、止めることが出来なかった。

リドリーと明日香の指が10円玉から離れるのを、止めることが出来なかった。

『なに！？』

姫子は驚いた。と、同時に、愕然とした。

馬鹿な、契約が成されているのだぞ！ 契約を破ればどうなるか、知らないわけではあるまい！

交霊術や召喚術においては、知らず知らずのうちに契約が成されていることが多い。これは姫子のような霊的存在の力を借りるときに行われることで、いわば約束のようなものだ。この約束の力は恐ろしく強く忠実で、片方が契約を破れば、破った方の命を奪って、破られた方に命を譲渡するのが契約の基本原則だ。契約するのに凄絶な対価が必要になるものの、一旦契約してしまえば、邪神である姫子ですら契約に逆らうことは出来ない。それほど、契約は絶対なのである。

そして『こつくりさん』の場合、10円玉から指を離してはならないという条件の下、交霊が行われていた。今、その契約が破られたのだ。

噛み締めた姫子の歯が、ギリリと音を立てた。怒鳴りたい気持ちを、姫子は寸前のところで飲み込んだ。

『くそ！ 勇者は3人いたってことか』

姫子の予測した変化はすぐに現れた。紙の中央に置かれていた10円玉に光が点ると、そこから青白い手が2本飛び出したのだ。その2本の手は、すぐに明日香とリドリーに狙いを済ませると、一気に2人へ加速した。

その一部始終を、真美はスローモーションになった世界で見つめていた。ゆっくり、静かに、音もなくリドリーと明日香に伸ばされる青白い手。

真美は反射的に、利き腕の方にいたリドリーを抱え込むようにして体を捻り、庇った。

同時に、姫子は明日香を庇うように躍り出た。

青白い手が真美の背中と姫子の胸を貫く寸前、お互いの驚いた視線が、再び交錯した。

……あんだ……。

……私らしくないわね。

2本の青白い手が、真美と姫子の体を貫いた。

運命（後書き）

さて、もうすぐ毎日更新ができなくなりそうだ。

再開（前書き）

少し、グロテスクな描写があります。
嫌な人はブラウザの戻るボタンを押して戻ってください。

再開

痛いぐらいの静寂だけが、教室を支配していた。誰一人、物音一つ、声一つ立てることすら出来ず、ただただ起こってしまった現実を受け入れられなかった。

背中と頭に鈍い痛みを感じつつ、リドリーはなんとか体を起こした。上手く動かない頭を振って、辺りの様子をうかがう。

青ざめた表情の明日香が床に座り込んでいるだけで、他に誰もいない。リドリーは姫子の姿が見えなくなっていることに気づくと、深いため息を吐いた。

そして、視線を下ろして愕然とした。

「……マ、マミ？」

リドリーは自分の胸に顔を埋めている真美の肩を、そつと揺すつた。

だが、真美は顔をあげなかった。それどころか、ピクリとも反応を示さなかった。

……マミ？

心臓がドクリと音を立てる。全く体を動かしていないのに、リドリーは不気味に感じるくらい自分の息が荒くなっているのを、間に布を一枚挟んだような気持ちで感じていた。

まるで急かされるように、リドリーは胸に埋もれている真美の両肩を掴むと、押した。

「マミ！」

目を睨り、青ざめた顔色の真美の頭が……ガクリと壊れたオモチャのように横に倒れた。瞬間、リドリーは目を見開いた。

嫌な、想像するだけで嫌な想像が、脳裏を過ぎった。

寒い……凄く寒い。

リドリーは凍えそうなくらい冷たい何かが、胸の内に広がっているのを実感した。カチカチと合唱を奏でる歯が、意識から切り離さ

れてしまったかのように、制御できない。

「真美ちゃん！」

青ざめた表情で放心していた明日香が、大粒の涙を流しながら、リドリーと真美に飛びついてきた。

「真美ちゃん、ごめん！ ごめんなさい！ ごめんなさい！」

明日香は空ろな目つきで呆然としているリドリーから、やさしく真美を抱きとめると、そっと床に仰向けに寝かせた。意識を失っている相手にとか、気道確保とか、そんなものは頭に無かった。

起こさなければ、今、真美が目を開けなければ、永遠に目を瞑ったままなのではないか。そんな想像が、明日香の心を狂いそうなくらいはやし立てる。明日香は真美の頬を叩いた。

「真美ちゃん！」

真美の頬と、明日香の手の平が衝突する。手の平に痺れるような痛みが走り、鈍い音が教室に響いた。

だが、真美は眉すらしかめることはなかった。

さらに、明日香は真美の頬を叩いた。

だが、起きなかった。

明日香は涙がこぼれるのも構わず、鼻水が垂れるのも構わず、真美の頬を叩いた。同時に、明日香は自分を殺したいくらい殴りたかった。

痛い。自分の手の平が。

痛い。自分の心が。

痛い。親友を叩いていることが。

苦しい。でも、止めるわけにはいかない。

何度叩いたか分からない。明日香は真美の頬が真っ赤になり、自分の手の平の皮が捲れて血がにじんできた辺りで、一旦手を休めて、真美の様子をうかがった。

「真美ちゃん！ 起きて！」

それでも、まるで、抜け殻になってしまったかのように真美は起きなかった。明日香は鼻水をすすりつつ、真美の口に指を当てた。

「……………」

「……………」

「な、なによ……2人して、どうしたのよ……」

目と鼻の先、ちよつと前に体重を掛ければキスしてしまうくらいの距離まで、顔が近づく。そうすると、ますます2人の異常に背筋が強張る。

「ちよつと……2人とも、怖いよ」

「……真美ちゃん」

「……………マミ」

突然、2人の目から大粒の涙がこぼれ、ふにやりと笑顔になる。

真美が反応するよりも早く、真美に抱きついた。

「うわあ、ちよ、抱きつくな！」

慌てて離れようとしたが、無理だった。2人の腕はしっかり背中に戻されていて外れそうになかったし、なにより腕力が真美より強かった。

「真美ちゃん」

「マミ」

「ちよ、放して……って、鼻水、鼻水付くから！鼻水拭いて、ねえ！」

「真美ちゃん」

「マミ」

「だ……から、放してって言うているで……って!？」

真美の言葉が途中で止まった。暖かい何かが、じんわり肌にしみ込んでいく感触が伝わってくる。驚いて視線を下ろすと、服が黄色い液体で濡れていた。

同時に、鼻先に香るアンモニア臭。黄色い液体の出所は、明日香のスカートの奥、リドリーの半ズボンの中からだった。半分は真美の服に流れ、半分は床に流れていた。

予想外に事態、緊迫した雰囲気、ぐったりとした親友、親友の死、親友の生還、それら一生に一度あるかないかの出来事は、2人に凄

まじい緊張を強いていた。

そして今、真美が生きていることが分かった二人は、一気に体の緊張を緩めてしまい、一緒に緩んではいけない部分を緩めてしまったのだ。

徐々に黄色い水溜りの面積が増して行くのを目にした真美は慌てて2人の間に手を入れて突っぱねた。

「ちょ、汚い！ 汚いっていつか漏らしている、漏らしているから！」

「真美ちゃん」

「マミ〜」

「嫌ー！ 濡れる！ 濡れるからー！」

見回りに来た若葉が、教室の中を覗いたときには、3人はオシッコまみれになっていた。

ふう、若葉はため息を吐いて、保健室に備えられていた洗濯機兼乾燥機から下着やら服やらを取り出した。全自動脱水乾燥機能付きの、優れものだ。

その様子を恥ずかしそうに見つめている真美、明日香、リドリーの3人に、乾燥されて温かくなったそれを手渡した。

「はい。自分のやつを取ってね」

「……はい」

裸にシーツを巻いていた3人は、シーツをベッドに戻すと、急いで服を着始めた。

若葉が教室で3人を見つけたとき、教室は酷い有様だった。3人ともオシッコで服が全滅し、逃げようと這いずりまわる真美が原因でオシッコの跡が床に広がっていた。

頭痛を感じながらも、半泣きになっていた真美を説得し、明日香とリドリーをなだめて保健室に連れて来たのはかなり前だ。保険医には自分が面倒を見ると言って保険医を先に帰らせ、汚れた3人の

衣服を洗濯機兼乾燥機に放り込み、3人を保健室に残して教室の後片付けを終えた頃には、既に外は真っ暗になっていた。

そのとき、教室に残された『こつくりさん』に使われる紙と10円玉から、若葉は大体の事情を察した。

なので、3人が着替え終わったのを確認してから、若葉は説教を始めることにした。

「先に言っとくけど、言い訳は最後に聞くわ。3人とも、ベッドの上で正座」

「はい」

「分かりました」

言われたとおり、正座する真美と明日香に、リドリーは首を傾げた。

「……セイザ？」

「リドリー、私と同じようにするの」

真美の言葉に、リドリーは見よう見まねでベッドの上に正座した。正座に慣れていない3人が不器用ながらもそうしているのを確認した若葉は、一つ、頷いた。

「よろしい。それでは聞きますけど、あなた達、教室で『こつくりさん』をしていたでしょ」

3人の肩が震えた。若葉はため息を吐きたい気持ちを抑えて、右手を3人に見えるように持ち上げた。軽く指を曲げると、コキ、ポキ、と内側にこもるようにして骨が鳴った。

3人の表情が強張った。それに気づいている若葉は、そつと拳を作った。

「田中さん、西園寺さん、リドリーさん、自分達が最高学年であることは分かっていますね？」

「……はい」「」

「『していいこと』と、『してはいけないこと』の区別はついていますね？ 権利がどうか自由がどうか、寝惚けたことは言いませんね？」

「……はい」

「教室で、その…粗相をしたことを怒っているではありません。あなた達に、してはいけないことだと教えたにも関わらず、してしまったことに怒っているのです」

「……はい」

「……それが分かったのなら、頭を出しなさい」

「……」

3人は、若葉に向けて僅かに頭を倒して、固く目を瞑った。静かに伸ばした真美の右手を明日香が、左手をリドリーが握った。その様子を上から見ていた若葉の唇が、穏やかに緩む。しかし、すぐに引き締まった。

右手を軽く振り上げ、リドリーの頭に落とした。

「ohm!」

電撃のように激しい痛みが脳天を貫く。若葉の拳にリドリーの滑らかな髪の毛の感触と、硬い頭の感触が伝わった。すぐに、隣の真美へ振り下ろした。

「——っだ!」

最後に、明日香へ。

「痛っ!」

3人はすぐさま頭に手を当てた。途端、鋭い痛みが脳天から足先まで走り抜け、涙目になりながら、3人は若葉を見上げた。

若葉はニツコリと微笑んだ。

「はい、これで説教は終わり。ご苦労様でした」

「うう、いったゝ。先生、拳骨硬すぎ。石で殴られたかと思った」

「痛い……瘤が出来たかも……ありがとうございます……」

「ウウ……ワタシ、とっても痛いヨ」

「はいはい、明日になれば治るわ……それで、ここからが本題なんだけど……」

保健室の机から、椅子を引っ張ってきて、3人の前に置く。若葉はそこに、どっしりと腰を下ろして、足を組んだ。

「あそこで何があったの？」

若葉の質問に、3人は互いを見合わせた。3人の瞳には困惑と迷いが浮き出ていた。

「どうって……」

「どういえばいいか……」

「サッパリ、分からナイ……」

3人は申し合わせたように、同時に首を傾げた。別に話したくないわけではない。ないのだが、どう話を切り出したらいいか、分らなかった。若葉に、教室で何が起きたのかを逐一説明したら、理解してもらえるだろうか、その確証が持てなかった。

実際に体験した真美も、明日香も、リドリーも、今では夢ではなかったのかと思ってしまうくらい、現実感のない出来事だったのだ。3人とも、まだ、数時間前に起きた出来事をうまく整理出来ていないでいる。

実際に体験していない若葉に、はたして信じてもらえるのか。もしかしたら、一笑されてしまうのか。それとも、ふざけていると思われるってしまうのか。そう考えると、どうしても説明することが出来なかった。

「……どうしたの？」

首を傾げている頭を悩ませている3人に、若葉もまた、内心どうやって彼女達の言葉を引き出すか、頭を捻らせていた。

始めから、若葉は12歳前後の子供に何が起きたかを説明できるとは思っていない。大の大人でさえ、話そうと思っている内容の3割でも正確に伝えられるように話せれば、御の字なのだ。コミュニケーションがある人は、この残り7割を少なく出来る人を指し、現に若葉もその7割を如何に少なくし、3割を増やせるかを考えていた。

もともと言葉自体、非常に曖昧な情報伝達のツールでしかない。相手が自分と同じだけの知識と情報を持っているということを前提に行う言葉のやり取りは、一方の知識が不足しているとすぐに正確

な情報が伝わらなくなってしまう欠点があるのだ。正確な情報を、情報を持っていない相手に正確に伝えるには写真なり別のツールがない限り、まず伝わることはない。

今、情報を持っていないのが若葉であり、情報を持っているのが真美、明日香、リドリーの3人である。

とりあえず、若葉は断片的にも彼女達が話しやすいように、また自分が理解しやすいようにしてみた。

「もしかして、何から話したらいいか分からない？」

3人が首を縦に振ったのを見て、若葉はゆっくり話を進めることにした。

「それじゃあ、まず、最初の質問……3人は、『こつくりさん』をしていた。これは、間違いない？」

「……はい」

「次に、『こつくりさん』が原因となつて、あるいは一因となつて何かハプニングが起きた。これは、間違いない？」

「……はい」

『こつくりさん』でハプニングが起きた……。

ふと、若葉の脳裏に、明日香の実家を家庭訪問したときの出来事が蘇ってきた。

……もしかしたら。

「次に、もしかして、そのハプニングというのは、同学年や、他学年、または部外者の誰かの悪戯とか……これは、間違いない？」

「……」

3人が互いに視線を目配せして、首を横に振ったのを見て、若葉は半分確信した。

「違うのね……だったら、少し質問を変えるわ。そのハプニングは、もの凄いハプニングであつた。これは、間違いない？」

「……はい」

「それじゃあ、そのハプニングはもしかして、あなた達の手に負えない、解決できないくらいハプニングであつた。これは？」

また、3人が視線を目配せし、今度は首を縦に振った。

「『こつくりさん』が原因で、誰かの悪戯ではなくて、物凄いハプニングで、それは3人の手に負えるものではない……か。それじゃあ、最後の質問」

一指し指を立てて、最後であることを示す。

「……そのハプニングっていうのは、もしかして……幽霊だとか、悪霊だとか、目に見えない、または目に見える……超常現象的なものであった。これは？」

3人が驚いたように顔をあげた。どうしたらいいか分からない、そう顔に書いてある少女達が、若葉を見上げていた。

若葉は笑い出したい気持ちを隠して、3人に微笑んだ。

「やっぱり……なんとなく、そうなんじゃないかなって思っていたのよ」

「で、でも先生、信じてくれるの？」

驚きと不安に表情を硬くしている明日香が、若葉を見つめる。そこには、見える者の苦悩があった。

常識的に考えて、幽霊はこの世に存在しない。それが、一般の常識だ。たとえ本当に実在していたとしても、存在しないのが常識なら、存在しないのが正しいのだ。

常識は正解ではない。真実は必ずしも常識ではない。霊能力があるということを知って、気味悪く明日香を見たり、態度を変えられたりしたこともあった。

真美とリドリーの2人を除いて。

若葉は安心させるように、ニッコリと笑った。

「安心して……うーんと、西園寺さん、あなた、霊を見ることが出来るのでしょうか？」

「え、えつと……」

チラリと、迷いに揺れる明日香の視線が、真美とリドリーに向けられる。真美はギュッと手に力を入れる。握られた左手が少し痛いくらいだったが、それが明日香の心に余裕を与える。真美の横で笑

うリドリーが、心に力を与えた。

明日香の目に力が灯るのを見て、若葉は堪らなくなった。私にも、あなた達のような人がいたら……。

若葉は頭を振って、今しがた脳裏に過ぎった考えを捨てた。

明日香は何度か辺りに視線を逸らしたあと、うん、と頷いて若葉を見つめた。

「……はい、信じてくれないうちもしれませんが、私……幽霊が見えるんです」

「そう、分かつたわ」

それは分かつていたから。

若葉は特に驚くことも聞き返すこともせず、強く頷いた。

むしろ、驚いたのは3人の……特に明日香だった。その明日香の視線に耐え切れなくなった若葉は、気まずそうに頬を掻いた。

「いや……その、なんていうか……私も、見えるというか……」

「……え？」

「でも、除霊は出来ないというか……見るくらいなら出来るというか……見ることは出来るというか……その、つまり……そういうこと」

……沈黙が、保健室を流れた。

「まあ、そういうのだから、一応、私にも幽霊とかそういうのが見えるのよ」

「……み？」

「……え？」

「……ル？」

「……あ、うん、見えますよ、私」

ゆっくり、3人の頭に若葉の言葉が染み渡っていく。完全に3人の頭が理解すると、3人は頭を倒し、疲れたようにため息を吐いた。けれども、ふと、明日香は顔をあげた。

「先生が見えるのは分かつたけど……先生、どうして霊能力がないんですか？」

「え、ああ、西園寺さん、分かるの？ 相手の霊能力が分かるのって、上級霊能力者じゃないと分からないはずなんだけど……」

「ええ、まあ……」

霊能力にも、個人差がある。

一つは、見たり聞いたりすることが出来るレベル。このレベルは、霊感能力とも呼ばれ、霊能力者の仲でも霊に対抗する力が弱い人達である。いわゆる、初級霊能力者。

一つは、実際に御被いしたり、除霊したりすることが出来るレベル。このレベルになると、いわゆる霊能力者の中では一人前である。御払いは、根付いた霊を抜うこと。除霊は、何かに取り憑いた霊を抜うことを指す。いわゆる、中級の霊能力者。

そして最後の一つは、他者の霊能力の有無を調べることが出来るレベル。このレベルになると、他者の霊能力の有無も分かるようになるのだ。いわゆる、上級の霊能力者。

それを知っていた若葉は、感嘆の眼差しを明日香へ向けた。

「本当に凄いわ……まさか、その年で上級霊能力者だったなんて……世界って狭いわね」

「……うん」

明日香は顔を伏せた。

上級霊能力者って、なに？

真美は首を傾げた。リドリーは若葉の言っていることの半分も分からなかったので、真美の真似をした。

「田中さんとリドリーさんには分からないかもしれないわね。簡単に言うと、霊能力者にもランクがあって、上級霊能力者は霊能力者のランクの中で二番目に高いのよ」

「へえ……で、先生に霊能力がないってどういうことなの？」

「へえ……で、センセイにレイノウリヨクがないってドウヨ？」

リドリーは暇なので真美を真似した。が、少し生意気そうになっていた。

「……どうやって……それは、ねえ……」

言いにくそうに口ごもると、辺りをキョロキョロとうかがって三人以外誰もいないことを確認すると、口に手を当てて声を潜めた。

「言いにくいんだけど……秘密にしてくれる？」

「え、秘密なら、別に話してくれなくてもいいよ」

真美は事も無げに断ると、隣の明日香とリドリーに、ねえ、と訪ねた。

リドリーは何も分かっていないのか、ねえ、と返し、明日香は苦笑した。

明日香には、若葉の気持ちがなんとなく分かった。なので、口元に手を当てて、そつと返した。

「いいですよ……私達3人と、先生だけの秘密です。いいよね、真美ちゃん、リドリーちゃん」

「んん……明日香が言うなら、いいけど」

「んん……アスカが言うなら、イイよ」

真美もリドリーも、そつと若葉へ耳を差し出した。若葉はふわりと笑うと、そつと耳に口元を寄せた。

「実はね……私の目に秘密があるの」

「……秘密？」

「そつ、秘密。私の目はね、普通の目じゃなくて……この世の見えざるモノ全てを見通す『真実の眼』なの」

真美とリドリーは首を傾げた。けれども、明日香は驚愕に目を見開いた。

「真実の目！？ 国定の中でも最高ランクの目じゃないですか！ どうして先生が！？」

明日香の大声に、若葉は慌てて口に指を立ててジェスチャーした。

「わ、わ、西園寺さん、声が大きい！ シッー！ シッー！」

「あ、すみません！」

両手で口に手を当てて押し黙る明日香を見て、真美はまた首を傾げた。

霊能力のない真美やリドリーにとって、聞いたことの無い単語の

連発だった。正直言って、専用の翻訳機が欲しいとすら思った。

ふと、真美は袖を引かれる感触を覚える。見ると、リドリーが困惑気味に眉根をしかめていた。分からないことや、難しい話が続くときの、彼女の癖だ。

あちゃー、リドリー、ちょっと機嫌が悪くなっているじゃない。まあ、一緒に難しい話をされている私も、ちんぷんかんぷんだけどさ。

このままでは、またリドリーが泣き出してしまうかもしれない。そう思った真美は、明日香と若葉へ質問しようと、口を開いた。

「『ほほう、なるほど。真実の目、か。なるほど、なるほど、それなら私が見えるわけだ』……んん？」

自身の口から意識せず飛び出した言葉に、真美は首を傾げた。

隣のリドリーも、押し黙っていた明日香と若葉も、真美へ不思議な視線を向けた。

……あれ？

「えっと……今私、何を『今は私が話しているんだ。少し黙っている』って、なに！？」

サーッと音もなく青白くなっていく顔色。真美は驚いて口を手で押さえると、隣の明日香を見つめた。

今の、私じゃないよね？

明日香へ、目だけで訴える。明日香は愕然とした。

悪霊に憑依されている！

戦慄が明日香の背筋を走る。明日香は薬棚に立てかけて置いた自分のランドセルに飛びつくと、中から聖水の入った小瓶を取り出し、それを振り向きざまに真美へ振りかけた。

「うわ、冷『ば、馬鹿者が！ 聖水は待て！ 今のこの体にそれはまた！？」

「汝が身の災厄よ！ 聖水の力を持って、災厄を祓いたまえ！」

明日香の言い放った呪文が、聖水に反応し、聖水にさらなる力を与える。それは破邪の力となって、真美の体に巣くう悪霊を祓う…

…はずだった。

焼けるような感覚が、真美を襲う。聖水が薄く発光し、肌に触れた部分から白い湯気が出る。

「『ぐう、だ、だから止めると』——っ！？ 痛い痛い痛い、マジ痛い！ 痛い、痛い、痛い痛い痛い——！！！」

真美は自身を襲う凄絶な激痛に、ベッドの上をのた打ち回った。手足をがむしゃらに動かし、足やら手がリドリーや明日香にぶつかるにも関わらず、無我夢中で体をよじった。

着ていた服もすぐに溶けるように湯気に変わり、中からは焼け爛れて血みどろになった肌が露になる。思わず目を背けてしまうほどに、酷い状態になっていた。

「ま、真美ちゃん！？ せ、聖水よ、その力を鎮めたまえ！」
急いで術を解除し、聖水を無効化する。すぐに聖水は発光しなくなり、湯気も出なくなった。

聖水からの激痛が治まった真美は、いまだ頭に痺れが走るくらいの鋭い痛みを感じながらも、ほう、と息をついた。

だが、ベッドは焼け爛れた体から流れた血で真っ赤に汚れ、今もおびただしい量の血が流れてシーツを赤く染めていた。部屋中に血臭が漂った。

「真美ちゃん！」

「マ、マミ！？」

「田中さん！？」

突然の事態に、半分パニックになったリドリーが、真美へ手を伸ばす。肩に指が掛かろうとした瞬間、ギロリとリドリーを睨んだ。

「『触るな！』」

「ヒ——」

その眼光に、リドリーは息を呑んだ。記憶にない、凶悪な光がリドリーの胸を貫く。その肩を、明日香がそつと抱き寄せた。

「『さ……触るな……今は、触るんじゃない』」

普段の真美からはかけ離れている話し方。発音の癖も少し違う。

まるで、別人。

血だらけになった体を起こし、ベッドの上で四つん這いなる。体から流れ出た血液が、ボトボトと雨のようにシーツにこぼれ落ちた。ゴポっと、排水溝から水が逆流したような音が、真美の喉から鳴った。ゴポリ、ゴポリ、数度、喉が鳴ると、一際大きな音と共に、真美の口から大量の血液が吐き出された。

その血液は、真紅のように鮮やかで、場違いな輝きを放って床にこぼれ落ちた。

「マミ……マミ、マミ！ マミ！！ マミ！！！」

「あ、ああ……リ、リドリーちゃん、リドリーちゃん！ 落ち着いて！」

吐血している真美の姿を見て、またパニックを起こし掛けるリドリーを、必死に落ち着かせる明日香。ばたつかせるリドリーの体を羽交い絞めにして、なんとか押さえる。

「マミ！ マミ！」

「『うるさい！ 大丈夫だ、静かにしろ……うう！？』」

のろのろとふらつく体を起こそうとして、血の滑りで体勢を崩し、仰向けになる。背面に走った激痛に呻く。不幸中の幸いにも、シーツが血で滑っていたおかげで、摩擦で皮が捲れることはなかった。必死に荒い呼吸を鎮め、整えていく。鼻先に香る血臭に眉をしかめながらも、そっと横に目をやった。

「……田中さん」

青ざめた顔色の若葉と目が合った。

真美は、痛みに顔をしかめながらも、唇だけで笑みを作った。

「『また会ったな、若葉とやら』」

「え……また会ったって……」

「『この姿では分からないか？ まあ、無理もない』」

「この姿……ま……まさか……まさか！？」

「『やつと思ひ出したか』」

また会った。この姿。つまり、若葉は既に出会っていて、かつ真

美の外見以外の……真美に取り憑いている存在。若葉の記憶にあるのは、つい数時間前に出会った……。

「あのときの、幽霊？」

「『ご名答。私の名前は、姫子。かつては邪神の力を受け継ぎし怨霊、今はこの体の魂と同化した、元怨霊だ』」

ニヤリ、真美の唇が歪んだ。

夜が明けて（前書き）

少し血の描写があります。苦手な人はブラウザの戻るボタンをクリックしてください。

夜が明けて

玄関のドアを開けて家の中に入る。室内は真っ暗で、玄関のスイッチを手探りに探す……と、指先に硬い感触を覚えた。スイッチを入れる。

カチツと玄関入り口に取り付けられた白熱灯に電機が行き渡り、玄関から、洗面所入り口、その途中の真美の自室、総一の自室、突き当たりのリビングの入り口までを淡い橙色で照らした。

……お父さん、今日は遅くなるって言っていたっけ。

靴を脱ぎ捨て……少し面倒に思いつつも、下駄箱に戻す。フロールングの床をトントンと靴下で踏み締めてリビングに進む。フロールングの冷たさが、どこか新鮮だった。

リビングのドアを開けて中に入る。真っ暗で何も見えない。同じように、今度は玄関から届く明かりを借りて、電灯スイッチを探す……あった。

リビング、廊下、キッチン、三つの電灯スイッチの内、一番上のリビングのスイッチを入れた。

一瞬の間、蛍光灯の数回の点滅のあと、リビングは明るく照らされた。

見慣れたソファー、少し古めのテレビデッキ、お酒が入った棚、少し手垢で汚れた机と椅子、脱ぎっぱなしにされた総一のパジャマ等々が、真美の目に入った。

「……はあ」

重い、重いため息がこぼれる。背中に担いだ赤いランドセルを床に下ろし、真美は倒れこむようにソファーにうつ伏せになった。

……静かだった。ほんのりと肌寒く、耳鳴りすら感じそうなほどに静寂だった。

棚の上に置かれた少し大きめアナログ時計だけが、その静かな室内に、規則正しい音を運んでいた。

「…………はあ」

また、重いため息がこぼれる。

『どうした、いきなりすぎて疲れたかしら？』

突如、真美以外誰もいない静かな室内に、少女の声が響いた。別段、真美は驚くこともなく、声を無視した。

『あら、無視？ 無視するのね、これから一緒にやっていくのに……今から躓いてどうするの？』

また、声が聞こえる。それは、真美の頭の中から響いている。真美だけに、聞こえていた。

それを全く気にせず、真美はソファに置かれたクッションを引っ手繰って顔を埋める。そのまま、もう一度ため息をこぼした。

「……少し静かにして……まだ、自分でも整理がついていないから……」

『なんだ、物覚えの悪いやつだ。分からなかったのなら、もう一度説明してやろうか？』

「結構よ！」

体勢を変えて、仰向けになる。少しくすんでしまっている白い天井が、目に映った。

そつと、右手を胸の上に置く。

じんわり伝わっていく体温。ただ、それだけが胸の内から伝わってくる。

「…………ねえ」

『ん、なんだ？』

ポツリと呟くと、声が頭の中から返事が返ってきた。

「あなた、姫子って名前だったよね？」

『そうよ……意識を失っていても、私が起きている限り、あなたにも周りの声や音は聞こえていたでしょう？』

「うん、聞こえていた……そうなんだよね……あなた、私の中にいるんだよね……こんな、しょっちゅう口調を変えるようなやつが、私の中にいるんだよね……」

『おい待て、私がいつ変えた？ あと、こんなやつというな。お前は知らんと思うが、私はこう見えて強力な怨霊だったのだぞ』

ほら、また変わっている。

真美は胸中で呟いた。ほう、とため息を吐く。

真美は疲れていた。今日一日、数週間の時間を凝縮したかのように濃密な一日だった。体は重く、頭も重く、気持ちも重い。全身が鉛になってしまったかのような体の芯までくる疲労に、真美は心底眠りたい気持ちだった。

だが、眠気は全く来ない。いくら目蓋を閉じてても、次から次へと今日の出来事が蘇ってきて、返って眠気が覚めてしまった。

「……ねえ」

『なんだ？』

「明日香やリドリーや先生に、本当のこと言わなくて良かったの？」
胸の奥のそのまた奥の奥で、自分以外の何かがため息を吐いたのを感じた。

『言ってどうなる、真美？』

冷たい言葉。突き放すような言葉に、真美はふと誰かに縋りたいと思った。

でも、縋る相手はいない。縋れそうな相手はお仕事中だろうし、事情を説明しても理解して貰えないかもしれない。

結局、真美は手を伸ばしてクッションを握り締めることしかできなかった。

「……ねえ」

『なんだ？』

「私って……本当にもう……」

『……それは自分が一番分かっているだろ』

「……ねえ」

『……』

それっきり、返事は返ってこなかった。きっと、この問答に意味などないと思つてのことだろう。

事実、意味など無い。どれだけ問答しようが、答えは既に出てしまっているのだ。

真美はそつと、胸に手を当てた。全く返ってこない鼓動を思い、意識を失っていたときのことを思い返した。

濃厚な血の臭いが保健室の中を漂う。一息吸い込むだけで、血を飲んでいのような錯覚を起こす。空気が血の膜を作り、肌へばりついて来るような異質な違和感を与える。

その臭いの中心地に、彼女……『姫子』と名乗る真美がいた。彼女は荒んでいた呼吸を少しずつ静め、ぐったりと力なくベッドに横たわっていた。

だが、顔だけはあげていて、爛々と輝く瞳だけは、見た目を裏切る異様な迫力をもし出していた。

「……ひめ……こ？」

明日香に羽交い絞めされていたリドリーが、力なく友達の名を呼ぶ。

『姫子』は、リドリーの目をじつと見つめた。

「そうだ」

短く返された返事。彼女の知っている真美とは、似ても似つかない言葉遣い。目の前の少女の姿をした誰かは、何を言うでもなくただジツとしていた。

その瞬間、リドリーは悟った。今日の前にいる友達は、もう自分の知っている友達ではないということ。

彼女の目が真美とは決定的に違っていることを、リドリーは理解してしまった。

真美の明るく素直で生きる気力に溢れていた力強い眼差しは、そこにはない。

あるのは、暗闇よりも暗く、亡者よりも貪欲で、直視することを躊躇してしまうくらいに力に満ち溢れた、凄絶な眼差ししかなかった。

た。

リドリーは崩れ落ちるように、その場に座り込んだ。変わってしまった友の姿があまりに衝撃過ぎて、立つ気力すら失ってしまった。
「……リドリーちゃん……」

瞳からは光が消えうせたリドリーの痛ましい姿に、明日香はそつと顔を伏せた。

今、明日香の胸の内を襲うのは、絶えず打ち寄せる波のような後悔だった。寄せては引いて、引いては寄せて、数百本の小さな針が、何度も明日香の心を串刺しにして、抜いていく。空いた穴からは血が垂れて何処かへ消え、またその穴に針が突き刺さって傷む。

思えば、どうしてしようなどと思ってしまったのだろうか。

明日香は幼い頃か霊的存在を、見えざる者を見ることが出来た。そのせいで、幽霊からは付きまとわれ、悪霊からも狙われ、散々な日々を送ったこともあった。

だから、他の子供より、他の大人より、十二分に霊の恐ろしさを身に沁みて分かっているつもりだった。霊の存在など知る由もないリドリーを説得し、『こつくりさん』をやらなければ、こうならなかった。

修行を積んだ父に頼み込み、自身も修行を重ね、そこらの悪霊が束になって襲い掛かってきても、対抗できると自惚れていた。たとえ何が起きても、自分がいればどうにかなると、根拠のない自信で考えていた。

なのに、この様は何？

もし、過去に戻るなら、明日香は過去の自分を張つ倒してでも止めただろう。でも、明日香は過去に戻る力はない。

ならば、このまま黙って現実を受け入れるか？

答えは、否！

明日香は優しく、心を労わる思いでリドリーの頭を撫でると、騒動の内に床に転がっていたランドセルから、再び聖水が入った小瓶を取り出した。

これが、学校に持ってきた最後の一本。自身に宿る霊能力を除き、現時点で唯一対抗手段として活用できる武器で、身を守るための防具。

使用は一回限り。泣いても笑っても、一度しか使えない。外したら、それまでだ。

明日香は油断無くベッドの上で呻いている友達の姿をした、『姫子』と名乗る存在を見据えた。

「『ほう……いい目だ。大切な人を守ろうと決意した者特有の、強い目だ』」

「真美ちゃんの体から出て行け」

小学生の少女が出したとは思えないくらいに冷たい声に、横で事態を把握できていなかった若葉は、背筋を強張らせた。

自分の横で『姫子』を見据えている彼女が、自分の知っている彼女とは別人と誤ってしまつたくらい、彼女の声には迫力があつた。

思わず、若葉は彼女の名を読んだ。

「西園寺さん！」

「先生は下がっていて」

若葉へ振り向くこともせず、明日香は若葉の言葉を制した。

「この人は私が何とかします……確か、姫子と名乗りましたね。即刻真美ちゃんの体から出て行くのなら、見逃します。今すぐこの場から立ち去りなさい」

鋭い眼光をぶつける。精一杯やっているのに、それなのに『姫子』はニヤニヤと気味の悪い笑みを浮かべるだけで、余裕を崩さない。

「……ちくしょう！」

精神的な差を、絶対的な差を見せ付けられているようで、悔しかつた。噛み締めた奥歯が不愉快な軋み音を立てた。

「一刻も早く、一秒でも早く、真美ちゃんの体から出て行きなさい！」

自分に対する不甲斐なさ。

全く相手にされていない屈辱。

どれだけ怒りを声に込めて叫んでも、『姫子』は笑うだけで堪えた様子は見せない。嘲りに満ちた視線を、明日香へ向けるだけ。

それが、明日香にとって堪らなく苛ついた。

「……ふふふ……出て行け……か」

「そうです！ 即刻成仏しなさい！」

ジロリと、『姫子』は明日香を睨み付けた。

「『残念だが、それは無理な相談だ……この体は居心地が良い。生きる気力が溢れている、生きる活力が溢れている。低俗な魑魅魍魎どもが我先に人間を狙おうとするのを不思議に思っではいたが……なるほど、なるほど……いいな、生きているというのは』」

「——っ！！ ふ、ふざけるな！！！」

歯を食いしばって耐えていた憎悪が、理性の檻を突き破って一気に噴出した。

階全体まで響き渡りそうな凄まじい怒声に、床に座って俯いていたリドリーが、ビクリと肩を震わせた。そつと顔をあげて、リドリーは愕然とした。

「死んでいるくせに……生きている者の肉体を奪うな！」

怒りに醜く歪んだ明日香が、そこにいた。

リドリーは、自分が悪い夢を見ているのだと思った。床に視線を下ろすと、ベッドから垂れ下がったシャツから血が滴り落ちている。床に、赤い海を作っていた。

悪い夢だ。

そうだ、コレハ悪い夢だ。イケナイ、早く起きなきゃ、またマミに叱られる。また、ヒトリになる。またマミに、アスカにメイワクかけちゃう。起きなきゃ、起きなきゃ、起きなきゃ……ほら、目を開ける、アケル、早く目を開けなイト、先生に怒ラレル……あれ、どうしてかな？

いつまで経っても夢がサメナイよ。

その瞬間、リドリーは崩れ落ちるように床に倒れて意識を失った。硬い床の感触が、どこか心地よかった。

何か重い物を床に落としたような音が、明日香の耳に届く。

それによつてのぼせ上がった頭が、少し冷える。同時に、嫌な予感を覚えた。間違つてほしいと願つて、恐る恐るもう1人の友達へ視線を向けた。

「リドリーちゃん！」

ぐつたりと床に突つ伏しているリドリーを見て、明日香は悲鳴をあげた。呆然と立っている若葉を見て、明日香は怒鳴った。

「先生！ リドリーちゃんを！」

「……え、あ、ああ、は、はい！」

明日香の怒声に、やっと我を取り戻した若葉は、急いでリドリーを抱き上げて、部屋の隅に離れた。

その2人の前に立ちふさがり、明日香は再び『姫子』を見据える。

『姫子』はふう、とため息を吐くと、手で明日香を制した。

「先に言っておくが、私は何もしていないぞ。そいつが勝手に気絶したんだ……まあ、生娘には刺激が強かったのだらうな……さて、その娘」

『姫子』は明日香を指差した。

「『簡潔に述べよう。はつきり言つて私自身、なぜこの娘の体に憑依しているのか、全く持つて分かん』」

そつと、胸に手を当てる。少し頂が出来始めた胸の感触が、手の平に伝わってくる。同時に、生き物特有の体温も。

「『さつきも言つたとおり、確かこの体は居心地が良い。それは確かだ。だが今更、生者の肉体を手に入れたところで、それが何だ？ 正直言つて、鬱陶しいだけだ』」

「……だったら、さつさと離れればいいじゃないですか」
自然と口調が刺々しくなる。離れたいと思つているなら、さつさと離れる。明日香の偽りならぬ思いは、その一言だった。

けれども、『姫子』は疲れたようにため息を吐くと、ゆっくり体

を起こした。おへそに溜まっていた血がわき腹を流れていく。シーツの端の辺り、少し乾いた血が空気に触れて酸化し、黒く変色を始めていた。

むわっ、と漂う血の臭い。ただでさえ濃厚だった血の臭いが、さらに濃厚になった。気の弱い人なら、すぐに気分を悪くしていただろう。それほどものになっていた。

明日香は小瓶の栓を抜いて、小瓶の口で波立つ聖水をちらつかせた。

「動かないで！」

数滴、小瓶の口を伝って流れ落ちてゆく。その水滴をジッと見つめた『姫子』は鬱陶しそうに手を振った。

「『いいのか？ 次にその聖水を私に掛けたら、今度こそこの肉体は機能不全まで負傷するぞ』」

「……く!!」

明日香は悔しさに奥歯を噛み締めた。小瓶の栓を閉めて、そっと手を引いた。

確かに、『姫子』の言うとおりだ。今の『姫子』の、真美の肉体のダメージは深刻だ。原因は分らないが、聖水によるダメージであることは疑う余地もない。

しかも、途中で聖水の効果を消したのだ。それなのに、真美の肉体は重症を負った。全身に酷い火傷を負わせてしまった。

そのうえでまた聖水を使えば、今度こそ真美の肉体は持たない。

『姫子』はベッドの上で上半身を起こし終えると、両脚をベッドから投げ出して、明日香を見つめた。

「『もうやっているさ……やってはいるが、どうやっても抜けることが出来ないんだ』」

「……どうということ？」

どうもこうも、『姫子』は肩を竦めた。

「『この体から出ようにも出られないのさ。どうやら、よっぽど深く憑依してしまっただけ……』『こっくりさん』をやったときの話

を覚えているか？」

「こつくりさん？」

「『そうだ……あのとき、本来は契約どおりに行われるはずだったが、何かしらの……とら、とらぼる、とらぶる？ だったか、まあ、そういうことが起きた。おそらく、それが原因で、私はこの体の中に入ってしまったのだらう』」

あのととき。明日香の脳裏に、教室での出来事が蘇ってくる。飛び出してくるリドリー、真美に伸ばされる手、そして、倒れた真美の姿……。

明日香は頭を振って、今しがた思い浮かべた光景を頭から放り出した。今は、そのことを後悔しているときではない。

「『おかげでほれ、霊体である私が受けるはずの聖水の力が、そのまま肉体に現れてしまっている。よほど深く憑依してしまったのだらう。どうも、一朝一夕では出られんみたいだ』」

「……それで？」

「『無理に引き剥がそうとすると、この肉体の持ち主……確か、真美と言ったな。その真美の魂を傷つけてしまうかもしれないし、私の魂も少なからず危険になる。現時点では除霊するのは得策ではない……』と私は思うのだよ』」

一気に話した『姫子』は、一息いれるように、大きく深呼吸をした。すぐに血なまぐさい保健室の空気に気づき、眉をしかめた。

怨霊のときはいくら嗅いでも平気で、むしろ心が躍るような心地よさすら覚えたが、今となっては気持ち悪くなるだけだ。

「『そんなに警戒しなくてもいい。私はお前達と戦うつもりもなければ、この肉体に危害を加えるつもりもない。ただ、出たくても出られないので、一時的にこの体の中に入っているだけだ』」

ジッと、明日香は『姫子』の瞳を見据えた。爛々と輝く異質な力強さはあるものの、人を騙そうとするいやらしい色は無い……ように見える。

姫子の言うとおり、現時点で明日香が出来ることは何も無い。無

理に何かを行えば、どう転んでも結果は真美を傷つけるだけだ。

「……真美ちゃんには……」

どう伝えるつもりなの？

「『それなら安心しろ……もう既に事情は説明している。私と真美は、今は同じ体を共有している。どちらか一方が意識を保っていれば、私が聞いたことがそのまま真美の耳に入る。逆もまたしかりだ』」

「……だったら」

「『もちろん、この体の持ち主は真美だ。真美の意思を最大限尊重するし、私の存在に危険が迫らない限り、出来る限り口を出すつもりはない』」

「……」

『姫子』の勝ち誇った笑みが、明日香へ向けられる。

明日香は激しい胸の熱を感じていた。その熱は心臓から送られる血液によつて、全身に送られる。その血液が脳に回ったとき、明日香は知覚した。

どうしようもない怒りというものを。

憎悪にも似た屈辱が、自分自身の心を焼いていくのを、止めることが出来なかった。

悔しい。憎い。本当なら、今すぐ聖水を使つて除霊してやりたい。存在を浄化してやりたい。明日香は心からそう思った。

けれども、出来なかった。『姫子』が持ち出したカードはこちらのカードを完全に封じてきたうえに、逆らえないように真美を交渉に持ち出してきた。

…… 反対する理由など出てこない。相手が…… 悪すぎた。

心理的駆け引きにおいて数段上手の『姫子』と交渉する。それをするには、明日香はやはり幼すぎた。実力的にも、精神的にも、肉体的にも。

せめて、精一杯憎しみを込めて睨みつけても、やはり『姫子』は面白そうに笑うだけで、堪えた様子は見せない。それが、さらに明

日香の自尊心を傷つけた。

『姫子』は一つ、大きな欠伸をしてから、血で汚れたベッドを手で拭う。軽く指を擦ると、真っ赤な橋がねっとり出来た。

「『さて……ずいぶん血で汚れたな。見つからない内に、元に戻しておかないと、後々面倒なことになりそうだ』」

スツと人差し指を立てる。ボン、と圧縮された蒸気が破裂したような音が保健室に響くと、途端にベッド周辺に広がっていた血の海に、変化が起きた。

「あ……血が……」

真っ赤に染まったシートから、赤い霧が噴出していく。それはあたかも血が蒸発しているように見え、瞬く間に空中を漂っている赤い霧は空気に溶け込むように消えていく。

全ての血が蒸発するのに数十秒、保健室から赤色が消えるのに数十秒、そして、部屋中を飲み込んでいた濃厚な血の臭いが消えるのに数十秒。ものの5分とかわからず、保健室は元の日常の姿を取り戻した。

若葉は呆氣に取られた。眼前に広がった光景もそうだが、白を基調とした保健室の色合いを懐かしくすら感じた。

「……あ」

下半身の感覚が喪失する。若葉は力なく床に座り込むと、呆けたように、大きく息をついた。

ほんの十数分も前には同じ光景が広がっていたのに、若葉はまるで数日間、真っ赤な世界を生きていたような錯覚を覚えた。実際、それぐらいに若葉は疲労を感じていた。

ズツシリと体に重力が掛かっているのが分かる。

息を吸うことすら面倒に感じるほど、精神的にも肉体的にも疲労したことは、今まで一度もなかった。

「『お次は服か……』というより、まずはこの体か』」

人差し指を軽く振る。すると、火傷と裂傷によって引き裂かれ焼け爛れていた真美の肉体が、凄まじいスピードで治癒を始めた。

全身の傷口から損失した血液を補うため、『姫子』の力で血液を生成する。それをすぐさま裂傷した傷口に集めて修復に回すと同時に、各部内臓に十分な血液を送る。十分に行き渡ると、次に傷口の修復を始める。

血液の中に含まれる赤血球が傷口から進入してきた雑菌を捕食する。血小板が出欠しえいる部分を凝固して止血し、傷断面に膜を張る。

みるみるうちに真美の肉体が元に戻っていく。『姫子』はもう一度指を振るった。

透明な空間から、白い蒸気がにじみ出るように現れる。その白いものは、すぐさま真美の肌にまとわりつくと、凝縮して服の形を取り、色を放ち始める。

「『まあ、こんなもんかな』」

短時間の間に、真美の外見は聖水を浴びる前と同じ状態に戻した『姫子』は、ふう、とため息をこぼした。

「『さて……私はしばらく寝る……あとはお前達で勝手にやってくれ……』」

呆けている明日香にそれだけを伝えたと、明日香はさっさと意識を真美の中に沈めた。

目を開けると、目の前には涙と鼻水を垂れ流し、青い瞳を赤くした、乙女には恥ずかしい状態になっているリドリーと目が合った。

……うわあ。

上半身を後ろに倒し、腹筋に力を込め、上半身を一気に前に倒す。顎を引いて額を突き出し、リドリーの白いおでこに頭突きを放った。思わずそうしてしまったのは、決して私のせいではない。

「ohm!」

「あだ!」

硬い頭蓋骨の感触が額に伝わる。瞬間、目の前が真っ暗になり、

ポツポツと白い斑点が現れて消える。やっと視界のピントが合ってきたとき、床にへたり込んで頭を抱えて呻いているリドリーがいた。
「ohm……………」

涙目で睨んでくるのを無視して、真美はベッドから降りた。冷たい床の感触が裸足の皮膚に直接伝わってくる。そこで初めて、真美は自分が裸足になっていることに気づいた。

そっと、周りを見回す。

リドリーと同じく涙目になった明日香。彼女もリドリーと同じように酷い有様だったが、顔色はリドリー以上に酷く、目の下にはうつすら隈ができていた。その後ろにいた若葉は、優しく明日香を労わるように肩を揉んでいた。彼女の目の下にも隈ができていて、疲労の色が濃かった。

その様子を見て、真美の体にも押し掛かるような圧力が掛かってくる。それはすぐに疲労を形作り、体中の活力が抜けていくのを実感した。

それは、真美だけではない。明日香も、リドリーも、若葉も、同じ。

真美はふう、とため息を吐くと、明日香を見つめた。

「……………」ありがとう…明日香。私のために色々してくれて……………」

「……………」でも、私が、私のせいで……………」

「違う、ワタシのせい!」

明日香の懺悔を、リドリーが止めた。リドリーは膝立ちのまま真美を抱きしめた。腹部にリドリーの暖かい体温が伝わってくると同時に、美しい金髪から、ほんのりとシャンプーの香りが匂ってくる。見下ろすと、涙を流したリドリーと目が合った。

「ゴメンなさい、ゴメンなさい! ワタシが『こっくりさん』やろうって言ったカラ……………」本当にゴメンなさい……………」

ただ、ただ謝り続けた。リドリーには、それしか出来なかった。それしか、することが出来なかった。

「ゴメンなさい、ゴメンなさい、ゴメンなさい、ゴメンなさい、ゴ

メンなさい、ゴメンなさい、ゴメンなさい、ゴメン」

「もういいよ」

優しく、リドリーの頭に手を置いて、撫でる。肌触りの良い髪質が指に心地よい。体質からか、それとも普段の手入れが素晴らしいからか、驚くほど手に馴染んだ。

顔をあげて、顔を伏せている明日香を見つめる。その後ろの若葉は、気まずそうにこちらを見ていた。

そんな疲弊している彼女を見て、真美は今更彼女を責めるつもりはなかった。それどころか、真美は自分のためにそこまで疲労するため死力を尽くしてくれたことに、深い感謝の念すら感じていた。

「……話は、『姫子』の中で聞いていたわ」

「……うん」

小さくか細い声ではあったが、真美の耳には明日香の返事は聞こえた。

「……い……おい、おい、真美、どうしたんだ？」

肩を揺さ振られる感覚に、真美はふっと意識を現在に戻した。見ると、心配そうに眉をしかめている総一が見下ろしていた。スツと真美よりも一回り以上大きな手の平が眼前を過ぎり、額に置かれた。総一の、父親の熱が沁み込むように伝わってくる。

……暖かい。

真美はそつと手を伸ばして、総一の手の上に、自身の手を置いた。そうすると、手の平から総一の体温がさらに伝わってくる。まるでそれは、総一の命が流れ込んでくるようで、心地よかった。

「真美、具合でも悪いのか？ 風邪か？」

一連の行動がさらに総一の不安をかきたてたのか、慌てて着ていた薄手のジャンパーを脱ぎ捨てると、真美の体の上に掛けた。

ジャンパーから臭う、自分にはない男の臭いに、真美は顔をしかめた。

「……大丈夫だよ……ていうか、このジャンパー臭うんだけど……これ、クリーニングに出したのって何時？」

「え、た、確か……半年くらい前だったかな……」

真美は無言で体を起こした。無言のまま総一にジャンパーを返した。

「これ、クリーニング出しといた方がいいと思うよ……けっこう臭う」

「え、本当か？」

ジャンパーに鼻先を近づけている総一を尻目に、真美は両腕を高く上げ、爪先立ちにして、大きく背筋を伸ばした。体中の筋肉から疲労が発散されていくような感覚。息が切れるまで続けて、ふう、と脱力した。

お父さんが帰って来ているってことは……。

棚の上に置かれたアナログ時計の短針は、既に夜中を過ぎて、早朝といってもいい時刻を指していた。寝入っていたのか、それとも起きていたのか、もう分からない。

いつの間にか、朝になっていたのね。朝ごはんの用意をしなくちゃ。

真美は自身の服を見て、ため息をこぼした。

昨日、着替えないでそのまま横になっていたせいで、ずいぶんと皺くちやになっている。何をするにしろ、一度着替えた方が良さそうだ。

真美はそつと、自身の胸に手を当てた。

……手の平には、体温が伝わってきた。

真美はもう一度ため息をこぼすと、着替えるため自室へ向かった。

夜が明けて（後書き）

年末か。今年も色々あったなあ……。

これを見ている人達も、風邪を引かないよう気をつけてくれ。

先日風邪引いて凄いことになってしまった私が言うのもなんだけど。

インターバル2

落とされた照明。スクリーンに映し出される様々な映像。僅かな電動音。映し出されたスクリーンを見つめる数人の人影。そこには、儼かな空気が流れていた。

全長10メートル、明らかに特注品と見て取れる高そうな長方形のテーブルが、部屋の中央に一つ。そのテーブルにはいくつもの椅子が均等感覚で並べられている。

テーブルの上には、白い湯気を立てるお茶が入った湯のみと、レポート用紙の束が無造作に置かれていた。

そのうちの一つに、白い手が伸びる。よく手入れされた綺麗な指が湯飲みを持ち上げると、人影の口に入った。静かな空気に、お茶を飲み干す喉の音が響いた。

「……ふう、ところで」

飲み干して空になった湯飲みを置いて、瀬川芽衣子せがわ・めいこは無造作にレポート用紙を捲くりつつ、スクリーンを見つめた。軽く伏せられた長いまつげには、不思議な色気があった。

「霊力分布図を見る限りだと、それほど気に留めるようなことでもない、私は思うのだけど」

「……それは、私も同感ですな」

湊の隣の椅子に座っていた男、近藤多田こんどう・ただいち一も、湊の意見に賛同した。額と顎に刻まれた深い皺からは、彼の深い人生経験を物語っている。たった一言喋っただけなのに、その言葉には重みがあった。

芽衣子は、隣の近藤を、チラリと見つめた。

「近藤さんもそう思う？」

「無論です」

近藤は、レポート用紙を何枚か捲ったあと、その中の一文を指差した。

「ここ……確かに霊力分布図を見る限りでは、近年でもかなり数値

が大きくなっています。ですが、この数値自体、12年前にも同じ数値を記録しています。あのときも、悪霊の数そのものは増加しましたが、ほとんどは低級なものです。わざわざ我らが警戒する必要はないと、私も思います」

近藤の言葉に、いくつもの人影達も、一様に頷いた。

霊力分布図とは、霊力の数値を地図上に表した分布図である。地図上に表したのと、数値に表したものがあり、基本的に二つを併用して扱う。

見た目には大気圧の書き方と似ているが、霊力分布図は大気中の霊力濃度を調べることが出来、数値が高いほど霊力濃度が高いという事になっている。

平均は100となっていて、80以下なら比較的清浄されている場所。120以上なら、なにかしらの切欠で悪霊が発生しやすい危険な場所ということだ。

近藤は、霊力分布図の数値化された表を指差した。その中で、117と記載された項を指でなぞった。

「ただ、この場所……石黒地区ですが、数値117は高い。なぜ、今まで私達に報告しなかったのですか？ このままでは、近いうちに悪霊が発生してしまうかもしれません」

人影達の間からも、ざわめきが出始める。近藤の言うとおり、なぜ、もっと早く対処を取らなかったのだろうか。それが、その場全員の疑問であった。

霊力分布図にて調べた数値が110を超えた辺りで、溜まった怨念を一度浄化するのが普通の処置だ。悪霊が発生する前に元を正してしまえば、悪霊自体発生することはない。そのため、霊力分布図の数値にはことさら気を使っていたのだ。

全員の視線がスクリーンに……いや、スクリーン脇の人影に向けられた。

その視線を感じたのか、はたまたタイミングを見計らっていたのかは定かではないが、人影がゆっくりとスクリーンの前に立った。

映写機から発射された光が、人影を照らす。

そこにいたのは…… 1人の女性だった。

ショートカットの艶やかな黒髪、垂れ目気味な目元に、桜の花びらのように小さな唇。温和な顔立ちをしたスーツ姿の美女は、全員の視線を真っ向から受け止めている。

部屋に集まっている人影を1人、また1人、順番に見据えたあと、若葉乙女は、テーブルの上に置かれたレポート用紙と同じものを、胸に抱きかかえた。

「霊力分布図が送られてきたとき、近藤さん…… 私も同じことを怒りました。ですが、この資料が急遽、送られてきたのが昨日です。そして、このスクリーンに映し出されているのが、一週間前です…… この意味が、分かりますか？」

全員の視線がスクリーンに集まる。乙女が一步スクリーンの光から身を引くと同時に、スクリーンに表示されていた霊力分布図が変わった。資料に明記されているデータとは全く違う。全ての数値が…… 特に、石黒地区の数値が90まで下がっていた。

乙女の言葉とスクリーンの映像に、室内にいた全員が動揺の声があがった。あつという間にざわめきが大きくなり、すぐに室内は騒々しくなった。

少し五月蠅いと思いつつ、近藤は声を張り上げた。

「一週間前ですか！？ しかし、前に見たときは……」

「三ヶ月前、今のようと同じ会議を行った際、霊力分布図は例年通り異常ありませんでした。それに、数値自体も今スクリーンに映し出されているものとはほとんど変わりません…… つまり……」

「たった一週間の間に、数値が20以上も上昇したってことですか！？」

乙女の台詞を、芽衣子が遮った。

通常、数値が1上昇するだけでも、最短で一週間は掛かる。単純計算で、20上昇するのに20週、最低でも半年以上は掛かるのである。

それが、たった一週間。はつきり言って、異常である。

幸いにも周りは騒然としていたため、誰も気に留めなかったが、一瞬、乙女の表情に苛立ちにも似た感情が走ったのを、芽衣子は見失ってしまった。

芽衣子はハッと我に返ると、気まずそうに頭を下げた。

乙女は、重いため息を吐くと、強く床を蹴りつけた。室内中に響くパンプスのかん高い音が、騒然とした空気を一掃した。

静かになったのを確認した乙女は、部屋の入り口に向かい、照明のスイッチを入れた。途端、室内が明るくなった。

乙女はパンプスを鳴らせて映写機のスイッチを切ると、室内の全員を見据えた。

「……もしかしたら、カテゴリーAクラスの悪霊が、行動を開始したのかもしれませんが」

全員の表情が、凍りついた。

日も沈み、赤い光が世界を照らしている中、真美、明日香、リドリーの三人はいつものように下校していた。勉強の話だったり、芸能人の話だったり、将来の旦那さんの話だったり、たわいも無い雑談が多いのだが、今日は幽霊についての話だった。

話し始めてすぐにリドリーは真美の腕を抱き寄せる。腕に感じる二つの膨らみに嫉妬の感情を覚えつつも、途中、明日香がポツリとこぼした言葉に首を傾げた。

「カテゴリー？ なにそれ？」

真美は隣を歩く明日香を見た。真美の隣を歩くリドリーも、同じように明日香を見た。

明日香は穏やかに笑いながらも、人差し指を顎に当てた。彼女の考えるときの癖のようなものだ。

「うーん……要は、幽霊の強さのレベルみたいなもの……かな？ 危険度の高さでもあるから、一概には言えないけど」

「ふうん、そうなんだ」

「アルファベットで表すことができ、Aが一番高く、Eが一番低い。A、B、C、D、Eの順になっているの」

リドリーが、ズイツと身を乗り出す。腕を捕まれた真美も、同じく引つ張られた。

「ちょ、危ない」

「あ、ゴメン。それで、アス力はどれが倒セルノ？ C?」

リドリーの無邪気な質問に、明日香は少し頭を悩ませた。おそらく、リドリーのことから、1人で戦って倒せるランクを指しているのだろう。

実は明日香は、1人で除霊したことは殆ど無い。いつも父の手伝いや援護みたいな役割で、正面から悪霊と立ち向かったことがほとんどないのである。

聖水の精製や除霊道具の使用など、実力自体は上級霊能力者に匹敵するのだが、如何せん経験が無い。そのため、実践ではその力の半分も出せないのである。

唯一単独で行ったときも、陰から父が見守っていたし、万全の準備をしてから事に当たったため、あまり1人で倒した実感はない。

「えっと、私独りなら……多分……Cまでは、なんとかかな?」

明日香は首を傾げつつ、自信なく答えた。ちなみに、カテゴリーCクラスの悪霊は、中級霊能力者で苦戦するレベルである。

「ohm! ヤッパリCだね」

1人、頷いているリドリーを見て、真美は捕まれた腕を引つ張りつつ、訪ねた。

「……やっぱリ? リドリー、それ、何を根拠にしているのよ?」

「え、ナニって、オッパイだよ」

逆に腕を抱きしめる力を強めつつ、リドリーは朗らかに笑った。

「アス力はCカップだから、Cランク。ワタシはDカップだから、

Dランク。マミはAラン、ohm! イタイ! マミ、腕イタイ!」

「私はBだよ。リドリーはそろそろその勘違いを治した方がいいと

思うよ」

「デ、デモ、この前ダディが、限りなくAに近いBはAだって……だから、Aの方が、アア、イタイ！」

「あ、あの、真美ちゃん、リドリーちゃんが痛がっているから、そろそろ……」

真美は無言のまま腕の力を緩める。途端、スルリとリドリーは自身の腕を抜くと、眉をしかめて腕をぶらぶらと振った。少し、揺れる二つの膨らみ。

悔しくはない。まだ、成長の余地は十分にある。まだ、私は小学生なのだから。真美は1人、決意を固めた。

……ところで、カテゴリーCってどれくらい強いんだろう？

ふと、先ほどの明日香の話が脳裏に蘇ってくる。降って湧いた疑問に、真美の好奇心が疼きだす。その本能に促されるまま。真美は口を開いた。

「ねえ、明日香」

「なに？」

「さっき言っていたカテゴリーCって、どれくらい強いのか？ 明日香が楽勝するレベル？ 苦戦するレベル？」

「え、っと、うーんと……私って、本番に弱いタイプだから……」

また、明日香は頭を悩ませた。

悪霊の強さというのは、場合によって変動することが多い。自殺の名所や事故が起こりやすい場所に出現する悪霊は、時間帯によって強さが変化する。たとえば、事故の起こりやすい時間帯はカテゴリーBになり、それ以外はCになっている、これが、変動だ。

また、怨念や負の感情が集まっているところは比較的悪霊が発生しやすく、ときにそれらの負の力を吸収して強化することもある。そのため、やはり一概にどれがどのレベルとは決定し難い。カテゴリーランクには、だいたいこれぐらいの被害が出そうだから、ランクはコレ、という決め方が殆どなのである。

唯一の例外は、極端に弱かったり強かったりする場合だ。前者は

カテゴリーEに、後者はカテゴリーAになる。

頭を抱え始めた明日香を見て、真美は慌てて質問を変えた。

「それじゃあ、姫子は？」

「え？」

「what？」

その名前に、明日香の表情が強張った。それは腕を擦っていたリドリーも同じ。

急に空気が凍ったことに目を白黒させる真美を尻目に、真美の胸の奥で何かがざわめいた。すぐに、真美の脳裏に少女の軽やかな声が響いた。

『呼んだか？』

「呼んでない」

軽く、頭を叩く。自分にしか聞こえない姫子の声は、まるで電波を受信しているみたいだと自嘲する。真美は表情を強張らせている2人に笑いかけた。

「2人ともまだ気にしているの？ そう怖がらなくてもいいと思うよ……今のところ悪さとかしてないみたいだし」

真美の言葉に、リドリーは僅かながらも警戒をとく。だが、明日香は依然強張った表情のまま、ゆっくり首を横に振った。

無理も無い。

真美は思った。自分で言うのもなんだが、あれは一生モノのトラウマになりそうな出会いだ。いくら私が言っても、そう簡単に姫子を受け入れるようなことはないか……。

ふと、袖を引かれる感触。目をやると、リドリーがおずおずと袖を掴んでいた。

「マ、マミ……それじゃあ、ヒメコは良い幽霊ナノ？」

リドリーの縋るような視線が真美の胸の奥を射抜く。

「だって？」

少し意識を頭の奥に向けるように集中する。そんなことをしなくても姫子の声は聞こえるが、声を意識して聞こうとするうちに、自

然と癖になった。

『良い幽霊なわけがないだろう。はっきり言って、悪い幽霊の代表格みたいなものだぞ』

「良い幽霊じゃないって。悪い幽霊の代表格みたいなものだって」
途端、真美は強い力でリドリーに抱きついた。暖かい体温に頬を緩ませつつ横を見ると、細くきらめく金髪と、形良い白い耳が震えていた。

……最近、抱き付けられる頻度高くない？

「大丈夫、大丈夫だって。こいつ、けっこう、ていうか物凄く世間知らずなんだよ。今どき携帯電話も知らなくてね……電話したらもう、五月蠅かったんだから」

『何を言うか。そもそも離れた場所にいる人間と会話すること自体、想像も付かん。』くるま『や、』でんわ『があることは知っていたが、まさか『けいたいでんわ』なるものがあるとは、誰が想像できよう』

「おまけにガスコンロ使ったときは、敵だ、攻撃を受けているぞ、って頭の中で叫びまくって五月蠅かったんだから」

「それは言うな……そもそも、50年前にはあんなものはなかったのだぞ。たった50年で炎を自由に生み出す器械を作るとは、人間の知恵とは凄まじいものを感じる」

ああ、もう姫子、ちよつと五月蠅いから黙っていて！

頭の中で怒鳴ると、胸の奥のざわめきは徐々に小さくなっていき、消えた。なんとなく、去り際に人を食ったような生意気な笑顔を浮かべている、そんな気がした。

しばらく、リドリーの背中を撫でるように叩く。そろそろ帰り道が分かれるな、と考えていたところで、真美の体にしがみつくように抱きついていたリドリーが顔をあげた。

真美とリドリーの視線が交錯する。少し涙で潤んだ青い瞳に夕焼

けの光が反射して、不思議な色合いを放っていた。

「……マミ、ありがとう」

「ん、どういたしまして。リドリーは本当に泣き虫だね……まあ、可愛いからいいけど」

「もう、そんなことイワナイてください」

恥ずかしそうに真美から離れたリドリーは、履いていたスカートをポンポンと叩いた。

「ゴメンなさい。今日はダディ、いつもより早く帰ってクルから、帰らなくちゃ。アスカ、マミ、バイバイ」

「あ、うん、バイバイ、また明日」

「……また明日ね」

力いっぱい手を振って、リドリーは赤色に輝く道路を走っていった。活動的に躍動する彼女の両脚。スカートが風に揺らめいていた。小さくなつていく後姿をなんとなく見つめ続けていると、そのまま夕暮れの世界に消えていった。

「……………」

「……………」

特に理由もなく、真美と明日香はリドリーの後姿を見つめ続けた。見えなくなつた後も、そのまま遠い目で景色を見る。

見慣れた住宅、見慣れた道路、見慣れた電柱、見慣れた信号、見慣れたゴミ箱、見慣れたゴミ、全てが見慣れた景色ではあったが、夕焼けで照らされた景色は、どこか違って見えた。なんてことない景色だけれども、何か心に来るものを、真美は感じた。

いいな……こういうの。

朝でもない、夜でもない、不思議な時間帯。その美しさに、真美は魅せられていた。

「……真美ちゃん」

ふと、明日香が真美に話しかける。振り向くと、神妙な表情の明日香が見つめていた。

「……これだけは忘れないで。私は、真美ちゃんの味方だから」

「え、う、うん、ありがとう」

真正面から言われると、照れる。夕焼けで良かったと、真美は思った。

だが、次の明日香の言葉に、その真美の感情も一気に冷えた。

「……それと、忘れないでね……真美ちゃんの中にいるそいつは、決して良い幽霊じゃない。私達には悪くはないのかもしれないけれど、良い幽霊じゃない。それだけは、頭の隅にでもいいから、覚えておいて」

それじゃあ、また明日。

明日香は絶句している真美を置いて、小走りに走っていった。その後姿は、とても小学生のようなものではなく、まるで映画のワンシーンのように美しかった。

「……………」

真美は、なんとさえいいか分からなかった。

あの日から一週間が過ぎた。一週間、一緒に過ごしたが、それでもなお、真美は明日香やリドリーのように姫子を嫌いになれないでいる。結果的には自分が一番被害を受けているのに、だ。

それどころか、どうして姫子を信じてやれないのかと、明日香とリドリーに首を傾げたりすらした。真美にとって、もう姫子は友達のような間柄だと思っているから。

「……ねえ、姫子」

そつと、自分の中にいる幽霊を呼ぶ。もちろん周りに人がいないのを確認してからだ。本当は声を出さないで念じて呼べば済むものだけれど、つい声に出してしまう。

『なんだ?』

胸の奥のさわめき。姫子はすぐに返事を返してくれた。

「明日香の言うこと、あんまり気にしないでね……明日香は、凄く友達思いなだけだから……姫子のこと、ちょっと怖がっているだけだから……」

精一杯、姫子が傷つかないように気をつけながら、少ないボキャブ

ラリーから言葉を選ぶ。

だが、ため息とともに、姫子から返された言葉に、真美は再び絶句した。

『真美、お前は何か勘違いしていないか？』

「え……」

『残念ながら、あいつらの言葉と態度は全て正しい。むしろ改めなければならぬのは、真美、お前の方だ』

「……………」

『あの、明日香という小娘……あいつの言うことはもっともさ。私は決して良い幽霊じゃない。むしろ、悪い幽霊だ。あの小娘のように、警戒するのが当然なのさ』

「……………でも」

『でも、じゃない。真美、今の内に言っておこう。人を、他者を信じようとするお前のその考えは立派だ。人間として、誇ってもいい気高き精神だ。だが世界には、お前のような考えを持つものを利用するやつが、騙そうとするやつが掃いて捨てるほどいる。生きているやつも、死んでいるやつも、それは関係ない』

「……………」

『小娘の言つとおり、私は良い幽霊じゃない。だから、あまり私を信頼するな。私はその気になれば人間だって襲えるし、同じ幽霊だって襲う。そういう存在なんだ』

……それっきり、姫子は黙ってしまった。

真美はただ、姫子の言葉と、明日香の忠告を自分の中で反芻させ続けた。

ある日の日曜日

眠い。とてつもないくらい眠い。

昨日セットしておいた目覚ましを止めながら、真美はそう思った。平日なら早起きくらい問題ないのだが、それが祝日となると、どうも辛い。

こぼれる欠伸を手で隠しながら、いつものように着替えてリビングに入る。

いつものように父が脱ぎ散らかした衣服を片付けている真美の視界に、いつもとは違い、一枚の紙きれがテーブルに置かれていた。

……お父さんが書いたのかな？

そこに書かれた文字は書きなぐったように滅茶苦茶に乱れていて、お世辞にも上手いとは言えないものだ。けれども、今までに真美は何度か父の文字に目を通したことがあるので、なんとか解読することが出来た。

急な仕事が入ったので、今日の買い物は一緒に行けません。帰りは明日以降になりそうですので、しっかり戸締りして体調に気をつける。

PS・お金は余分に置くけど、無駄遣いしないように。夜更かしするなよ。

PS・最近、物騒な事件が増えているから、日が暮れる前に帰るように！

紙きれには、そう書かれていた。

「……ふう」

別段、悲しくはない。我俣を言って困らせるほど真美は子供ではないし、仕事よりも自分を優先して欲しいなどと言うつもりもない。ただ、少し寂しくは感じた。

そつと紙きれをテーブルに戻す。真美の仕事である家事を行うため、洗濯物を抱え込んで洗面所へ向かった。

カメラマンという父の職業上、というより社会人である以上、急な仕事が入ることは珍しいことではない。スタッフの一人が何らかの事情で休めば、当然別の人がフォローに回る。今回はたまたま父に当たっただけのこと。

それどころか、本来なら休日にも関わらずしっかり仕事へ向かう父に対して、真美は深い感謝と申し訳なさを感じているくらいだった。

「はいはい、分かっておりますよ〜だ」

ぽつりとこぼれた独り言。家には真美しかないなので、当然返事は返ってこないはずなのだが……。

『何が分かったの?』

「——っ!? ちょっと、いきなり声を出さないでよ、ビックリするじゃない」

『それはごめんなさいな……ところで、何が分かったのかしら?』

推定年齢300歳の怨霊である姫子の声が、真美の頭の中に反響する。

「何でもない。ただの独り言」

『そつ』

洗濯機の中に抱えていた物を放り込み、洗濯機付属の少し湿ったホースを壁一枚挟んだ風呂場へ伸ばし、バスタブの中にモーターが付いた先端をゆっくり入れる。

棚から洗剤を取り出し、分量を量っていると、またもや姫子が尋ねてきた。

『いつも思っていたのだけれど、真美が入れているそれってなに?』

それ、が何を指しているのか、最初真美は分からなかった。すぐにそれが今入れている洗剤のことを指していることに思い至った真美は、山盛りまで入れられた計量スプーンを軽く持ち上げた。

「これ?」

『それ』

一瞬、そんなことも知らないのかと思ってしまった。途端、胸の奥がざわめき、脳裏に囁くような笑い声が響いた。

『あら、知らないことは恥ではないわ』

それは違うような気がする。決して口に出さなかったが、反射的に反論した。けれども同じ体にいるからなのだろう。姫子には筒抜けだったらしく、また囁くような笑い声が響いた。

洗剤を流し入れて、洗濯機の蓋を閉じる。二つ、三つ、ボタンを押して、静かに洗濯機が動き出した。

「何がおかしいのよ」

『うふふ、ごめんなさい……ただ、真美の今の考えが面白かったから』

「何が面白いのよ」

『そう怒らないで……ねえ、知らないって、そんなに悪いことだと思う？』

……何を言っているのか、真美には分からなかった。

知らないことが悪いこと？ そんなの悪いに決まっている。

だが、いざ尋ねられると、果たしてそれが正しいと言えるのか確証が持てなかった。

「……姫子はどう思っているのよ」

『質問を質問で返すのはよくないわ』

「はぐらかさないで！」

思わず怒鳴ってしまった。慌てて両手で口を塞ぐが、すぐに父が今家にいないことを思い出し、そっとため息を吐いた。

「……で、結局姫子の答えはなんなの？」

『ところで、物騒な事件って何のこと？』

「聞きなさいよ！！ ていうか今さっきの質問も無かったことにするな！」

今度は力いっぱい怒鳴った。

返答は、楽しくてしょうがないと言わんばかりの軽やかな笑い声

だった。

『連続絞殺事件？』

「そ、今全国の警察とマスコミが探し回っている話題沸騰中の殺人犯。お父さんが言っていたのは、たぶんそのことだと思うよ」

道路の端を歩く真美の横を、何台もの車が走り抜けていく。うっすらと臭う排気ガスが、少し鬱陶しい。

晴れ渡った青空に目を細めつつ、真美は姫子に説明した。

「今までに確認されている事件は100以上。全て絞殺している手口から、全部同一人物の犯行だろうっていうテレビで言ってた」

『ふ〜ん……ねえ、なんで全部同じ人間だと分かったの？』

ざわりと、真美の胸の奥の何かがざわめいた。真美の体の中にいる姫子は何かを考え始めたとき、いつも感じる感覚だ。

きつと、姫子が思考を働かせたときや感情が高ぶったときのことではないかと、真美は思っている。

「ああ、それはね、なんか被害者の首に付いていた痕がみんな同じサイズみたいなの。だから、同一人物ではないかって……」

目の前の横断歩道を渡るうとしたら、歩行者用信号機が点滅を始めた。それほど急いでいるわけではないので、立ち止まって待つ。

……数秒後、信号機が赤色に変わると同時に、並んで待っていた車たちが一斉に走り出した。次から次へと真美の目の前を通り過ぎてどこかへ向かっていく。

『おい、真美』

「なによ」

また口調が変わっている。これもたぶん、気分によって変えているのだろうか。

『あそこ見てみる……ほら、横断歩道の中央だ』

「中央って………あ」

思わず声が出た。

何気なく、本当に何気なく横断歩道の中央を見ると、そこには子供が佇んでいた。

真美の胸ほどしかない小さな身長に小さな手足。おそらく、真美よりも2〜3歳低いであることが伺える。

その子供のすぐ傍を、車が走り抜ける。もちろん一台だけではなく、次から次へと何台も何台も子供の眼前を、真後ろを、まるで子供など眼中にないかのように走り抜けて行った。

子供は俯いてその場から動くことも逃げることも出来ず、その場に立っていた。

きゅう、と心臓が縮んだかと思った。耳の後ろから汗が一気に噴出し、気づくと真美は駆け出していた。

「危ない！」

片足が横断歩道に踏み入ろうと伸ばされ。

『待て！ あれは罠だ！』

「——っ!？」

たところで、ぎりぎり踏みとどまった。

「うわ、うわあ！」

慣性が真美の体を車の流れへ引っ張る。必死に手をバタつかせて前への動きを止めると、眼前数センチ先を車のサイドミラーが通り過ぎていった。

腹筋に力を入れすぎて痛みを感じる。そのまま後ろに倒れこんだ後になって初めて、自分がびっしょり汗を掻いていることに気づいた。

「はあああああ……」

今まで感じたことがないくらい激しく心臓が鼓動している。今頃になって震えが走る双肩を押さえながら、そつと顔を上げた。

「……あ……いない」

さっきまで子供がいた場所には、何もなかった。右に左に視線をやっても、子供の後姿すら見つけることが出来なかった。

あれは、いったい……。

『いきなり飛び出すやつがあるか……あれは俗に言う、幽霊ってやつだな』

答えたのは、姫子だった。

「幽霊？」

いつの間にか車の流れが止まり、歩行者用信号が青に変わった。訝しげに真美の横を通り過ぎていく人達。中には存在しないかのようには無視して行く者もいた。

その中で真美は、呆然と今しがたあった光景を反芻していた。

『そう、幽霊。それも悪霊ってやつだろうな……良かったな、私がいて。でなけりや、今頃『くるま』に跳ね飛ばされて転がっていたところだぞ』

「……え、でも、どうして……」幽霊が見えちゃったの』って、ちよっと」

立ち上がって、ズボンに付いた砂を払う。若干足腰が頼りなくなっているが、歩く分には問題ない。ポケットに入れた財布が無くなっていないのも確認する。

また、信号が赤に変わって車の群れが動き出す。一息入れるにはちょうどいい。

『何を寝ぼけたことを言っているのやら……今のあなたは私と同じだっていうことをもう忘れたのかしら？』

悲しいかな、反論できない。

『私は真美、真美は私。私に出来ることが、あなたに出来ないわけがない。私の霊視能力の力をそのままお前が使ったのさ……ただ、少し問題点が見付かったがな』

「……問題点ってなによ？」

『分からんか？』

「分かっていたら聞かないわよ」

『それもそうだな……まあ、とりあえず見つけた問題点は二つだ。一つ既に解決したから、問題はもう一つの方だな』

もったいぶった姫子の言い方に、真美は少し眉間に皺を寄せた。

車の流れが止まり、歩行者信号が青に変わる。恐る恐る片足を置いて、何もなことを確認してからそつと渡り始めた。

「……で？」

「一つは、まあ幽霊と生物を見分けられないということだ。だが、これ自体はもう解決したから、この際置いておけ」

「……はあ？」

「今まで出来なかったことが、ある日突然できる様になる。そんな経験に身に覚えはないか？」

「ある」

聞かれて、即答した。確かにある。

それまで全く乗れなかった自転車、次の日突然乗りこなせるようになったこと。同じく突然出来るようになった逆上がり。数えたら、もつとあるかもしれない。

もちろん、出来るようになるまで一生懸命練習はしていたが。

「それと同じだ……見えなかったモノが突然見えるようになった。言葉にすればそれだけだ。出来るようになったことは、体がやり方を覚えているのさ」

「……そういうもののなの？」

「そういうものだよ」

横断歩道を渡り終えて、そつと振り返る。急ぎ足で渡ろうとする人、諦めて次を待つ人、のんびり渡っている人、様々だ。

そして横断歩道の中央に、あの子供が俯いて立っていた。

「……………」

背筋に、怖気に似た震えが走る。

あれが、幽霊。あれが、悪霊。

「気をつける」

姫子がそつと真美の中で囁く。一つ、頷いて答えた。

行かなきゃ。足早にそこから離れる。もう、真美は振り返ろうとは思わなかった。

「それでいい……一つ、覚えておけ。見た目がどんなにか弱く儂い

姿をしていても、絶対に心を許すな。それがやつらの手口だ。それがやつらだ」

「……あんたはどうなのよ？」

『私はそんな回りくどいことはしない。正面から行くだけだ』

「……ああ、なんか納得」

早く足治ないかな。頼りない両足に気を使いながら、真美はそんなことを考えていた。

真美が住む街は、平均的なレベルの都会というやつだ。コンビニは当たり前のように何件も見付かるし、全国展開しているチェーン店はたいてい街のどこかにある。各街特有の名産品もあるし、地元の人しか知らないスポットもある。

その街の中でも特に有名なのが、老舗デパート『YAMATO』。昔は大和という名前で日用雑貨品だけを販売していたのだが、数年前の改装を機に改名し食品からアウトドア用品まで、何でも揃う、総合販売店となった。

そこへ、真美（の中）にいる姫子も）が到着したのは正午過ぎの頃だった。

中に入ると適温に合わせられた空調が効いていて、心地よい。最近、少し蒸し暑くなってきたいるせいかもしれない。

そう思うと、夏の到来を予感させる。本格的に暑くなるのは一月以上先の話なのだけど、少し、真美は嬉しかった。

「さてと、服はどこで売っていたっけ？」

入り口そばの案内板を見る。場所は……三階だ。

『なんだ、服を買いに着たの？』

「あれ、言ってなかったっけ？」

『聞いていないわ』

エスカレーターに乗って、上階へ向かう。エレベーターはたいがい混んでいるので、そっちは諦める。

『あゝあ、期待して損したわ……ところで、床が動いているようだけど、あなた何かした？』

「床って……ああ、エスカレーターのこと？」

『えすかれーたー？ たぶん、それかな』

はてさてどうしよう。真美は思った。

エスカレーターについて説明するにも、真美自身にエスカレーターに関する知識は無い。というより、エスカレーターの原理を知っていたとしても、はたして姫子が理解できるのかどうか……。

一緒になってからそれなりの時間が経った。それで気づいたことがいくつかある。

『ねえ、そのえすかれーたーってなによ？』

一つは姫子が、かなり強い好奇心を持っているということだ。見るもの触れるもの全てが珍しいらしく、ことあるごとにこれは何、あれは何、と聞いてくる。

はつきり言って鬱陶しいが、知ろうと思っている姫子を見無視するのは心が痛む。自分で理解している知識程度ぐらい、話してやりたいと思っているのだ。まあ、今の質問には答えられないが。

「うゝん、私にもよく分かんない」

とりあえず、こう答えることにした。

『むづ……そうか。それと、今日は何を食べるのか？』

胸の奥で、ざわめきが広がる。真美はそっと、胸を押さえた。

二つ目は、姫子の食に対する関心。

「今日はハンバーガー。夜は、ほうれん草のお浸しと野菜炒めと魚と汁物」

『そうか！ 汁物はもちろん、アレか！？』

「アレよ。五月蠅いからちよっと静かにして」

姫子の笑い声が小さくなって、消える。真美はふう、とため息をこぼした。

真美と姫子は、鈍くはあるが感覚が繋がっている。そのことに気づいたのは、一緒になって初めてお風呂に入ったときだった。

バスタブに溜まった湯に足を入れた瞬間、姫子が悲鳴をあげたのだ。

「うおおちいいい——！！と。」

まるで男のような悲鳴をあげたせいで真美も驚き、転んで頭に瘤を作ったのは嫌な思い出た。

そのほかにも味覚も繋がっていて、焼き魚を食べたときはあまりの五月蠅さに耳鳴りが収まらなかつたくらいで、もっとも五月蠅かつたのは、大根と豆腐の味噌汁を飲んだとき。

三階に來ると、客層も変わっていた。といっても、女性向けの衣服が置かれている場所に、男性が大勢いたらそれはそれで怖いのだけど。

天井に吊り下げられた案内板を見て、目的の場所へ向かう。たまにしかここに来ないので、どこに何があるか全く覚えていなかった。

「ところでさ、姫子」

『ん、なんだ？』

「あんたって、どうして味噌汁飲んだくらいであんなに騒ぐの？」

……少しの間、沈黙が流れた。

『……お前の言う、味噌汁ぐらいとはどういう意味だ？』

帰ってきた答えは、質問だった。

「え、そりゃあ、味噌汁ぐらいなら毎日飲んでるし、インスタントもいっぱい種類があるし……」

ふう、と姫子がため息を吐いたような気がした。

『真美、お前の言うその味噌汁は、私の世界には無かった。もっとはつきり言えば、味噌汁というものが存在することすら知らなかった』

怨霊になってから初めてというのも、皮肉ではあるがな。

そう続く言葉を、姫子は己の胸のうちに留めた。

「え……でも……」

『味噌汁ぐらい、か？』

「う、うん」

真美の世界は、インスタント食品が当たり前のようであり、お腹が空けばいつでも腹を満たすことが出来る。肉も、魚も、野菜も、果物も、菓子も、金さえ払えば手に入る。そういう世界を生きてきたのだ。

外国ならまだしも、日本で味噌汁を飲んだことが無いという事実が、真美には想像もつかなかった。

『真美、お前は本当に運が良い』

「……………」

服売り場に到着する。良さそうな服を探すが、意識は姫子の言葉に集中していた。

『朝起きて山菜を取りに行かなくても、畑仕事をしなくても、猪を狩らなくても、好きなときに飯が食える。それを当たり前だと思える世界に生まれて、真美は幸運だと思わない？』

「……姫子が生きていた……三〇〇年前はどうだったの？」

ふと、姫子の生きていた世界が気になった。

リドリーや明日香に話してはいないが、真美は姫子からだいたい
の経緯は聞いている。

元は普通の女の子だったということも、邪神になった経緯も、それからの日々も、色々教えてもらった。

ただ、姫子が人間だったときの話は、まだ聞いていない。姫子が話さなかったから。

でも、姫子にだって当然両親がいたはずだ。寂しくないのだろうか。突然邪神となって離れ離れになって、三〇〇年間一人で過ごすことになった姫子は、どう思っているのだろうか。

『……どうもこうも、貧しかったけど、楽しくはあった。ただ、それだけ』

寂しい言葉だった。少なくとも、真美にはそう感じた。

「そんなの……」

『真美、私にそんな感情はない』

その想いが伝わったのだろう。姫子は真美の感情を一笑した。

『私は邪神さ。あらゆる存在を貪り、あらゆる存在を超越する魔物。それが私だ。親愛や、情愛なんて感情は私には無い』

「……でも」

『真美』

言い聞かせるわけでもなく、怒っているわけでもない。

姫子の放った一言、ただそれだけだが、真美を納得させるには十分だった。

「……うん、姫子はそういうモノなんだよね」

『そういうモノなんだよ、私は』

姫子はそういうモノなのだ。元が人間でも、元が女の子でも、元が不本意な事情だったとしても、関係ない。

姫子は生者を食らい、亡者を食らう、邪神という存在でしかないのだ。今は真美の体に収まっていたとしても、邪神なのだ。

でも、真美はそれだけではないと思っている。真美の知る姫子は、世間知らずで好奇心旺盛で口調が可笑しい、変な幽霊なのだから……。

そつと、冷たい胸を押さえる。

「……………」

でも、だったら、どうして庇ったりしたのだろう？

言葉にできない何か、胸の奥で渦巻いていた。

ある日の日曜日（後書き）

更新が遅くなって申し訳ありません。

途中で投げ出すつもりはないので、まだ続きを見たい方は気長にお待ちください。

いざ、戦いへ（前書き）

（霊に関する）独自解釈があります。そういったことが嫌な方は、ブラウザの戻るボタンで戻ってください。

いざ、戦いへ

買ったばかりの服を見て、真美はため息をついた。

ずつと欲しかった亜麻色のシャツの胸元を、そつと指でなぞる。良い生地が使われているおかげで、とても肌触りの良い感触が伝わってきた。そのまま大きく『MOST』とプリントされた文字をなぞってから、またため息をこぼした。

時刻はもう22時を回っている。夕食を済ませ、一通りの家事を終えて風呂に入り、後は寝るだけだ。いつもならテレビを見るなり宿題をするなり何かをしているところだが、どうも何かをしたい気分ではなかった。

服を抱きしめたまま、仰向けになる。体を預けたベッドのスプリングが軋む。両手を伸ばして蛍光灯の光に透かして見た後、ベッドから足を下ろした。

『何を悩んでいるのかしら?』

頭の中で声が響く。真美はクローゼットを開けながら苦笑した。

『悩んでいるというもんじゃないよ』

『答えが見付からない問題は、悩みと同じことよ。何を悩んでいるか教えなさいな、暇なんだし』

買ったばかりの服をハンガーに掛ける。

『……あんた、二言目にはそれね』

真美は呆れ混じりにクローゼットを閉めた。

『どういたしまして』

『褒めてない……ねえ、聞いてもいい?』

せつかなのだ。見えないモノに関しては専売特許だ。なにせ、姫子自身が見えないモノなのだから、真美よりはるかに知識があるだろう。

『あのね、今日の昼頃の事、覚えている?』

『あゝ、あの回りくどい餓鬼か。それがどうかしたのか?』

途端に姫子の声にやる気がなくなった。胸の奥から面倒くさいという感情がこれでもかと伝わってきた。

自分から聞いておいて……！

思わず怒鳴りそうになったが、真美は頭を振って湧き上がった怒りを振り払った。怒鳴ったところで相手は推定三〇〇歳のお婆ちゃん。悪口では絶対に勝てないし、力では話にすらならない。

それでも、頬が引きつるのは抑えられなかったのだが。

「そう、その子供のことなんだけど……あの子って悪霊ってやつなんだよね？」

『それがどうかした？ それより私はテレビが見たいのだけど』

「あんたから聞いてきたんでしょ！」

結局、我慢できなかった。

『回りくどい話は嫌いだ。さっさと言いたいことを話せ、聞いてやるぞ』

「……なんかもう、何から怒ればいいか分からなくなってきたわ」

『それはなによりだ。で、話とは何だ？』

もう一度頭を振って、怒りを振り払う。ベッドに飛び込んで枕に顔を埋める。枕の柔らかさに少しだけ怒りが吸い込まれたような気がした。

しばらくそうやって静かに時を過ごす。姫子も、それ以上意地悪を言うつもりはなかった。

……ふと、真美は埋めていた枕から顔を上げた。

「……あの子供って、今までにも同じ事をしたのかな？」

『しているだろうな。手口が手馴れているし、失敗した後すぐに姿を消したあたり、知恵も働くようだ』

胸に痛みが走ったような気がした。きつと、一瞬だけ心が悲鳴をあげたのかもしれない。自然と指に力が入り、握り締めたシーツにいくつもの皺が出来た。

薄々予感はしていた。そんな気がするんじゃないかと考えていた。でも、あくまで推測だ。その推測を改めて肯定されると、辛い。

感覚が繋がっている姫子にも、その痛みは伝わっていた。だから、真美の言葉を待った。

「……………それで死んじゃったらどうなるの？」

「場合にもよるが、十中八、九はあの餓鬼に魂を喰われるだろうな。人間に限った話ではないが、魂は肉体が死んで剥き出しになったときが一番狙われやすいからな」

「……………」

「強い未練が無い限り、魂はすぐに成仏してしまう。あの餓鬼は、それが分かっているあの場所で罨を張っていたのだろう」

あれ？ 真美は首をかしげた。

あの場所で罨を張っていたのなら、どうして真美だけが引かなかったのだろう。真美のすぐ傍には人が大勢いたし、真美より先に信号が変わるのを待っていた人もいたのだ。

「どうして私が引かなかったのかな？」

「お前がお人よしだからだ」

身も蓋もなかった。

「あの餓鬼を見た瞬間、助けなければと考えただろ」

「そりゃあ、考えるよ」

「それがお人よしなんだよ。あれはな、お前みたいなお人よしの心を揺さぶって誘うんだよ。あの餓鬼を“助けなければならぬ”って思わせるのさ」

「——っ!？」

「後は簡単、のこのこ飛び出した馬鹿を『くるま』が跳ね飛ばしてくれる。そのとき、ちよいちよいと手助けすれば、そのまま即死だ。そして剥き出しになった新鮮な魂を頂く。なるほど、回りくどいが確実に魂を食える餓鬼の考えそうなことだ」

「……………」

何かを言おうとして、でも言葉にできない。そんなもどかしさが真美の胸のうちを渦巻いていた。

そんなはずない、とは言えなかった。あんなに小さくて、か弱そ

うなのに、人を襲うような凶悪な存在なのだと姫子は言う。

けれども、真美にはそう思えなかった。ふわりと、あの子供の姿を鮮明に思い出す。

着ている物も、履いているズボンも、靴も、髪型も、どこを取ってもどこにでもいる普通の子供の姿だった。

一人俯いて、一人寂しくあの場所に佇んでいた小さな子供が悪霊だと姫子は言った。

否定したいけど、きっと、姫子が正しいのだろう。真美は思った。姫子を身に宿しているといっても、知識や素質は素人と同じではない。その自分が、見えないモノである姫子の言葉を否定できるほど馬鹿でも話が分からないわけでもない。

まだ12歳の真美でも、それは分かっていた。

「ねえ、姫子」

『なんだ？』

「……あの子供って、これからもずっと人を襲い続けるのかな？」

『襲うだろうな』

「絶対？」

『絶対』

「ほんとに本当？」

『ほんとに本当』

「ほんとにほんとに本当？」

『しつこいぞ』

「ごめん」

ふう、と枕にため息をこぼした。その中には疲労だとか悩みだとかがいっぱい入っていたに違いない。人肌程度に温くなった枕に、顔をぐりぐりと押し込んだ。ほんのり湿った感触は、今さっきの吐息のせい。

このまま眠るには、どうも出来そうにない。

『それで？』

「……え？」

掛けられた続きを促す言葉に、真美は顔をあげた。

『言わなかったか？ 私は悩みを聞くと聞いたのだぞ。質問には答えたが、お前の悩みは聞いていない。さっきから何を悩んでいるんだ？』

思わず、息を呑んだ。言い出すことが出来ず、遠まわしにあれこれ質問を続けたが、いざ話そうと思うと、喉から出てこなかったのだ。

それに、もしかしたら姫子が気を悪くしてしまうかもしれない。そう想像すると、どうしても口に出せなかった。

胸の奥で、波紋が生まれた。

『いちいち私に対して遠慮することはない。罵倒されて怒るほど若くはないし、初潮も迎えていないお嬢様に説教されても可笑しいだけだ』

だが、相手が悪かった。真美の二〇倍以上は長く生きている姫子相手に、下手な隠し事など無意味なのかもしれない。

……ただ、悩みを話す前に気になる部分があったのには、少し気になるが。

「ちよつと待ちなさい。なんであんだ、そんなこと知っているのよ？」

『お前の中にいる私が、お前のことで知らないわけがないだろうが。安心しろ、あと数百日もすれば迎えが来る。それまで気楽に待っていればいい』

姫子の言葉に、真美は呆気にとられた。同時に、自分が今悩んでいることがとてくだらないものに思えてきた。

「……なんかあんだに遠慮することが馬鹿らしく思えてきちゃった」
『そいつは重畳。自分の半分も生きていない餓鬼に遠慮される方が屈辱だ』

はあ、アホらしい。

真美は軽く頭を掻き毟ったあと、ねえ、と言葉を続けた。

「私に会う前、姫子は人を襲ったりしていたの？」

『ああ、していた』

うすうす分かっていったことだから、言葉が詰まることはない。

「それは生きるため……っていうのも変だけど、生きるために？」

『もちろん、生きるためだ……といっても、既に死んでいるがね』

「遊び半分で誰かを傷つけたりとかしたことないよね？」

『ないね。挑んでくるやつ、私の領域に踏み込むやつは容赦なく引き裂いてやるが、私は他人の命を奪うことに喜びを見出したことはない』

「どうして傷つけようとは思わないの？ 姫子なら気に食わないやつだつて勝てるでしょ？」

『真美、私は邪神であり怨霊でもあるが、気に入らないから殺そうと思うような馬鹿でも畜生でもない。遊び半分で殺し合うくらいなら、星でも眺めている方がずっと有意義だ』

「戦いが好きなわけじゃないんだよね？」

『戦いが好きなやつは自分の力を誇示したい三流の馬鹿だけだ。私みたいな超一流は黙って嘲笑するか、力の差を見せ付けて後悔させるだけだよ』

「……だつたら」

「ごくりと、喉が鳴った。緊張で乾いた喉に唾が流れ落ちていくが、すぐに喉は新たな水分を求めて抗議してくる。真美はもう一度唾を飲み込もうとしたけど、乾いた口内にあらたな唾液は分泌されていなかった。」

さあ、話そう。

「……あの子供の幽霊、姫子が倒さないとけないよね」

ここが正念場だ。

『……は？』

初めて、姫子の呆気に取りられた声を聞いたような気がする。思えば、真美の聞いてきた姫子の言葉は常に自信に満ち溢れ、間違ったことを言っていないという言外の威圧感があった。

今しかない。今ここで姫子を説得できなければ、もう永遠に説得

できるチャンスはないかもしれない。

「だって、あんな幽霊がいたら、また私が危険な目に合うかもしれないじゃない。だったら、次も襲われないように先に倒しちゃえばいいと思うの」

次に襲われるのは、知らない誰か。顔も、声も、性別も、何も知らない誰かが襲われるだろう。

その悲劇を食い止めるためには、今日のうちにあの子供を……悪霊を倒すしかない。今まで繰り返されていたであろう悲劇の連鎖を食い止めるためには。

「また、誰かが襲われる」

真美の想いが、姫子へ伝わる。同じ体を共有し、感覚が繋がっているおかげで、言葉よりも姫子の心に直接届いてくれる。

「……で？」

……だが、姫子は一笑した。

『その誰かも分からない人間のために、どうして私がああな餓鬼を倒さないといけないんだ。そういうくだらない助け合いはお前たち人間同士でやれ』

真っ向から拒否されたけど、断られた悲しみはない。それどころか、姫子らしい断り方だと思った。倒せる力がありながら、何とか出来る力がありながら、姫子は真っ向から人間のために使うつもりはないと言い切ったのだ。

邪神である姫子は、何かを助けようなどとは考えない。か弱い体を使って誰かを守ろうとする人間に対しては一目置いているとはいえ、自信が行うとなると話は別。

犠牲者が出ると分かっているうえで、解決するつもりなど全く無い。そう話す姫子の言動の影に、真美が知らない、邪神としての姫子の陰が見えたような気がした。

けれども、真美は畳み掛ける、会話が途切れたら、おそらくもう話を聞いてはくれないだろう。姫子は自身のことは守ってはくれるが、それはあくまで自分のため、真美のためでは決してない。真美

が傷つけば、その分だけ姫子が傷つくから反対しているだけなのだ。姫子のことを信じたいと思う真美にとっては、辛いことだが受け入れるしかない。

「だって危ないでしょ。今後も襲われないとは限らないし」

『あの手のやつは、適当な場所を選んで罾を張る。そのうちどこかへ行くさ』

「まだ買いたい物が残っているから」

『違う道を選べばいい。』

「それだとわざわざ遠回りすることになっちゃうよ。次に行くとしたらお父さんとだし、変に思われちゃう」

『一緒に歩きたいとでも言えればいい。娘が嫌いな父親など、そういるはずもない』

「で、でも、他の人達が襲われるんだよ？」

『だから？ 私にはどうでもいいことだ』

「万が一襲ってくることで……」

『小物は危険を冒さないようにすることだけは長けているから、襲ってくることは万に一つもない』

「……でも」

ふう、と姫子のため息が聞こえた。

『御託は並べ終わったか？ ならばもう私は寝るぞ。今日は無駄話で疲れた』

口では勝てない。改めて真美は事実を思い知った。まさに暖簾に腕押しというやつだ。

胸の奥の何かが、少しずつ成りを潜め始めていくのが分かる。このままでは、姫子は本当に眠ってしまう。姫子が眠ってしまえば、悪霊を倒す術がなくなる。

一瞬、明日香のことが頭を過ぎった。明日香なら、真美よりも悪霊への対処を心得ているし、実際に退治する力もあるだろう。

それは許されない。それだけは駄目だ。だって、それでは関係ない明日香を巻き込んでしまう。

真美は必死に頭を回転させた。

どうにかして、姫子を説得しなければならぬ。

真美自身、別に正義感から悪霊を倒したいわけではない……少し、正義感に似たような感情はあるけど、正義感ではない。

事情を知ってしまったから。

あの場所で誰かが狙われると分かってしまったから。

事情を知ったうえで無視することができないから。

無かったことに出来ないから。

ある種の義務感に似た焦燥感が、真美の心を突き動かすのだ。

そしてその心が、道を開いた。

『全く、私はこれでも邪神だぞ。あんな小物なんぞにかまっていられるか』

そう言い残して眠ろうとする姫子の言葉を切欠に、真美の頭は一気に冴え渡った。絡まった糸を解せたような爽快感が背筋を走る……

……これしかない！

一度、大きく深呼吸した。

「……姫子って、悪霊の中ではどれくらいなの？　なんだっけ……そうそうカテゴリー。カテゴリーで計ったら、ランクはどれくらいになるの？」

『私の力が計れるものか』

『答えて』

『むう……そうだな、一番強いらんくは何だ？』

「Aランクだよ。姫子はAランクなの？」

『そう、そうだ、私はえーらんくというやつ……いや、唯のえーらんくでは物足りない。私はえーえーえーらんくというやつだろう』

「ということは、幽霊の中でも一流の一流、超一流ってやつなんだよね？」

一瞬、姫子の返事が送れた。

『……何か含みがある言い方だな。何が言いたい？』

きた！　真美は歓声をあげそうになって、慌てて唾を飲み込んだ。

「超一流ってさあ、売られた喧嘩は鼻で笑つか力の差を見せ付けるもんなんだよね？」

『……それがどうした』

だってさあ、それだったら……。

「姫子はその餓鬼に馬鹿にされたってことだよな」

『……ほう、面白い。理由を話してみろ』

興奮で、鼻息が荒くなるのを誤魔化せているだろうか、真美は心配になった。

「言ったよね、私と姫子は同じだって」

『だから？』

「あの悪霊に襲われて逃げる事が出来たとき、悪霊は私のこと見向きもしなかった。ということはだよ、ということは、私の中にいる姫子も無視したってことだよな」

『——っ！？』

真美の中で波紋が広がり、胸の奥がざわめいた。

「美味しそうな獲物が罾から逃げたら悔しいと思う。でも悪霊は、振り返らなかった。私のことなんて、姫子のことなんて、取るに足らない獲物としか思ってもらえなかったってことじゃない？」

『………』

「それって悔しくない？ 最強最悪の邪神が、たかだか餓鬼の悪霊から、取り逃がしたどうでもいい獲物としか見られなかった……それって屈辱だと思わない？」

さっきから返事が返ってこない。けれども分かる。姫子は考え始めている。あと、もう一押しすれば……いい！

「下手したら、明日にでもどこかへ行っちゃうかもしれないよ。そうしたら、嘲笑することも出来ない。大変だね、力も見せられないから、馬鹿にされておしまいだね」

『………』

返事は、まだ返ってこない。あとは待つだけ。

真美はベッドから降りて、クローゼットの中から服を取り出した。

他にも靴下、財布、家の鍵、あと護身用のバットを取り出す。

手早くパジャマを脱ぎ捨てて着替えていると、意外と早く返事が帰ってきた。

『真美』

「なに？」

『ちよつと散歩に行きたい。出かける用意をしろ』
服に袖を通す。

「うん、私も行きたいと思ってた。行き先は今日の昼間行ったデパートでいいかな？」

動きやすいように、きつちりと肌に張り付くタイプのジーンズを履く。

『…………ふん、好きにしろ。口だけは達者なやつめ』
靴下を履いて、荷物をポケットに入れる。

「あれ、今頃気づいた？」

バットを持って、準備完了。

「今時の小学生は口だけは達者なんだよ。特に女の子はね」

『…………むう、覚えておけよ』

愚痴をこぼす姫子を尻目に、真美は自室のドアを開けた。

戸締りをしっかりしてから、家を出る。父は明日まで帰ってこないで、咎められることもない。ただ、近所の誰かに姿を見られたら後々厄介なことになりそうなので、静かに歩いた。

心地よい夜風が頬を撫でていく。どうでもいいことだけど、不思議と嬉しい。

あれは何だろうか？ あそこにあるのは？ そこにあるものは？ 黒い物体だと思っていたものに近づくと、それはただのバケツ。人かと思って近づいたら、それはただの電柱。地面に何かあると思ったら、ただの白線。

見るもの全てが珍しかった。あんなに見慣れた物だったのに、ま

るで別の物に変わってしまったみたいで、昼と夜の世界が垣間見えたような気がした。

胸が騒ぐ。冷たい胸の奥で動くのを止めた鼓動が、また動き始めたような錯覚を覚える。不思議な高揚感が、真美の背筋を走る。ほう、と熱いため息をこぼした。

……とても静かだ。所々にある電灯と昼間のような人通りがないと、ここまで雰囲気が変わるものなのだろうか。

「……そういえば」

こんな夜遅くに外を出たのは、生まれて初めてだ。いままでどんなに夜遅くでも、19時には家に帰って外に出ようとはしなかったというより、父がさせなかった。

『そうそう、言い忘れていたことがある』

突然掛けられた声に、ひゅ、と掠れた悲鳴をあげた。慌てて口元を手で押さえてから、真美は眉をしかめた。

「……ちよつと」

『油断しているお前が悪い。これから行くところでは、そんな油断を見せるなよ。戦うのはお前なんだからな』

「……え？」

何を言われたのか真美は分からなかった。目を瞬かせて、呆けた表情を見せた。

胸の奥で波紋が広がった。伝わってきた感情は、呆れ。

『え、じゃない。お前がやつと戦うんだよ』

「え、え、な、なんで、姫子が！……やるんじゃないの？」

驚きに自然と声が大きくなり、慌てて声を潜めた。

『いつ、私が戦うと言った？』

「で、でも、力を見せ付けるんでしょ！？　だったら姫子がやらな
いと……」

また、波紋が広がった。

『それが出来たら苦労はしないさ。私が力を出せるとしたら、それは真美、お前が瀕死の重傷を負ったときぐらいだ……今の私は、お

前が私に身体を明け渡さないとともに力も出せない状態なんだよ」

「……だったら、私が明け渡せば……」

『それが出来たら苦労はしないと言っただろ……仕方ない、順序良く説明してやるから、歩きながら聞け』

そう言われたら、黙って聞くしかない。真美は自身の無知さに羞恥を覚えた。

『生者は全て『一つの身体に一つの魂』を持っている。これは想像が出来るな?』

「う、うん、なんとなく」

『よろしい。ならば真美、今の私達の状態がどうなっているか分かるか? 一つの肉体に?』

「……ふ、二つの魂?」

『そうだ。一つの身体に一つの魂が大原則なのに、私達は一つの身体に二つの魂が内装されている。言い換えれば、一つの肉体を動かすのに一つの魂が必要だが、私という余分な魂が入った状態、それがお前の今の状態だ』

「え、え……と……」

真美は頭を抱えた。想像しにくいことを説明されるのは苦手なのだ。

『……つまり、お前という『くるま』を動かしているのが、『魂』だ。動かす『魂』がいなければ、『くるま』は動かない、そういうことだ』

「あ、あゝ、なる……ほど」

『さつき身体を明け渡すと言ったな。あれはつまり、私が肉体を動かすためには、運転しているお前が、私に運転を代わらなければならない。だが、身体を明け渡すのは容易なことではない。周到な準備をした後でも危険が伴う。下手すれば、明け渡した途端、二人の魂が傷を負いかねない』

今のままでは姫子が力を出せないということだけは、なんとなく理解できた。

「……でも、私には霊と戦う力はないよ」

『それは分かっている。だから、私が『くるま』になるんだ』

「え？」

『真美、これから話すことをよく聞け』

声に、真剣な想いが籠る。その想いは波紋となつて真美の心に伝わってきた。

ごくりと、緊張でカラカラに乾いた喉に唾を流し込んだ。

『これから起こることを、受け止める覚悟を今すぐ決める。出なければ、今すぐ引き返せ……このまま行けば、殺されるぞ』
死。

改めて言われた死という言葉に、真美は声が出なかった。足腰が頼りなく震えて、力が抜ける。次から次へと汗が噴出していき、着ている服を湿らせていく。

殺される。

姫子から言われて、初めて真美はこれから行おうとすることの危険さに思い至った。

そうだ、危険なんだ。今まで何人もの人間を殺してきたやつを倒そうとしているんだ。そんな危険なやつと……戦おうとしているんだ。

考えると、視線が定まらなくなる。無意識に歯を鳴らして、背筋に寒気が走った。

このとき初めて、真美は死を肌身を感じた。一枚膜を通して触れていた死ぬことへの恐怖が、真美の心に直接ぶつかってきた。

……でも、真美は逃げようとは思わなかった。なぜならば……。

「うん、分かった。覚悟を決める」

『……ほう、ずいぶん早いな。今すぐ帰って何もかも見なかったことにも出来るんだぞ。所詮は赤の他人、死んだところで誰もお前を非難することはない』

「……でも、逃げないよ」

そう、逃げない。その真美の覚悟に、疑問を感じる姫子の感情が

真美へと伝わってくる。

『なぜ？ どうして他人のためにそこまで出来る？』

なぜ、と聞かれても、上手く答えられる自信は無い。真美自身、これだ、という明確な答えを持っているわけではないのだ。

ただ、真美は自分が強いとは思っていない。強いわけがない。

「自分でも分かんない。でも今逃げたらきつと後悔する」

『……………』

「…………今逃げ出して後悔したことを、ずっと抱えて平気な顔が出来るほど、私は強くないから。だから、逃げたくない」

今日のことは全部忘れて、明日から何事も無かったかのように振舞う。そんなこと、真美には出来ない。絶対、心のどこかに今日の日のことを覚えていて、明日からずっと心の重りとして残り続けるだろう。

それを笑って無かったことにできるほど、真美は器用でもないし、強くもなかった。

『…………そうか。それでは、話を続けるぞ』

少しだけ、姫子は己を恥じた。三〇〇年の月日の中で初めて、誰かに頭を下げる思いに駆られた。

けれども、それを口に出すことはなく、実行に移す気も無い。それは、姫子のプライドが許さなかった。

「うん、お願い」

『まず…………』

戦いの時まで、あとわずか。

いざ、戦いへ（後書き）

次回はグロテスク描写（残虐、流血）が多くなります。

死闘（前書き）

グロテスクな描写や流血（血など）表現、暴力的な表現があります。
また、人によって気分が悪くなったりする場合もあります。
そういったことが苦手な方は、ブラウザの戻るボタンを押してお戻りください。

死闘

そこは昼間以上に騒がしい場所になっていた。

真美が件の場所に到着したとき、最初に視界に飛び込んできたのは、大勢の人の流れと走り去っていく何台もの車、それと赤に青に黄色に緑、七色に輝くいくつものネオンの光だった。

赤ら顔でお互いを支えあっている中年の男たち。

普段の姿が想像できないくらい濃い化粧と派手な服を身にまとった女性たち。

笑顔を浮かべて次から次へと女性に話しかけ続ける男、それに気を良くした女が、男の手に引かれてどこかへ向かっていく。どこへ行くのだろうか。

酔っているのか、周囲に響き渡るくらいに大声ではしゃぎまわる若者たち。彼らの声は、道路一つ挟んだ場所からも五月蠅いと感じるくらいで、真美の知る昼間の世界にはいない存在だ。

……これが、夜の街なんだ。

ごくりと、真美は唾を飲み込んだ。想像していたものとはあまりに違いすぎる光景に、ほっとため息もこぼす。そこで始めて自分が、思っていた以上に緊張したことを思い知る。無意識に握り締めていた拳を開くと、手汗でじつとりと湿っていた。

「す、すごいね……」

口をついで出てきた言葉が、それだった。すごい、呆けた真美の頭では、それ以上の感想を出せなかった。

目の前の世界に、真美の見慣れた物は何一つ無い。といっても、探せば真美の知っているものがいくつか見付かるだろう。けれどもたとえ見付かったとしても、それが真美の知っているものと同じだとは、どうも思えなかった。

昼間は気にならなかった歩行者用信号機が放つ、緑と赤の異様な明るさ。連動して変わる自動車用信号機が、まるでこんな時間にう

ろついている真美を監視しているようで、不思議な罪悪感を覚えた。そんな真美のすぐ傍を、千鳥足の中年男性が通り過ぎていく。身なりの良いご婦人が、スーツ姿の男女が、大人たちが通り過ぎていく。誰も彼も、真美など目に入っていないかのように。

ふう、と真美はため息を吐いた。

『真美、落ち着け。精神が高ぶっているぞ』

姫子の鋭い注意が入る。

「分かつてる」

……でもね。

「ねえ、本当に私の姿って誰にも見えていないよね」

胸の奥で、呆れた、という感情が伝わってきた。

『見えていないし声も聞こえないから安心しろ、この私が姿を消しているのだぞ。一流の霊能力者でも気配を感じ取れるかどうかの話だ……それと、いいかげんにこの問答は飽きた』

真美は誤魔化すように頭を掻いた。姫子の言うとおり、この問答はこれで四回目だ。

「あはは、ごめん。分かつてはいるんだけど、どうも慣れなくて……」

『まあ、仕方ない。元々能力があつたわけじゃないし、姿を消す能力はどちらかというと私たち向けの能力だからな』

真美は首を傾げた。

「私たち……って、霊能力に向き不向きってあるの？」

『もちろんだ。霊にしか出来ないこと、お前たちにしか出来ないこと、色々ある……ところで、そろそろ緊張はほぐれたか？』

姫子の確認に、真美はゆっくり頷いて、顔をあげた。

「……いた」

自然と背筋が伸びていくのを、真美は冷めた頭で知覚した。

視線の先に、あの子供が……あの悪霊がいた。昼間見たときと変わらず、どこにでもある普通の格好をした小さな子供は、相変わらず俯いていて顔をうかがうことが出来なかった。

走り去っていく車のライトが、悪霊の姿を照らして去っていく。
街灯に照らされた悪霊は、黙ったまま突っ立っていた。

だが、真美はどこか昼間とは違った印象を覚えた。それが何なのかは分からないが、何かが決定的に違うことだけは悟ることが出来た。

「……よし。行くよ、姫」……ん、おい、ちょっと待て」

一つ気合を入れ、悪霊へ伸ばした足が止まった。

「何、何かあったの？」

「……………」

返事が返ってこない。真美は眉をしかめた。

「ねえ、何なの？」

「……………ほう、そうか、やるつもりか」

「ねえ！ やるってな」

『真美、あの餓鬼を見てみる』

また私の話を無視して。

そう愚痴をこぼしつつ、真美は悪霊へ視線を向ける。

その瞬間、悪霊の前に、一人の女性が躍り出た。

「——っ」

何も、言えなかった。

女性の姿が、車のライトに照らし出される。

何も、出来なかった。

呆気に取られた女性の顔。

ただ、見ているだけで。

驚愕に青ざめる車の運転手。甲高い悲鳴をあげるブレーキ。

ただ、呆けるだけで。

女性の身体が、車の先端と接触する。

何も、出来なかった。

「——っあ」

水の入ったバケツを叩きつけたような、鈍い破裂音が真美の耳に届いた。

次いで、破裂音と共に車のフロントに乗りあがった女性がガラスにヒビを入れる。

そのまま手足をジタバタと不気味に動かしながら車の屋根を転がり、血痕を飛び散らしていく。

そして、グチャリと形容しがたい、背筋が凍り付くような気味悪い音と共に、女性は地面を転がった。

……え？

真美は止まったままの頭で、目の前の光景を見つめた。

……音が、消えた。男も、女も、老人も、車も、動きを止めて、ボロボロの雑巾みたいにグチャグチャになった女性を見つめていた。折れ曲がった手足。一部は骨が皮膚を突き破り、歪な形になっていて。

元は藍色だったレディーススーツは砂と血で醜く汚れて、地面に真っ赤な血が流れて広がっていく。

『……見る』

姫子の声が、遠い。手から、バットがこぼれ落ちた。

元の顔が想像できないくらい酷い有様になった顔が、真美へと向いている。真っ白な眼球はドロリと濁った液体と共に、眼孔から飛び出していた。血だらけになった口から、ポンプのように赤い血液と砕けた歯が吐き出されていく。

うつすらと、オイルと血とゴムが焼ける臭いが漂ってくる。女性の……死体を中心に、赤い血溜まりが出来初めて……

ゆらりと、悪霊が動いた。俯いていた顔をあげて、真美の視界に晒された。どこにでもいる、普通の顔だ。特別醜くも美しくもなく、顔の造形が崩れているわけでもない、普通の顔だ。その悪霊の瞳が、死体へ向けられた。

『食事だ』

食事、姫子の言葉が、頭をすり抜け、すぐに、姫子が言ったことを理解した。悪霊が、実演してくれたから。

女性の死体から、何か湯気のようなものが湧き立つ。もやもやと

形をはつきりしないそれは、すぐに綺麗な女性に姿を変えた。目を瞑って、脱力したようにだりとしている。

『あれが魂だ……ほう、なかなかの美人ではないか。私には劣るが、死ぬ前はさぞ持てはやされただろうな』

女性はすぐに、顔をあげた。その目には、意思があつた。

え、あ、あれ？

女性の声が、耳に届く。女性は辺りを不思議そうに見回した後、視線を死体へ向け……絶叫した。

女性を轢いた車から男が降りて、死体を見てあわてて電話している。凍りついた時間が凍解し、辺りは耳を塞ぎたくなるほどの喧騒に包まれる。悲鳴をあげるアベック、珍しそうに携帯電話を取り出す若者、何が起こったのか一目見ようと近寄っていく野次馬たち。

誰も彼も、魂となった女性に気づいていない。半乱狂になっている魂の悲鳴に、耳を貸す様子も無い。彼らには、見えていないのだろう。

ゆらりと悪霊が動く。混乱している女性の魂の手を、掴んだ。

え、あ、あ、こ、子供？

につこり、悪霊が微笑んだ。その笑顔は正体を知っている真美ですら、可愛いと思つたくらいで、女性も頬を引きつらせながらも、つられて微笑む。

次の瞬間、悪霊は笑顔のまま、女性の腕を噛み千切った。

……え？

呆気にとられた女性の声。呆けたまま、女性は無くなった腕から先を見つめている。血は、出ない。

シャク、シャク。スイカを食べるようにシャクシャクと音を立てる悪霊の頬。収まりきらなかった指が口から零れて、押し込まれた。

……あ、——っ！？ 嫌あああああ！！！！

事態を飲み込んだ女性が逃げようとしたときには、もう遅すぎた。見た目からは想像も付かない俊敏さで悪霊は女性の背中に張り付き……肩口に食らい付いた。

ぎゃああああ！！！！ 痛い痛い痛い！！！！ 痛い痛い痛い痛い
い——！！！！

街全体に轟いたかと思えるくらいの絶叫が、響く。けれども、誰も気づかない。

ぎゃああ！！ ごめんなさい！ 許してください！ ごべんなさい！
い！ なんでもじまわずから！ いだいいだいいだ！！！！ ごべ、
いだ、やべべ！ ゆぶじで！

凄まじいスピードで開閉を繰り返す悪霊の口。変わらない笑顔で、
カカカッ、と音を立てて咀嚼し、飲み込まれていく女性。見る見るうちに女性の腹部が食い尽くされていく。

嫌だ！ 嫌！ じにたくない！ がみざま！ お母さん！ お父さん！
助けて！ 助け、ぎゃあああ！！！！ いあ、いあい！ いあいよ！
いあいよう！！

そこで限界だった。気づいたとき真美は、地面に這いつくばって
胃の中のを全て吐き出していた。涙を流して、鼻水を垂らして、
嗚咽を繰り返しながら、声にならない激情を吐き出し続けた。

ぎゃあああああ——！！！！！！！！

断末魔の悲鳴が、反響していった。

……どれくらいの時間が過ぎたか、分からない。やっと吐き気が
治まって顔をあげたとき、死体のある場所には大勢の人ばかりが
来ていた。

近くには何台ものパトカーと、救急車が集まっていて、大勢の人
たちが右に左に忙しそうに動き回っていた。

『そろそろ落ち着いたか？』

何度かふらついたが、かろうじて立ち上がった。視線を下ろすと、
地面に黄色い水溜りが出来ていた。胃液の臭いが、鼻につく。

幸い、着ている服もジーンズも靴も、汚れていない。傍に転がっ
ていたバットも……バットは、残念なことに吐しゃ物がべっとり付

いていた。

「……………」

『それは捨てて置け。汚いし、今のお前には必要ない……それより、だ』

……………。

『あの餓鬼はもう腹いっぱいだそうだ。見ろ、場所を変えるつもりだぞ』

促されるまま、顔をあげる。

見ると、悪霊は満足そうに頬を緩ませて、人だかりから離れ始めた。その表情からは、今さっき凄惨なことをしたとはとてもではないが、想像できない。

『ふん、姿を消しているとはいえ、餓鬼め。余裕綽々で、辺りを警戒すらしていない』

「……姫子」

ギリリと、かみ締めた奥歯が軋んだ。沸々と湧き上がっていくとす黒い怒りが、体中に広がっていく。もう、あの悪霊を哀れむ気持ちには全く無い。

ニヤリと、姫子は意地の悪い笑みを浮かべた。もちろん、その姿は誰にも見えないし、真美にも見えない。けれども仮に姫子の姿が見えていたとしたら、きっと誰もがそう例えるだろう。

『おう、どうする？』

聞かなくても、姫子には答えが分かっていた。

「あいつを……あの悪霊を、ぶっ飛ばす！」

真美の胸の奥で波紋が広がった。握り締めた掌が痛みを訴えているが、全く力は緩まない。爪が皮膚に食い込み、薄く血が滲む。

『そうか、それでは覚悟を決めたのだな？』『殺す覚悟』というやつを』

「絶対、絶対許さない！」

そう、許されない。絶対に許してはいけない。あの悪霊を、あの餓鬼を、許してはならない。

『分かっているのか？ 殺すということは、相手の全てを背負うということだぞ。恨みも、悲しみも、喜びも、相手の存在を背負うということなのだぞ。それを受け入れる覚悟が本当に』

「ごちゃごちゃ五月蠅い！！」

怒鳴り声に、姫子は口をつぐんだ。とはいえ、驚いたわけではない。

「背負うとか、覚悟とか、そんなことはどうでもいい。そんなこと言われたって、私、分からないもん。殺すとか殺されるとか、考えたことも無かった。でも、でもね……」

『けど？』

「今……私は、生まれて始めて人を……誰かを殺したいって思ってる！！ 心の底から憎いつて思ってる！！」

それは心からの本心。幼いながらの激情が心を燃やし、燃え上がるような憎悪が身体を突き動かそうとしていた。

ふと、悪霊の身体がふわりと浮いた。そのまま重力を感じさせない動きで、真つ暗な夜空へ飛び上がったいく

「姫子！」

『分かっている、後をつけるぞ、意識を私に集中しろ』

事前に説明されたとおり、真美は自分の奥にいる姫子へ意識を集中させた。

体中の骨が軋み、筋肉が盛り上がる。一気に筋肉が硬質して、細かった手足が膨張する。一瞬で筋肉の鎧を身に付け、少女らしからぬ姿になった真美は、両足に力を込めて飛んだ。

ぐん、と真美の身体が空中に飛び立ち、傍にあった五階建てのビルの屋上に着地した。

すぐに顔をあげて、悪霊の後姿を追う。

『よし…… 肉体強化による拒絶反応は無いな…… 肉体の操作は感覚で理解しろよ』

「うん、もう一回行くよ！」

再び、両足の筋肉が盛り上がり、硬質化する。瞬間、真美は夜空

を飛んだ。

悪霊が地面に足を下ろした場所は、郊外の寂れたビルの中だった。建設途中なのか、それとも中止になっているのかは分からないが、ビルの外壁はコンクリートや鉄骨がむき出しになっていて、屋上すら作られていなかった。窓が付けられる場所は全て空洞になっていて、外からビル全体を囲うように、先端から半ばまでビニールシートで覆われていた。

鉄骨の一つに鈍い音を立てて着地し、真美はふう、と息をついた。「姫子、あいつは何処？」

そのまま鉄骨から飛び降り、数メートル下のコンクリートで出来た床へ着地する。屋根や天井がないせいか、まるで屋上みたいだ。地面から高さがあるせいか、四方を囲うシートが風でバサバサとはためいた。

『むう、やつめ、後を付けられて気に入らないみたいだ』

「え、どこ？」

『どこって、目の前だ』

言われたとおり、前を見る。そこにやつがいた。

さっきまでの笑顔とは似ても似つかない、禍々しく歪んだ形相が、真美を見つめていた。つまらなそうに、身体を左右に揺らしている。そつと、気づかれないように身構える。姫子のおかげで、体中から力が漲ってくる。服の上からお腹を撫でると、硬い腹筋の感触が伝わってきた。

『真美、戦う前にいくつか注意事項がある』

「なに？ 早くしないと襲ってくるよ」

『一つ、絶対に冷静さを失うな』

「分かってる」

『二つ、焦らず、慎重に、確実に殺せ。加減は間違ってもするな、臆病になればそれだけ不利になる』

「分かってる、手加減なんて絶対しない」

『最後、私とあいつの力をそれこそ天と地ほどの差がある。いくら動かす肉体がどうしようもないとはいえ、万が一にも負けることはない』

「……ちよつと」

『さて、まずは武器だが……ほれ』

フツと手に何かが握られる。目をやると、右手に黒い槍が握られていた。一メートル強はある刃先から反対まで、真つ黒な造形の異様な槍だ。

『邪神の黒槍、私が使っていた得意の武器だ。私の力をそれなりに注いでいるから、霊体以外も大抵の物は切れるぞ』

試しに軽く槍を振ってみる。ヒュン、ヒュン、と空気を切り裂く音が響く。槍は驚くほど軽く、持っている重さが全く伝わってこない。握り心地も素晴らしく、力いっぱい握り締めても違和感なく指に合った。

しかし、果たしてこれを使いこなせるのだろうか、真美は不安を覚えた。今まで護身術はおろか、そういった技術を学んだことは一度も無い。体力だけなら、クラスメイトの平均よりは高いが、それでも似たり寄ったりだ。

だが、槍は素人が使うには勝手の良い武器でもあると言える。ナイフや剣と比べて、倍以上の長さを持つ特性から、ある程度離れて攻撃できる。これは実践に慣れない素人にとって、大きなアドバンテージだ。突く、払う、切る、の三つの攻撃方法を持ち、持つ人が持てば恐ろしい凶器となるのだ。

ただ、使いこなせればという前提ではあるが。

「でも、槍なんて使ったことない」

『使いこなせというわけではない。今のお前の腕力なら、適当に振り回すだけで十分だ』

「……折れたりしない？」

『そう簡単に折れてたまるか……落ち着け、とにかく冷静さを失う

な」

「分かつてる」

『あの餓鬼をぶちのめすぞ』

「うん、ぶちのめす。あの餓鬼を倒すんだ」

姫子が言うのなら、まず折れないのだろう。真美は黒槍を片手に持ち直して、腕を後ろへ振りかぶった。

……とても静かだった。時折風ではためくビニールシートと、どこから聞こえてくる生き物の鳴き声しか聞こえてこない。虫か何かだろうか、真美には分からない。

悪霊は……餓鬼は、ゆっくり真美の下へ歩を進め始め、真美はいつでも黒槍を振るえるように身構えた。ギュツと、黒槍を握り締めた。

呼吸が自然と荒くなる。不規則に乱れた呼吸が汗となって頬を伝い、緊張で視界が歪む。自分が立っているのかわからないのか、それすらも分からなくなってくる。ぐるぐる、ぐるぐる、餓鬼の輪郭が歪み、分裂し始める。汗でじっとりと湿ったシャツが、妙に鬱陶しい。荒くなった呼吸が五月蠅い。耳元で、はあはあ、本当に五月蠅い。汗が頬を伝って。

『真美、落ち着け』

その言葉に、真美は我に返った。見ると、餓鬼は真美のあと十数メートル程度まで近づいていた。

大きく、息を吐いた。

『落ち着け、絶対勝てる、私がいるんだ、負けることは決してない』
「……うん」

やはり、姫子には敵わない。真美は改めてそう実感し、眼前の敵を見据えた。

「しゃあああああ！！！」

瞬間、餓鬼は奇妙な雄叫びをあげて、一気に真美へと走り出した。そのスピードは見た目とは不相応で、ビデオの早送りみたいに両足が回転し、コンクリートの床を踏み鳴らして接近してくる。

「うあああ——！！！」

左足を一步前に踏み出して腰を捻りながら。

「じゃああああ——！」

真美へと伸ばした餓鬼の手が、鋭く凶悪な外形に変形する。その凶器が真美へと迫り、大きくなって……。

「——っああああ——！！！」

到達する前に、真美の振るった黒槍が、餓鬼の身体を横殴りした。右手にズシリと衝撃が走る。硬い肋骨を砕く感触と内臓を傷つけていく感触がはつきり分かると同時に、迫っていた手が一気に視界から消え去った。

黒槍が弧を描いてしなり、曲がる。衝撃で手から黒槍が離れそうになるのを必死で押さえながら、限界まで黒槍を振り抜いた。

ふわりと、餓鬼の身体が空中を飛んで、すぐにコンクリートの床を転がった。一回、二回、三回、四回、五回、六回、頭から、腕から、足から、腰から、お腹から、顔から、ボールのように跳ねて、暗がりの中へ転がっていった。

「——っはあ——！」

よろけそうになるのを、寸でのところで堪えた。黒槍を杖代わりにして、踏みとどまる。遅れて、体中から冷や汗が噴出してきた。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

『よし、初撃は上手くいった……だが油断するな、まだ倒したわけではないぞ』

「はあ、はあ、う、うん」

顔をあげて、転々と血の跡が残っている方向へもう一度黒槍を構える。

あんなに……血が……。

すぐに、血の跡は蒸発するように霧となって四散した。

『血を見たからって臆するな。見えないモノでも血は流すが、紛い物だ。体外から出ればすぐに蒸発して消えるし、出血多量で死ぬこともない』

「う、うん」

『振るのが遅かったとはいえ、手傷を負わせている。逃げる気配も感じない……！？ 真美、後ろだ！』

反射的に、振り向きざまに黒槍を一闪した……が、無駄だった。

『下だ！』

「——っ！？」

しゃがんで避けた餓鬼と目が合った。潰れて骨が飛び出した鼻、ぼろぼろになった歯、ドロリと飛び出した眼球が、真美を見詰める。血だらけの口元が、ニヤリと笑みを浮かべた。

フツ、と餓鬼の姿が消える。同時に、脇腹と喉に激痛が走った。

「——っ！！」

『くそ、やられた！』

あまりの痛みに、両足の力が抜けて、膝をつく。激痛が走る喉元から何かがせり上がってくるのを感じ、吐き出した。鼻の奥が痛み、鉄臭さを覚えると同時に、床が赤く染まった。脇腹に手を当てると、柔らかい何かが指先に触れた。同時に、電撃が脇腹から伝わってきた。

「——っ！？ ごぼ、ごぼ」

『喋るな！ 喉と腹がやられている。下手に力を入れると、腸が飛び出るぞ！』

ごぼり、ごぼり、おびただしい量の真っ赤な血液が、真美の口から吐き出されていく。喉元に手を当てると、既に真っ赤に染まっていた掌に新しく、暖かい血液が広がった。

（……血、血だ！？ こんなに血が！！）

視界が霞み、意識が朦朧としてくる。激痛でどんどん頭が回らなくなっていく。苦しい、血が肺に入っている、血が呼吸を邪魔している。

『落ち着け！ 傷ならすぐに修復するし、その程度で動けなくなることはない！ 槍から手を離すな！』

痛いよ！ 痛いよ！ 姫子助けて！ 痛いよ！ ひめこお！ 痛

いよ！　いたいよ！　痛い！　ひめこたすけてえ！

『くそ！　錯乱してっ——！？　横だ！　しゃがめ！』

（横？　横って……）

姫子の言葉に反応して、横を向く。瞬間、肌色の手が大きく眼前に広がっていつて……左半分が真っ赤になった。

（あえ？）

額に衝撃を覚えたと同時に、グチャリと怖気が走る音が頭の中を反響した。ブチブチと何かを引きちぎる音と共に、左半分が目をつたときよりも真っ暗に変わった。

（あ、あえ、あえ？）

餓鬼はニタニタ気持ち悪い笑みを浮かべながら、真美を見ている。粘着質な真っ赤な液体に塗れた右手を、そっと真美へと差し出した。そこには、白い塊があった。少し潰れて、形が変わっているそれは、真美の……。

「しゃあぁ！」

雄叫びをあげて、餓鬼はその塊を口の中に入れた。折れて不ぞろいになった歯がちらほらと見え、真っ赤な口から思い出したように血が垂れている。飛び出した眼球をそのままに、餓鬼は楽しそうにモグモグと咀嚼していた。

寒気が、恐怖が真美の身体を硬直させた。

（こ、殺される……殺される！）

今、真美は初めて、自分が死ぬことを、殺されることを肌で実感した。

（い、いやだ、死にたくない、死にたくないよ、姫子！）

頭で考えていた覚悟など、とうに無い。決意も、義務感も、高揚感も、無い。残ったのは、死にたくないという生への渴望と、死への恐怖だった。

（姫子、姫子、どうすればいいの！？）

このままでは、確実に真美は殺されていただろう。食われるか、それともなぶり殺しにされるかは分からないが、真美一人だったら

確実にそうなっていただろう。

けれども、真美には最強の味方がいた。

『落ち着け、万が一にも負けることは無い』

真美の錯乱も、姫子の力強い一言で治まった。力を使っただのかは定かではないが、熱く茹つていた真美の頭は一瞬で冷静さを取り戻した。そのかわり、錯乱して気づいていなかった激痛を、改めて感じてしまったのだが。

（姫子、姫子……）

『言っただけで、負けることはない。真美、槍を捨てる。ただし、投げ捨てるな、手から零れ落ちたように見せる。もう握る力も残っていないように』

言われるがまま、黒槍から手を離すと、槍は床に当たる直前、空気に溶け込むように消えた。

「しゃあなあああ!!」

バチン、バチン、餓鬼は狂ったように手を合わせた。目の前の獲物が死に掛けていることを歓喜しているかのようだ。いや、実際に喜んでいいるのだろう。

『次に、やつを挑発する』

（挑発!?!）

『そうだ。今の真美ではあの餓鬼を捉えきれない。ならば、やつを捕まえて、直接攻撃するほかあるまい』

……やるしかない。

俯いて、両腕に力を込める。残った力をゆっくり集める。

『挑発して、やつが近寄ってきたらどこでもいいから、身体のどこかを掴め。それが出来たら私たちの勝利だ。脇腹の応急処置も始めている。多少は痛みが引いてきただろ』

言われたとおり、少しずつではあるが、痛みが引き始めた。焼け石に水程度ではあるが、それでも先ほどよりは雲泥の差だった。

ふう、とため息を吐いた。瞬間、真美は思わず喉に手を当てた。血でぬめってはいたけども、指先には確かに皮膚の感触が伝わって

きた。何時の間に、呼吸出来ていたのだろう。意識すると、空気の手さが肺に染み渡ってきた。

『先に喉を治した。これから私の言うことを、そのまま復唱しろ』
「うん、分かった」

あとは、姫子に任せるだけだ。

顔をあげると、餓鬼はまだニタニタとした笑いを崩していない。けれども、もうさっきのような恐怖は感じない。姫子の力強さが、姫子の負けないという意思が伝わってくるようだ。

『おい、何を見ている鼻が潰れた糞餓鬼』

「おい、何を見ている鼻が潰れた糞餓鬼」

ピタリと、餓鬼の動きが止まった。

『ニタニタ気持ち悪い笑みを浮かべて……そんなに髑るのが楽しいか？』

「ニタニタ気持ち悪い笑みを浮かべて……そんなに髑るのが楽しいか？」

『それもそうか、お前みたいな貧弱で醜くて知性の欠片も無い糞よりも劣る屑にとって、弱っている相手にしか強く出られないのだから』

「それもそうか、お前みたいな貧弱で醜くて知性の欠片も無い糞よりも劣る屑にとって、弱っている相手にしか強く出られないのだから」

ピクリと、餓鬼の眉根が動き、顔から笑みが消えた。

『ほう、一人前に怒るか？ でもお前には無理だ、お前のようなやつは死に掛けている相手にもビクビク怯えるような度胸しかない。今までそうやって来たのだろう？ 強いやつには腰を低くして、弱い相手には悦に浸って』

「ほう、一人前に怒るか？ でもお前には無理だ、お前のようなやつは死に掛けている相手にもビクビク怯えるような度胸しかない。今までそうやって来たのだろう？ 強いやつには腰を低くして、弱い相手には悦に浸って」

『おいおい、怒るなよ。全部本当のことだろう……今更強がっても意味はない』

「おいおい、怒るなよ。全部本当のことだろう……今更強がっても意味はない」

『さっきからニヤニヤ笑って……どうして追撃しない？ 怖いんだろ？ 反撃されるのが、嫌なんだろ？ 仕方ないな……特別だ。私のような寛大な心を持った相手と戦えて感謝するんだな』

「さっきからニヤニヤ笑って……どうして追撃しない？ 怖いんだろ？ 反撃されるのが嫌なんだろ？ だったら仕方ないな……特別だ。私のような寛大な心を持った相手と戦えて感謝するんだな」

餓鬼の顔中から血管が浮き出る。少ない歯を噛み締めたせいで、残った歯も圧力で飛んでいき、床を転がった。

『特別に逃がしてやる。畜生のように土下座しながら去れ』

「特別に逃がしてやる。畜生のように土下」

瞬間、餓鬼は床を蹴って飛んだ。おぞましい形相が一気に眼前に迫り、真美は突き出された餓鬼の両腕を受け止めた。

「ぐう！」

掌を突き破って止まる。ギュツと餓鬼の手を握って押さえると、醜く歪んだ餓鬼の形相が僅かに変わった。

にやりと、自然と真美は笑みを浮かべた。

「姫子！」

『邪神の蠟燭！』
ごまっさんへ

瞬時に真美の両手から鮮やかな青い炎がとまった。全く熱さを感じないそれは、すぐさま餓鬼の両腕を伝わって全身に燃え広がり、あっという間に火達磨に変えた。

「ぎゃああ——！！！」

ブチリと音を立てて、餓鬼の両腕が千切れた。途端、真美の手に引っ掛かっていた餓鬼の手が一気に燃えて黒ずんで炭化し、微塵になって消えた。

「ひ、姫子、何が起こったの？」

のたうち回って火を消そうとしている餓鬼を見て、思わず腰を引いた。みるみるうちに餓鬼の呻き声が小さくなっていく。

青い炎はなおも餓鬼の身体を舐めていき、床を這いずる様を笑うように火力が強まっていった。

『あの炎は邪神の力を帯びた炎、くれば息絶えるまで燃え続ける。なに、たいしたものじゃない。放って置けば灰になって終わりだ』

「……十分たいしたものだと思うけど、いつつ」

体中から訴えられた痛み、真美は顔をしかめた。目の前の光景に一瞬我を忘れていたが、無理に動いたからだだろう、涙が出るくらい痛みが酷かった。

暖かい液体が頬を流れていく。手を当てると、ヌルリとした感触が伝わってきた。

『多少は痛みを軽減しているが、完全には消せないから我慢しろ。今、全身の内臓と傷口を修復、それと新しい眼球を再生しているところだ。しばらく大人しくしている』

「あ、そういうば、片目が無いのか……」

視界が半分の違和感が強い。そつと、流れた血を拭った。

『感謝しろ。私が痛覚を操作してなかったら、激痛で失神しているところだ』

「うん、ありがとう」

チラリと視線を餓鬼へ向けると、もうそこには炭の塊しかなく、青い炎も徐々に弱まり始めていた。あれほど真美に怪我を負わせた恐ろしい悪霊も、死ぬときは実に呆気ないものだ。

……本当に終わったんだ。そう思った途端、両肩にズシリと疲労が押し掛かったような気がした。けれども、その疲労がどこか心地よかった。

『どうだ、真美？』

「……ん、何が？」

『初めて戦った感想はどうだった……また、戦いたいと思うか？』
「それ、聞く必要がある？」

『ないね』

真美が汚れた衣服をどうしようかと頭を悩ませるのは、傷が完全に治ったあとのことである。

死闘（後書き）

次回の話で、いったん区切りたいと思います。

怨霊少女ぶらり旅

「……最近、フィンキ変わったネ」

真美がリドリーからそう評されたのは、あの死闘の夜から二週間程経った頃だった。

いつものように授業を受け、給食も食べ終わり、昼休みを楽しんでいたときのことだった。真美、リドリー、明日香の三人は、特に目的があるわけでもなく、自分たちが所属しているクラスで、おしゃべりをしていた。

空が晴れ渡っているということと、次の時間が体育ということも相まって、クラスには男子の姿は無く、女子だけがグループ同士で固まっておしゃべりをしていた。先生もいないうえに、昼休みということもあって、他のクラスから喧騒が聞こえてくるくらい騒がしい。

出井英学校では、体育の時間、男子は隣のクラスへ移動し、隣のクラスの女子は真美の所属するクラスに分かれて着替えをしている。そのため、昼休みの次が体育のときは、昼休みの時間に移動するのが当たり前になっていた。

「そう、かな？ あと、フィンキじゃなくて、雰囲気ね」

リドリーの指摘に、真美は首を傾げる。既に着替え終わっていた真美は、ジッと着替えている明日香とリドリーを見つめた。真美自身、変わったと言われても、そういった覚えも実感もない。

だが、そう思っていたのは真美だけのようだった。

「あ、それ私も思ってた」

着替えたせいで崩れた髪形を直していた明日香も、リドリーの指摘に頷く。

明日香にまでそう言われると、本当に雰囲気が変わってきたのだろうと、真美は思った。はてさて、いったいどこが変わったのだろうか。自分では全く分からないので、検討も付かない。

「どう変わったの？ 全く分からないんだけど」

もしかして……。真美の頭に、嬉しい想像が過ぎる。

この年になってやっと、色気というものが出てきたのかもしれない。真美はそう思ったが、大人からすれば、何をマセたことを言っているのかと思うところである。まだ小学生の女子に色気を求める人など、そういう性癖や事情が無い限り、まずいなしし必要がない。「もしかして、色っぽくなった？」

そうだ、そうに違いない。毎日、小学生とは思えない色気とか美しさとか将来有望とかを間近で見せられている真美にとって、やっ

と見返せるときが来たのだ。
主に胸とか、大人っぽさとか、胸とか、儂さとか、胸とか胸とか胸とか胸とか。決して、誰かさの豊かな胸が羨ましいわけではない。そういうわけではない。ただ、ちよつと興味があるだけ。

姫子という悪霊を身に宿しているとはいえ、真美は普通の女の子だ。年相応の願望くらいはある。例えば頭が良くなりたいたとか、胸を揺らしてみたいとか、大人っぽいことをしてみたいとか、胸圧だけでボタンを飛ばしてみたいとか、色々。ある意味親父臭い願望もあるが、一度くらいは同級生と比べて優越感に浸りたいものだ。

そんな風に邪な想像を働かせていると、胸の奥で波紋が広がった。

『まあ、ありえないわけだが』

「ちよつと黙っていてほしいんだけど、姫子さん」

頭に響く声に、真美は声をひそめて、笑顔のまま答えた。だが、相手はそんなことで怯むような相手ではなかった。

『知っているか、人の夢と書いて儂いと読むのだ』

「……で？」

『良かったじゃないか、早いうちに儂い妄想に見切りをつけることが出来て』

「儂いと言つか、人の成長を儂いと言つか、このツルペタ」

『あいにく、この世には『つるぺた』だからこそというやつらがいる。真美のように、中途半端に膨らんでいるやつには辛い話だな』

「ふん、それって負け惜しみでしょ」

『残念だろうが、事実だ。といっても、例え真美が『つるぺた』だったとしても、需要はないかもしれん』

「なんでよ」

『『つるぺた』といっても、私のような全世界の少女がひれ伏すような美少女でなければ、その魅力は半減だ。薄氷のような透明感と大人顔負けの美貌、そしてバラのような妖しい色気を持って、始めて認められるものなのだ』

「要はロリコンに好かれるってことでしょ。こっちから願ひ下げ……だいたい、誰が儂いのよ、誰が」

『私以外に誰がいる』

「どこの世界に邪神を儂いと思うやつがいるのよ」

『ここにいるだろ』

「……あゝ、もう」

……真美はふう、とため息を吐いた。何か言い返したいと思ったが、語彙の量に差がありすぎる。このまま続けば、間違いなく言い負ける予感がしたので、止めた。こう言えば、こう。そう言えば、こう。はつきり言って、悪口合戦ではどう頑張っても姫子に勝てる気がしない。

それに、姫子の挑発とも取れる言葉に、イラついたわけではない。というより、むしろ姫子の言葉に、本当に儂い願望なのかもしれない思ってしまったことに、空しさを覚えてしまったことの方が大きかったりする。

「……ところで、話を戻していいかな？」

頃合を見た明日香は、仲裁の意味も込めて会話を切り出した。
『いいぞ』

「……二人ともOKです」

明日香の仲裁に、真美は大きく頷いた。当初は姫子に怯えていた明日香とリドリーも、最近では会話する程度なら普通に振舞えるくらいには慣れてきた。

そのため、今のように真美と姫子が喧嘩を始めても、頃合まで黙って待つくらいは出来るようになっていた。

真美は軽く頭を振った。

「それで話は戻るけど、雰囲気って言っても、具体的に私のどこが変わったように見えるの？」

そう尋ねられて、明日香とリドリーは首を傾げた。

「……なんで首を傾げているのよ」

「ソウ言われてモ……」

「どう説明すればいいか分からなくて……」

明日香とリドリーは、本当に困ったと言わんばかりに、頭を捻った。実際、二人はどう答えればいいか思いつかなかった。

二人が、真美の雰囲気が変わったと思ったのも、要は直感なのかもしれない。何かしら理由があるわけでもなく、ただ変わった、と漠然と思っただけなのだろう。

だからといって、嘘を言っているわけではない。根拠も何もない直感だが、確かに真美の雰囲気が変わっていることだけは確信を持つて肯定出来た。

明日香とリドリーは互いを見つめて、頭を悩ませた。上手く言葉に出来ないのが、もどかしい。言葉ではなく、思っていることがそのまま伝われば楽なのに、と二人は思った。

「……それじゃあ、どう変わった？ 怖くなった？ 可愛くなった？ 綺麗になった？ 美人になった？ 胸が大きくなった？」

『お前はどこまで胸を引っ張るつもりだ』

「五月蠅い」

真美から出されたヒントに、リドリーはおずおずと口を開いた。

「umm……何とイウカ……ダイミたいにナッタ」

その言葉に、明日香も顔をあげた。納得と言わんばかりに頬を緩めた。

「あゝ、うん、私もそんな感じかな。なんかお父さんみたいな感じがするときがあるような……」

ダディ。お父さん。二人の口から出た言葉に、真美は呆気に取られた。というより、自分が聞いた言葉を忘れたいと切実に願った。叶わなかったけど。

「……は、はは、お、お父さん……」

『ほう、予想外の大穴じゃないか。良かったな、真美』

「姫子……喜ぶ女の子がいると思う？ いるなら今すぐ私の前に連れて来なさいっていうか、何故にお父さん？」

よりにもよって、お父さん。予想外の一言に、真美は泣きたいと思った。これならまだ、怖いとか男らしくなったと言われた方が、まだマシだった。

「ohm！ 違うヨ。そういうコトじゃなくて、どう言えばいいのか……」

「うーん……」

『良かったな、お父さん』

「……姫子……あんたねえ」

結局、明日香とリドリーは昼休み終了のチャイムが鳴るまで頭を悩ませることになった。もちろん、納得のいく言葉は出なかった。

真美と明日香とリドリーは、とても仲が良い。波長が合うというのか、小学一年生からの付き合いだというのに、これといって喧嘩もしたことが無い。

遊ぶときは大抵三人一緒だし、何か買い物があるときも大抵三人で行く。学校の行事だって三人でやってきたし、幸運にもずっと同じクラスだ。

そんな三人は、お互いの家にお泊りすることが月に何回かある。基本的に、真美↓明日香↓リドリーの順に変わるが、時々変更されたりもする。お互いの親が了承しているせいもあって、三人の家には客用の寝具一式が二つあったりするのだ。

そして今日、三人は明日香の家に泊まることになっていた。

放課後になり、一旦自宅に戻って着替えを持って、明日香の家に向かう。いつも通りの手筈に、真美は鼻歌交じりに着替えが入ったリュックを背負って明日香の家へ向かっていた。

赤い斜陽が真美の身体を照らす。長く伸びた影が道路を飛び越えて向こうの歩道まで届いていた。買い物帰りの主婦が、子供の手を引いて真美の横を通り過ぎていく。真美の背よりも長い影が、いつまでも視界の端をうろついていた。

「……なあ、他人の家に泊まるのがそんなに楽しいか？」

姫子から疑問の声があがる。姫子には真美がなぜ喜んでいるのか、全く理解できなかった。姫子の遠い彼方にある人間だった頃の記憶には、他人の家に泊まって歓迎されたことなど一度も無い。

住んでいた場所が貧しい村であったため、他人を持って成すような余裕が無かったのである。それこそ、今日食べるものにも事足りぬ日もあった。そんな状況で他人の家に泊まるなど、とてもではないが口にすら出せることではなかった。

そして封印されて閉じ込められた後も、新しい情報が入ることもなく、唯一入ってきた情報が戦時中の人々の様子だったためでもあった。

「楽しいよ、夜遅くまでいっぱいお喋りできるし、ゲームだって出来るしね」

「むう、ゲームか」

「あれ、姫子ってゲーム嫌いだったわけ？」

「大好きだ」

「だよね……家にあったやつも喜んでいたし、何か不満？」

「私が出来ないからな」

「……それもそうだね」

藪蛇だったか。真美は心の中で舌を出した。自由に動き回ることも出来ず、四六時中真美と行動を共にさせられているのだ。時々思うが、今の状況は姫子にとってかなり窮屈なのだろう。だからとい

って身体を明け渡すつもりはないが。

『ところで、これから行く明日香の家はどんなものなのだ？』

「お寺」

瞬間、強い波紋が胸の奥で広がった。姫子から伝わってくる強い感情の乱れに、思わず真美は足を止めた。

「なに、どうかした？」

『……お前、私がいると分かって寺に行くのか？』

姫子の呆れ果てた声に、真美は首を傾げ……絶句した。

『ようやく気づいたか』

「ど、どうしよう……だ、大丈夫かな？」

『……まあ、大丈夫だろ。前はお前の中に入った直後で疲労していたが、今は私の魂もしっかり定着しているし、体調も万全だ。少なくとも、明日香みたいなやつが襲ってきても返り討ちにするくらいは出来る』

「……それって、私がやるんだよね？」

『お前意外に誰がやるというのだ。それとも、危険を承知で私に身体を明け渡すか？ 上手くいけば、襲ってくるやつを皆殺しに出来るぞ』

姫子から飛び出した物騒な言葉に、真美は背筋を震わせた。

「……ま、まあ、とりあえず行くわよ」

真美は軽く頭を叩いて、気持ちを切り替えた。このまま立ち止まっただけでも仕方がないので、先を急いだ。

西園寺家の自宅は、全国でも有名なお寺の一つである。敷地面積が二百平米もあり、ほとんどが墓として使われている。家事態も、寺がそのまま自宅として使われているため、どこか現代の家々とは違った趣が感じられた。

長い堀と、目の前の蔵かな門を横目で見つつ、真美はインターホンを押した。ピンポン、と軽やかな音が付属のスピーカーから鳴っ

た。

「……………」

……しばしの無音。何時来ても、真美はこの瞬間に慣れなかった。手持ち無沙汰のせい、妙に落ち着かない。家の物が応答するまでの十数秒が、やけに苦痛に感じてしまうのが常だった。

『むう…………』

姫子が呻いた。気を紛らわす意味も込めて、今回は話しかけた。

「どうかした？」

『いや…………なに、たいそうな結界が張られているから、何事かと思つて…………いや、いい。気にするな、今は忘れてくれ』

「そこで止めないでよ。気になるじゃない」

『気にしたって意味はないし、説明するのが面倒だ』

続きを聞きだそうとしたすぐあとに。

（はい、西園寺です）

と、インターホンから明日香の声が響いた。

「え、あ、明日香、私、真美だけど…………」

（あ、真美ちゃん。待ってたよ、あがつて。リドリーちゃんはもう来ているから）

「うん、分かった」

ブツリ、と声が途切れた。

『…………どうした、行かないのか？』

……出足を挫かれた形になった真美は、ふう、とため息をこぼして、真美の身長よりも二倍近く高い門を開けた。

目の前に、美しい庭が広がった。石畳が点々と続いており、数メートルほど行ったところで二手に分かれていた。その別れ場所に、

『左：西園寺家。右：お墓』と書かれた小さな看板が立てられている。た。

『ほう…………なかなか風情があつて良いではないか』

姫子の評価に真美も心の中で賛同した。風流だとか風情だとかそういうのは、まだ真美には分からなかったけれども、目の前の庭が

美しいということだけは分かっていた。

隅々まで手入れが行き届いた庭は、色々な草木が生え揃っていて、自然特有の雑多さは無い。人に整備された特有の洗練さが、木々の一つ一つから見え隠れしていた。

「お邪魔します」

敷地内に足を踏み入れた……途端、真美は目の前が真っ白になった。

あ！？

痺れるような衝撃が全身を走る。体中の血液が抜け出ていくような、君の悪さが伴う違和感を覚えたと思ったら、すぐに視界は元の景色に戻っていた。

……あれ？

首を傾げていると、胸の奥で波紋が広がった。姫子の、氣遣う感情が伝わってきた。

『真美……意識はしっかり保っているかしら？』

「う、うん、吃驚したけど平気」

『それは重畳の至り……真美、そのまま横の木の根元の近くにある小さな岩を見なさいな。面白いものがあるから』

言われるがまま、視線を送る。すると、焦げて黒ずんだ紙が張られていた。というより、痕跡があつた。半分以上焦げ付いて原型が分からなくなっており、紙が張ってあつたという輪郭と、僅かな紙片が残されているだけだつた。

近づいて確認すると、残された紙片の一部に、文字らしき部分があつた。そつと手で触れてみると、ほんのり温かく、文字が熱を持っていた。

『それは結界に使われていた御札ね。見る限り、かなり強力な力が宿っていたみたいだけど、私には敵わなかったみたいね。私の力に耐え切れず、焼け焦げてしまったのでしょね』

「……でも、どうしてこんなものが……ていうか、姫子、あんた何するつもり？」

『何って、まだ何もしていないじゃない』

真美はため息を吐いた。

「気づいてないのか知らないけど、また口調が変わっているわよ」

『そうかしら？』

これだもの。真美は軽く頭を振って、さっさと明日香の家へ向かった。

これまでの付き合いから、真美は姫子の口調からそのときの感情が、おおよそ分かる。

感情にブレが無いときは中性的な、どこか男性的な話し方に。感情にブレが出始めると、くかしら、のような女性的な話し方になる。今のように口調が可愛らしくなるということは、感情にブレが出始めているということで、何か強い感情を覚えているということなのである。

「とりあえず私から一言話しておくけど、変なことしないでよ」

『まあ、人聞きの悪い……いきなり喧嘩を売ってきたのはあちらよ。戦いを挑んだ相手がどれ程の相手か、後悔させたいのだけど、いいでしょ？』

「良くないわよ！」

『そう言わないで。それでも我慢しているのよ。真美がいるから結界を解除するかと思っていたのに、この仕打ちよ……少しくらいお返ししても許されると思うわ』

「お願いだから勘弁してね」

姫子の怒りを必死になだめながら、真美は目の前の玄関口を開けた。

明日香の部屋は、一般的な家庭と比べてかなり広い。家自体がお寺も兼ねている分大きいのもあるが、それでも畳み十畳分となるとその広さがうかがえる。

しかも、明日香自身は不必要な無駄遣いをせず、整理整頓を心が

けているため、さらに広く感じる。テレビや箆笥、その他諸々の雑貨家具を入れても優に7、8人がくつろげるのだから驚きだ。

庭沿いの縁側を進みつつ、真美は圧巻の思いで手入れされた美しい庭から視線を外した……ふと、足を止めた。

襖を開けて明日香の部屋に入ると、先にお茶菓子の饅頭を食べていた明日香とリドリーが顔をあげた。テーブルを挟んで真美に近い方にリドリーが、テーブル向こうに明日香が腰を下ろしていた。テーブルには色とりどりの饅頭が置かれ、急須、電気ポット、茶碗がその横に置かれていた。

「遅かったね、真美ちゃん。何かあったの？」

「先に食べてイルヨ」

「ごめんね。ちょっと忘れていたことがあって……」

『ねえ、真美。さつさとあの結界を張った馬鹿を教えて貰えないかしら。さつきから身体が疼いて仕方がないのよ』

物騒なことを言っている姫子を無視して、後ろ手で襖を閉じてリドリーの横に腰を下ろした。テーブルに置かれた饅頭に手を伸ばす。「忘れていたことって？」

話を続けつつ、明日香は急須にお湯を注ぐ。一杯分入ったら蓋を閉じて、急須を持って軽く回す。こうすると、中の茶葉が程よく踊り、茶の味が美味しくにじみ出る。ただ、やりすぎると出すぎて苦味が強くなってしまうのだが。

数秒回してから、零れないようにゆっくり茶碗に注ぐと、お茶の芳しい匂いが立ち上った。本当なら、茶碗もお湯で温めてからの方が良いのだが、別に熱いのが好きでもないなので、構わず注ぎ切る。

「えっと、今は私の中に姫子がいるでしょ。それで、姫子が入ったままでも大丈夫なのかなって思ってた……」

「——っあ——！」

一瞬、明日香の動きが止まって、薄桃色の小さな唇から聞くに堪えない汚い悲鳴が上がった。その声にビクッと肩を震わせたリドリーを尻目に、真美はさつと茶碗を掠め取った。茶碗自体が熱くなっ

ているので、茶碗の口辺りを掴んで、そつと息を吹きかけると、より濃厚なお茶の匂いが香った。

うん、いい匂い。家で使っているやつより絶対高いよ、これ。

音を立てて、唇を湿らす程度にお茶を啜る。もう少し冷めてからでないと、まだ飲みそうにない。

「わ、忘れてました！ ご、ごめんなさい！ 大丈夫だった!？」

明日香が机に身を乗り出して真美へ顔を近づけてきた。彼女の両手は忙しなく急須を握っては持ち上げ、下ろしていたりした。気の毒に思ってしまうくらい、狼狽しているようだった。その横で、リドリーは首を傾げながら饅頭を頬張っていた。

真美は苦笑しながら、安心させる意味を込めて、手をパタパタと左右に振った。

「大丈夫っていうか、私よりもあの御札がヤバイことになってるよ」

『ふん、あの程度の札でこの私を止められるものか』

えっへん、と姫子が胸を張っている様が、ありありと真美の脳裏を過ぎった。あながち妄想ではないかもしれない。

なぜか姫子の機嫌も治ったみたいだ。真美は苦笑まじりに頬を掻いた。

「お、御札が、ですか？」

信じられないといわんばかりに明日香は頭を振った。ただでさえ形よく大きい眼がさらに大きく開かれていて、ちよつと怖かったりする。

「ほんとほんと、あんな程度の御札ぐらい平気だつてさ」

「うそ……」

「嘘じゃないって……それと、御札が真っ黒に焦げちゃったけど、いけなかった？」

「札が焦げた!? 本当なの!？」

いよいよ化け物を見るような気味の悪い視線が向けられた。ちよつと、悲しかった。

けれども、それが真美へと向いているわけではないので、それほ

ど辛くはなかった。

「……うん、そうだけど、それがどうかしたの？」

その言葉に、明日香の両目から負の思いが消えた。と、同時に、呆れにも似た視線が混じり、すぐに消えた。

「……そうだよ、真美ちゃんはその御札がこういうものなのか分からないもんね、なら仕方ないよね」

「……姫子、あれってそんな凄いものなの？」

『知らん。だが、あれには強い霊力が込められていた。少なくとも、100や200程度の悪霊が押し寄せてもビクともしないぐらい強固な結界が張られていた……並の霊能力者では、10年掛けても張れないぐらいのな』

「へえ、それってすごいね」

100や200と呼ばれても、真美にはどれほど凄いのか想像が付かなかったが、とにかく凄いということは分かった。

『……お前、絶対理解してないだろ』

「………」

『分かりやすくいうとだな……あの餓鬼の悪霊が100、200束になっても、どうにもできないくらい強力な結界だということだ』

「あ、なるほど……それってすげー……」

『なんだ、今頃気づいたのか？』

胸の奥で波紋が広がる。馬鹿にされて悔しいとは思ったが、からかっているだけだろうから、何も言わないことにした。

「……また姫子さん？」

突然姫子と会話をした真美を見て、明日香は不服そうに頬を膨らませた。慌てて、真美は首を横に振った。

「あ、その、ごめん」

膨らんだ頬にさらに空気が充填された。

「もう、前にも言ったけど、姫子さんは悪霊なの！悪霊の言うことなんて聞いちゃ駄目、いつか呪い殺されちゃうかもしれないからね！」

「う、ごめん、今度から気をつけるから……」

愛らしく怒る明日香に、真美は頭を下げた。

今では前みたいに怖がることはなくなったが、それでも明日香は姫子に心を許してはいない。それどころか、嫌っていると言っているくらいで、姫子の話をするとか機嫌が悪くなるのだ。

学校では周りの目も合って黙っているが、プライベートな場所だと今のように怒る。

しかも、真美と姫子が会話するのが特に嫌なのか、今みたいに真美が姫子と会話すると頬をリズミたいに膨らませてしまう程だ。

耳が痛くなるくらい繰り返して姫子に心を許すなと話す明日香を見て、真美は苦笑した。明日香は本当に心から真美のことを思っているから、邪険に扱えないのだ。そこまで思われて嬉しいと思う反面、ちょっと五月蠅いと思ってしまったのは秘密だ。

それに、明日香とリドリーに、悪霊と戦ったこととか色々秘密にしていることがあるので、その後ろめたさも理由の一つだ。

無意識に零れるため息。

釣り上がる明日香の目じり。

いつのまにか横になって寝ているリドリー。

……あ、しまった。

「真美ちゃん！」

「だ、だから謝ってるじゃんか」

しばらく、明日香の説教が終わることは無かった。座布団を枕に居眠りしていたリドリーが起きたとき、真美は真っ白になっていた。

夜も深まり、静まり返った寢屋に小さな寝息が木霊していた。

……いいかげん、鬱陶しいな。おい、ちょっと起きてくれ。

……もう、何よ、眠いのに。

起こしてすまない。少し外の空気を吸いたい。

……はあ、もう、ちょっと外に出るだけだからね。

むくりと『真美』は布団から身を起こすと、お腹に寄せられたリドリーの足と、明日香に掴まれた袖を優しく退かして、立ち上がる。誤って二人の身体を踏まないよう注意しながら、襖を開けて身を滑り込ませた。

途端、ふわりと穏やかな夜風が『真美』の頬をくすぐった。思わず、頬が緩んだ。

「『ほう、いい夜だ』」

後ろ手に襖を閉めつつ、『真美』は縁側に腰を下ろし、両足を投げ出した。結構な高さがあるおかげで、地面に足が触れるようなことはなかった。

ジッと、眼前の庭を見つめる。真っ暗な陰は、月の光など全く意にも介していない。ただ、時折吹く風にその身を震わせながら、静かにそこに佇んでいた。

スーッと、深く息を吸い込む。独特の夜の空気が肺に染み渡っていく。ゆっくり息を吐くと、身体の中に残った熱が外へ吐き出されていくのが分かった。

顔をあげると、爛々と輝く月が『真美』を見下ろしていた。

「『……………そういえば、こうして月を見上げるのは何時以来だろうか……………』」

眩しい物を見るように、『真美』は目を細めた。『真美』の独り言が、吸い込まれるように夜の中を溶け込んでいった。

ふう、と『真美』はため息を吐いた。そして、気だるげに顔を横へ向けた。

「……………どうも、こんばんは」

そこには、アロハシャツに短パンという奇妙ないでたちの男が立っていた。『真美』よりも頭三つ分は高く、お兄さんというより、おじさんという方がしっくりくる男だった。

「『言いたいことがあるならさっさと話せ。こんな良い夜に無粋なやつだ』」

「……………あゝ、その、なんだ、すまん。ちょっとびっくりしちゃって

ね……隣、いいかい？」

「『好きにしろ。ここはお前の家だろ。いちいち私に了承を確認する必要はない』」

瞬間、男の肩がピクリと震えた。だが、男はすぐに『真美』の隣に腰を下ろした。『真美』の目に無精髭が伸びた男の横顔が映し出された。

……無言の一時が流れる。男も、『真美』も、時折風でざわめく庭の葉の音に、黙って耳を済ませていた。

「……どうして、そう思ったんだい？」

ポツリと、男は誰に言うでもなく呟いた。『真美』も、誰に言うでもなく、ポツポツと口を開いた。

「『目元がどこかの五月蠅い小娘と似ていたからな』」

「本当？ そう言ってもらえると嬉しいなあ……娘は母親似だから」

「『母親があいつの実物大か……五月蠅そうだな』」

「ははは、どちらかというと、あの性格は僕似ですかね……昔の自分とそっくりで、気恥ずかしいくらいですよ」

「『ふん、そうか』」

……また、空白が生まれて、今度は『真美』が口を開いた。

「『……で、娘が心配になって我慢出来なくなっただか？』」

ピクリと、男の肩が震えた。

「……あはは、ばれていましたか」

男の乾いた笑い声が夜家に響く。『真美』はそんな男の姿をつまらなそうに一瞥すると、ふう、とため息を吐いた。途端、空気が張り詰めた。

「『……それで、どうするつもりだ……殺^やるか？』」

その言葉と共に、ゾワゾワと、『真美』の纏う空気が変わった。かすかに流れていた風がピタリと止まり、ざわざわと喚いていた木の葉のせせらぎが一斉に動きを止めた。

瞬間、男は自分が死んだと錯覚した。『真美』から発せられた濃厚な死の気配に、不覚にも息を止めてしまった。

だが男は流れるように素早くズボンのポケットに手をつ込み、自身の身体を淡い白光で覆った。

同時に、タイミングを見計らったかのように、『真美』の纏う空気がガラリと戻った。

「『もつとも、こっちは戦うつつもりはないがな。出来ることなら、その靈力の詰まった札を下ろしてほしいのだが』」

「……でしたら、いきなり殺気をぶつけないでくださいよ」

男は言われるがまま、ポケットから出した札をまたポケットにねじ込んだ。寸でのところで攻撃しなくて良かったと、男は心の底から思った。

あのまま戦っていたら、こっちも無事には済みませんでしたし。

男は胸中に過ぎた言葉を、口に出す寸前で思いとどまった。

ふう、と二人は、大きくため息を吐き、肩の力を抜いた。再び、夜風が囁き始めた。

「……私はあなたが恐ろしい」

「『それが普通だ』」

「本当に、どうして娘があなたの隣に平気で居られるのか、皆目検討も付かない」

「『私の隣ではなく、『真美』の隣に立っているから平気なだけだ。それに、ハエがいくら騒ごうが、私にとっては鬱陶しいだけでどうということはない』」

『真美』のあんまりな一言に、男は思わず苦笑いを浮かべた。

「……ハエ、ですか。ははは、経験が浅いうえに小学生とはいえ、仮にも上級靈能力者ですよ」

「『それが？』」

「それが、って……」

「『あれはなんて言ったかな……そうだ、どんぐりの背比べみたいなものだ』」

いよいよ男の苦笑まで引き攣る。だが、男はすぐに無表情に戻ると、ごほん、と一息咳を入れて合間を作った。

「……そろそろ本題に入ってよろしいですか？」

「『好きにしろ』」

「では……突然でなんですが、あなたは霊力分布図というのはご存知ですか？」

『真美』は首を振った。記憶の中を探っても、それらしい単語は出てこなかった。男もそれは予想済みなのか、ふむ、と頷いた。

「要は空气中に四散している霊力の濃度を測った地図のことですよ。濃度を測って、悪霊発生の時期や場所、悪霊の強さを観測するためのものだと思います」

「『……で？』」

「その霊力分布図で、最近数値が異常に増加しているのを観測しましてね」

「『それが私だったと？』」

再び、男は苦笑して首を横に振った。

「嬉しいことに、どうも違うようです」

心底安心したかのように話す男に、『真美』は思わず笑い声をあげた。見た目相応の愛らしい姿に、男は憮然とした様子で唇を尖らせた。

「笑わないでください」

「『あはははは、いや、すまない。あんまり予想外だったので、つい、な』」

「仕方ないじゃありませんか。あなたと戦うぐらいなら、悪霊100体と戦う方が何倍もマシですよ。それと話を戻しますからね」

はあ、と『真美』は呼吸を整えた。数秒、男は目を閉じて深呼吸した後、ポツリポツリと話し始めた。

「始めはこの場所、石黒地区でした」

「『ここが？』」

「はい。霊力濃度の爆発的上昇に低級霊の発生数増加。それによって一般人の被害が増加し、それが悪霊の力となってまた新たな悪霊を生む」

「『まさに悪循環だな』」

「ええ。国家レベルで対処を進めていますが、異常は今や日本全国に渡って広がり始めていて、どうやら局所事変ではないようなんですよ。最高平均が全国的に軒並み記録更新。いつ、凶悪な悪霊が発生してもおかしくない状況です」

『真美』は首を傾げた。

「『ただの自然現象ではないのか？ 空気中の霊力は周期的に増減を繰り返すし、たまたま増加しているだけではないのか？』」

男は首を横に振った。

「それにしては数値が高すぎます。それに、周期的に見れば、今年はずしろ平均より低いはずです。それなのに、過去30年の記録を更新し続けている。これはむしろ」

「『何が原因で起こっている？』」

男は疲れたようにため息を吐いた。いや、実際に男は疲れていた。連日連夜発生する悪霊の事件。対応は後手に回り、寝る暇はおろか食事をゆつくり取る時間すら惜しいという状況だった。気絶するように眠ったことも、ここ数週間何度もあったのだ。

「そう考えるのが妥当ですね。ただ、それが何なのか分からないですし、今は動き出したカテゴリーAランクの悪霊の相手です。手一杯です。原因が分かったところですぐにはどうにも出来ませんけど」

「『ふ〜ん……で、それを私に話したという事は、私に力を貸せということか？』」

『真美』は面倒くさそうに髪を掻き毟った。

姫子の力は、確かに恐ろしい。だがそれを武器にすることが出来たら、これ以上に心強い武器は存在しない。姫子自身、自分の実力を客観的に理解しているから、それがよく分かった。

悪霊を倒す剣。身を守る盾。大切なものを守る鎧。使い道はいくらでもある。しかも、臨機応変に使い分けることもできるのだから、重要性は考える必要も無い。

男はひとつ頷いた。

「はい。あなたの力で、どうか娘たちを守って欲しいのです」

………姫子……。

胸の奥に広がった波紋に、『真美』は鬱陶しそうに首を横に振った。

「『は、娘か……その娘は確か、上級霊能力者ではなかったのか？自分の身ぐらい自分で守るだろうよ』」

『真美』の言葉に、男は悲しそうに首を横に振った。ズキリと、真美は痛む心に手を当てた。

「……あの子には確かに才能があります。このまま成長し、芽を育てていけば、世界でも一流の霊能力者になれるでしょう」

だが、『真美』が続きを遮った。

「『どれだけ才能に恵まれているとはいえ、初潮も迎えていない……まあ、迎えているかもしれんが、所詮は生娘だ。経験が圧倒的に不足している』」

「おっしゃるとおり。あの子には実践がどういうものなのか、まだ分かってはおりません。一人で戦う恐怖を、心細さを、辛さを乗り越えるほど、あの子の心は強くありません」

ふう、と男は両手で頭を抱えて俯いた。そのため息には、疲労とは別の何かが詰まっているようだった。

その男の姿に、『真美』は何も言わなかった。堂々巡りの悩みに口出しするほど『真美』はお人よしではないし、真美には受け止めるだけの人生経験が無かったから。

男はゆらりと顔をあげると、『真美』に縋るような視線を向けた。まるで悪徳金融に借金しようとしているサラリーマンのような面構えだと、真美は思った。

だが同時に、力になりたい、友達を守りたいと真美は思った。それは蠟燭の炎のように儚く消える小さな思いではあったが、一秒、また一秒時間が経過すると共に炎の揺らぎは激しくなっていき、いつしかはつきりと助けたいと思うまで燃え上がっていた。

………姫子！

「『……………はあ、分かった』」

その真美の思いを十二分に理解していた姫子は、欠伸一つ立てながら床板を軋ませて立ち上がると、のそりのそりと踵を翻した。

男も、ゆつくりと立ち上がって、襖に手を掛けた『真美』の背中を見つめた。

「『力は貸してやる。私の目が届く範囲に悪霊が出たら、私も戦おう。だが、お前たちの指図は絶対に受けん。いくら私が居るとはいえ、真美自身には知識も力も無い素人だからな。下手な横槍されてはかなわん』」

男は静かに頭を下げた。

「……………ありがとう」

「『謝るくらいなら始めから頼むな。なんでわざわざお前たちの味方なんぞしなければならんのやら……………』」

『真美』は振り返ることなく襖を開けて身体を滑り込ませると、後ろ手に襖を閉じた。

「お休みなさい、悟郎さん。姫子には私からも言うておくから、気にしないでください」

という言葉を残して。

「……………へ？」

後には呆気に取りられた悟郎一人が残され、朝日が昇り、部屋から起き出して来た明日香に声を掛けられるまで、そのまま立ち尽くしていた。

悟郎さん、驚いていたね。

話し方は完全に私だからな。真美を通して話すぐらいなら、負担も無いということに思い至っていなかったのだろう。

あはは、普通思わないと思うけど。

まあいい……………ところで真美、戦う心の用意は出来ているのか？
出来ているわけじゃないじゃない。

……おい。

いいじゃない。私と姫子は一心同体なんだから、いざとなったら無敵の姫子様がどうにかしてくれるから。

……はあ、もういい。私はお前の判断に任せる。もう夜遅いから寝ろ。

……ちよつと、姫子起きて欲しいって言ったんじゃないの。知らんな。

姫子！

寝ろ。

……もういいわよ。はいはい、寝よう。お休み、姫子。

お休み、真美。良い夢を。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……ねえ、姫子。

……なんだ。

ふとね、今までのことを振り返っていたの。考えたら私達って、出会ってから二ヶ月も経っていないんだな。って。

……今にして思えば、私もお前も不可思議な出会い方をしたんだね。

どこにでもある小学校の一教室にいた一人の少女が、全知全能の神すら頭を垂れて額を地面に擦り付ける程の圧倒的で絶対的な邪神の姫子様に出会った。

ちよつと自信過剰過ぎだと思わない？

いったいどれだけの偶然が重なれば今の結果にたどり着けたのやら。

……そう考えてみれば、凄い偶然だね。

そう思っだろう。

.....
.....
.....
.....
.....
.....

あ、今更すぎて聞いてなかったけど、姫子ってどうして学校にいたの？

……本当に今更だな。

いいじゃない。ねえ、どうして？

……別に理由は無い。300年ぶりに外に出られたから、面白いことはないかと外をうろついていたただけだ。

……っていうことは小学校に来たのは、もしかしてたまたま？

そうだ。

そうか、ぶらり旅ってやつか。

ぶらり旅？

目的がない旅のことだよ。ただ、気の赴くままにぶらりぶらりと旅をすることを、ぶらり旅というの。

ぶらり旅……か。そうだな、言われてみれば、確かにそうだ。

さしずめ、怨霊少女ぶらり旅ってところかな。

ふむ……怨霊少女、か。邪神少女ではないのか？

それは最初に考えたけど、語呂がどうもしっくりこないの。それに、見た目は邪神に見えないんだから、怨霊少女っていう方がしっくりくるでしょ。

……まあ、そうだな。うむ、怨霊少女ぶらり旅、か。

ぶらりと寄った私の中だけど、これからよろしく、姫子。

……色々言いたいことはあるが、まあいいか。そうだな、よろしく、だな。

うん、よろしく。

あ、あ、お休み。
お休み、姫子。
。 。 。 。 。 。
。 。 。 。 。 。

怨霊少女ぶらり旅（後書き）

これにて、怨霊少女ぶらり旅をいったん終了させていただきます。
一回の投稿の幅に開きがあつてすみません。思い返せば、かれこれ半年経っているですね。時間が経つのは早い。

以下、メタな話。（嫌な方はブラウザバック）

今回の話で一応話を終えますが、厳密には最終回ではありません。
あくまで第一部完！ みたいなものです。

次の話の舞台は、真美達が中学生になってからの話です。ぶつちやけ、小学生は幼すぎるから。

今の小学生つて、ヘンな部分だけ異常に成長しているんですよ。
論理と理性とか知識とかそういうのじゃなくて、”らしさ”がないんですよ。

そのへん、真美達はそのヘンな部分が異常に成長しているんですよ。
よ。下手したら大人が思っている以上に物事を考えていたりいなか
ったり。

でもやつぱり子供なんですよ、真美達は。色々未熟なんですよ
ね、やつぱり。

真美は自分が怪我したら、周りの人がどう思うのか分かっていま
せんし、明日香はなんでも一人で考えようとするし、リドリーは精
神的依存の兆候を見せているし。

一見絵に描いたような仲良し三人組ですけど、すごく不安定なん
ですよ、この三人。

正直、ホラーってジャンルがどういうものか今でも説明できませ

ん。ただ背筋が震えるような話が怖いというのなら、きっとこの話はホラーではないでしょう。

もしかしたら、第二部は現代ファンタジー系になるのかもしれない。このままホラーでいくのかもしれない。

ここまで読んでくださった皆様、半年の間応援していただき、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2775f/>

怨霊少女ぶらり旅

2010年11月27日21時55分発行